
FILESTARD ~現代編~

花唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FILESTARD 〱 現代編〱

【Nコード】

N0428M

【作者名】

花唄

【あらすじ】

そしていつか、君と見た夢の続きを。

< 第1話 > 【はじまりの日】

「この席か。」

一番後ろ。

窓際から、三番目。

「…よいしょ。」

席に座る。

当然ながら、新しい座り心地だった。

とりあえず思うこと。

「一番後ろでよかった。」

身長190cmを超える僕が、一番後ろ以外の席に座る。

そうすると、まあ…。

後ろにいる人から『前が見えません』的なクレームを受けるハメになるのは

自然の摂理というものでして。

「……。」

そんなわけだから。

僕はいつも、一番後ろの席。
中学に入ってから——ずっとです。

と…こんな輝かしい日に、愚痴ばかり言っちゃいけない。
ポジティブにいこう。

「秀輝^{ひでき}くん。」
隣の席に座ってる少年に話しかける。

「今年も、よろしくね。」
「ええ。こちらこそ。」

彼の名は、黒沢秀輝^{くろさわ}くん。
小学校、中学校と一緒。
更に、一緒のクラスになること…通算七回。
今回で八回目になるわけだが。

一言で言えば、親友。
二言で言えば、相棒。
更に言うならば——うゝん…何だろ？
とにかくまあ、僕にとって凄い存在の人です。

「おゝい、ハルちゃん！」

笑顔で手をブンブン振りながら、こちらに近付いてくる人物がいた。
これまた、よく見知った顔です。

「えへへ…一緒のクラスだねゝ」
「…だね。」

彼女の名は、神田日和^{かんだ ひより}。

この人とも、古くからの付き合い。
やはりまあ…親友と呼んでいい存在じゃないでしょうか。
いつでも笑顔を絶やさない、凄い人です。

「ヒデくんも、よろしくね」

「よろしくお願いします。」

にこやかな笑みを浮かべる日和に、無表情で返事をする秀輝くん。

「でもって…あーちゃんも、よろしく」

「はい、よろしく。」

これまた無表情に、そして無愛想に返事したのは…

『あーちゃん』こと陣内飛鳥^{じんない あすか}さん。

現在、僕の前の席に座っています。

日和とは小学校時代から、かなり仲が良さげ。

僕や秀輝くんとも、まあ多分…良さげ？　なのかな。

怒るとすぐに手が出てしまう、ちよっとバイオレンスな性格の人。

「しかしまあ、こうしてこの四人が一緒のクラスになるとはね…」

「

「これもまた、運命ってやつかな。」

「…ただの偶然じゃない？」

「しかも、三人がこんな近くの席同士だなんて！　ああ、やつぱ
運命だよ。

…っていうか、なんで私だけ離れちゃってる!？」

「大丈夫…。離れていても、心はいつも傍にあるから。」

「離れてるつつつても、あんた…あたしの斜め前の席じゃない。」

「うん、そうだよね。離れていても、私のこと…忘れないでね。」

「うん…忘れない。時々、思い出す。」

「…時々なのね。」

チャイムが鳴り、新入生たちはみんな自分の席に座った。

これからいよいよ、記念すべき一限目の授業…。

——って、いきなり授業は始めないか。

「まずは…何から始まるんだっけ？」

……

小学校時代、そして中学校時代に想いを馳せる。

そして、思い出を辿ってみる。

「……………」

結論が出る前に、思考は一時中断した。
教室のドアが開いたから。

そして、スタスタと教壇の上に登る人物。
ロングヘアの、綺麗な女の人です。

「えーっと…。皆さん、はじめまして！」
容姿のわりには、ちよつと幼い印象の声。

「私が、このクラスの担任を務めます…。」

……

「安曇祥子、あずみしょうこといいます。みんな、よろしくね。」
黒板に黄色のチョークで、『安曇祥子』という文字。
あれで、アズミと読むのか…。

「というか…どうして黄色？」

インパクトか。

第一印象に、インパクトを追求した結果なのか。

< 第2話 > 【来訪者】

「で、どうだった？ 入学式。」
「うん…。」

初登校も終わり、自宅にて家族揃っての昼食タイム。
今日のメニューは、キムチチャーハン。

キムチチャーハン。

その名の通り、チャーハンの中にキムチをぶち込んだ代物なんです
が。

これがなかなか…凄い組み合わせで。
とある料理の先生も、『コイツは料理界のベストオブカップルです
な！』

と絶賛していたほどの一品らしい。

「実に入学式、って感じの入学式だった。」

「ふ〜ん…。」

姉さん和他愛もない会話をしつつ、食事を進める。
食事中は、このぐらいの他愛なさが丁度いい。

「由奈^{ゆな}の方はどうだった？ 始業式。」
隣に座ってる妹に話しかける。

ちなみに妹の皿には、他のメンバーよりもちよつと大盛りな感じのキムチチャーハンが盛られている。

「いやー、うん。別に、普通だよ。」

「…そうか。」

「誰か知ってる人とは、同じクラスになれた？」

そう質問するのは、この家のトップである片桐まりやさん。その隣に座ってる、愛あいさんの母親でもあります。そして、僕と由奈の母さんの姉さんでもあります。

「あつ…うん。鈴音すずねとは一緒のクラスみたい。」

「あら、そうなの？ よかったじゃない。」

『鈴音』とは、中一になったばかりの頃から由奈と仲良さげにしている女の子。

少しはっちゃけた雰囲気はあるものの…礼儀正しくて、なかなか好印象な人です。

まあ、会話らしい会話をしたことは全然ないんだけど。

「榛名はるなも確か、秀輝くんや日和ちゃんと一緒になったのよね？」

「…なりました。」

「えっ！？ あんたまた、黒沢くんと一緒のクラス？」

……

そんな会話をしてる最中、ピンポンという音が耳に届く。言わずもがな、それは我が家に来訪者がやって来たという報せ。

「どうも先輩！ こんにちは。」

「はい、こんにちは。」

来訪者は、僕のよく知る顔だった。

あまの だいち
天野大地くん。

由奈と同じく、桜雪中学校の生徒であり…

由奈と同じく、今日で中学二年生。

『天』と『地』が両方入るという、なかなかスケールの大きな名前をしてるんだけど…。名前のわりに、体格はかなり小柄なほうで。しかしながら——運動神経は抜群。

「今日はまた、どういった用件で？」

「それがですね……聞いて驚いて下さい！」

そう言われると、意地でも驚きたくない。

僕は呼吸を整え、精神を集中させることにする。

「事件ですよ、事件！」

「…事件？」

大地くんは、明らかに興奮している様子。

「ちょうど退屈な日常に飽きてきたところだし、是非その内容を聞かせてほしい。」

「…わかりました。聞いて驚かないで下さい！」

そう言われると、意地でも驚いてみたくなる。
僕は呼吸を整え、精神を集中……ん？
これじゃ、驚かないための準備と一緒にか。

うん…。

驚くための準備つてのも、なかなか難しいもの。

「幽霊を見たんですよ！ 幽霊！」

「…なに？」

「りゅうがしら龍頭公園の中ですよ！ 間違いなく、幽霊！」

……

「幽霊。」

「…はい。」

……

「大地くん。」

「…はい。」

……

「それは多分、幽霊っぽい生きてる人間だと思う。」

「…へっ？」

「ということで、さよなら。」

話を終了させた僕は、大地くんを背を向け
二階へ上がるため階段へと向かう。

「ちょちょちょっ、ちょっとストップ！」

「…なに？」

「何言つてんですか！ あれは人間じゃありませんよ！
絶対…絶対に幽霊です！」

……

「大地くん。」

「…はい。」

……

「幽霊つてのはね、昼間は出ないもんなんだよ。」

「…へっ？」

「お月様と一緒に、夜しか出てこないの。 ということで、さよなら。」

話を終了させた僕は、大地くんを背を向け

二階へ上がるため階段へ向かう。

「ちよっ、ちよっ、ストーーーーップ！！」

「…なに？」

「そういう決めつけはよくありませんよ！ 昼間に出る幽霊も、
きっといるはずですよ！」

ふと気配を感じ、視線をチラッと斜め後ろにやる。

姉さんと由奈が、キッチンから顔だけを出し…

何事かといった感じで、こちらの様子を窺っていた。

「そうかな…。」

「ってゆうか、昼間だってお月様が見える日はありますよ?」

< 第3話 > 【青いベンチ】

——そんなこんなで、僕は今。

こうして自転車を走らせ、龍頭公園目がけて爆走中。
右側には、大地くんが並んで走っている。

僕は自転車で…大地くんはランニングだけど。

「龍頭公園か…。」

近所にある公園の一つだから、多少の馴染みはある。

確か、滑り台と…やたら大きなジャングルジムがあったよね。

「あの、ハル先輩。 もうちょいペース落としてくれませんか？」

「…だらしないな。」

ちよつとバテ気味な後輩に頼まれ、少しペースを緩める。

スピードはあるけど、体力はそれ程でもない大地くん。

そのため、部活ではもっぱら短距離を専門にやっています。

「そんなことから、幽霊に出くわしちゃったりするんだよ。」

「いや…関係ないと思います。 それは。」

「も、もしかた幽霊が現れたら——どうしましょう？
先輩！ も、もしもの時は…お願いしますよ！」

「ん…わかった。」

男らしさを微塵も感じさせない台詞を吐きつつ、大地くんは後ろから僕の腰に張り付くようにして移動している。

既に目的地は、目と鼻の先。

というか、あと数mの距離だ。

そして、問題の公園内に足を踏み入れた。

「……。」

周辺をざっと見渡し、まず気になったこと。

青いペンキが塗られたベンチに座る、一人の人物の姿。

外見からして、恐らくは『お婆さん』と呼んで

差し支えない年齢の人だろう。

「……。」

どこかで見たような気がしなくてもないが…。

まあこの町の人間ならば、いつぞやに見かけたことがあったとしても別に不自然なことじゃないか。

「大地くん。まさか、幽霊って…あの人のこと？」

尋ねつつ、僕はお婆さんの姿を凝視する。

とぼけたような顔をしているが、どう見ても彼女はリアルな存在。体が透けてるとか、足が無いとか影が無いとか…そういうの、一切

なし。

「いや、全然違いますよ。」

大地くんがキツパリ答え、一安心。

「んと…じゃあ、どんな感じの人相？」

「え…っと…ですね。」

それにしても、あのお婆さん。

こんな真っ昼間に、あんな所で何をしているのだろう。

誰かを待っているのか…。

あるいは、ただの日なたぼっこ…？

春はやっぱり、日なたぼっこに限るよね。

「すつげー髪が長くて、黒くてですね。んで、全体的に

白っぽい服装で…。そして何より、目つきがハンパないです。」

「なるほど。」

大地くんの言葉を元に、頭の中で幽霊の姿を思い描く。

長くて黒い髪。

白っぽい服装。

ハンパない目つき。

「……。」

ハンパない目つきって部分だけは、自分なりの想像で当てはめるしかないよね。

「コバンザメだ！」

「ひやああうつ!?!」「…ん?」

突如、僕らのすぐ近くから聞こえた叫び声。

腰に回されていた大地くんの腕の力が、ギュッと強まる。

「……………」

声のした方を見ている。

するとそこには、大地くんよりも低い背丈をした

小学校低学年ぐらいかと思われる女の子の姿があった。

「おばあちゃん、おばあちゃん、コバンザメ発見!」

姿を確認した刹那、女の子はダダッと駆け出すと…

あのお婆さんのところで足を止め、そんな台詞を発した。

「…ナイス発見。」

「ナイス発見!」

二人はどうやら、顔見知りの様子。

もしかすると、お婆さんはこの子を待っていたのかも…。

「…ベリーナイス発見。」

「ベリーナイス発見!」

「……………」

幼き少女と年老いた老婆の会話に、意味などを求めてはいけなかったとえ意味不明な会話でも、彼女らには何かしら通じるものがあるのです。

そういうもんです。…きっと。

「コバンザメって…ひょっとして、俺のことですか?」

「多分、そうだと思う。」

<第4話> 【Little Message】

見ててしばらくは飽きなさそうな二人をそのままにし、
僕らは公園の更に奥を目指す。

「……………」
というか、あの二人…あのまま放つといて大丈夫なのかな？
ちゃんと家に帰れるのかな。

「ここの裏です。あの、その…例の幽霊を見た場所。」
大地くんが震える指を向けた先。
そこには、悠然と佇む公衆トイレの姿があった。

どうでもいいけど、『例の幽霊』というのは…なんか紛らわしい。

……

「って、そんなスタスタ行かないで下さいよ！
こっちにも、心の準備というものが…。」
今度は僕の左腕にしがみ付いてくる——コバンザメこと天野大地く
ん。

「……………」
あと十回しがみ付いてきたら、君のあだ名をコバンザメにする案…
本気で検討させてもらう。

大地くんを半ば引きずるようにしつつ、トイレの裏側に到着。さっそく、それらしきものの姿がないか目を凝らしてみるが…。

……

「これといって、異常なし。」

「…ホントですか？」

目を瞑ってた様子の大地くん。

恐る恐るといった感じで、瞼を開いてくれた。

「いや…待てよ。」

「わあああつ！？ ま、待って！ 言わなくていいです！」

「いや、そんな別に…。」

「先輩、それは幻です！ 幻想です！ イリユージョンです！ だから、何も言わないで〜！」

「せやっ。」

「あがふっ！？」

この世には、ショック療法と呼ばれる医療手段がある。

大きなショックを与えることにより、その人の体に存在する意識的に変動しにくい部分を…こっ、ガツと変えてやるわけだが。

「い、今のは結構…入ってましたよ？」

「うん。 そんな気がする。」

彼の胸部目がけて放たれた、掌底の一撃。

もちろん加減はしたものの…予想より、ちょっと手応えあったかも。

「ほら、これ。」

「んん？ …何かあります？」

僕が指差した先を大地くんはジーツと見る。

指差した先は、トイレの裏の壁の一部分。
かなり隅っこの部分。

そこに、非常に小さくて見づらいものではあるが…
黒いインクで、何かしら文字が書かれている様子。

…

「三日後の午後12時、峰岸デパートの屋上へ来い。
読んだらすぐに、この文章は消していくこと。」

3,0の視力を誇る僕が、そのミクロサイズの文字を読み上げる。
ちなみに大地くんは…相当目が悪い方。

「まさか…幽霊からの伝言でしょうか？」

「どうだろう。」

三日後というと、今日が4月7日だから…。 4月10日か。

峰岸デパートというのは、町外れにある大きなデパートの名前だ。
僕ら家族も、それなりに利用させてもらっている。

まりやさんがパートで働いてる場所でもあるし。

「……。」

壁の文字があつたすぐそばに、雑巾らしき物を発見。

どうやら、これで文章を消していけ——ということらしい。

「ちゃんと濡れてるんだね。 ……雑巾。」

昨日も一昨日も、そして今日も。

天気は晴れ…時々曇りはあったはず。

つまり、自然に濡れたとは考えにくいわけだが。

「ど…どうします？ 先輩。」

「どうするって？」

数回キュッキュツとしてやると、文字たちは跡形もなく消え去った。

「だから、その…三日後、デパートに行ってみます？」

「うん。ま…来いと言われたんだから、そりゃ行ってみるのが筋ってモンでしょう。」

それよりも、この雑巾はどうすればいいんだろう。

空はオレンジ色に染まり、お日様はもう眠りかけ。
カラスもカーカー鳴いていて。

窓から見下ろす風景に、乳母車を押して歩くお婆さんの姿が見える。

「……。」

お婆さん——といえば。

あの二人は、無事に家まで帰り着いたのだろうか？

…うん。

念のため、後で公園の様子を見に行こつかな。

「……。」

そんなことを決意しつつ、僕は視線を室内に戻す。

視線の先には、推理小説を読む一人の若者の姿。

秀輝くんは、はっきり言って読書が趣味だ。

趣味というか…もはや、生き甲斐？

ヒマさえあれば、本ばかり読んでる姿が目撃されてる。

「ねえ、秀輝くん。」

名前を呼んだが、ピクリとも反応はない。

しかしながら、何をしている時だろうと…他人の話を

決して聞き逃すはずがないのが彼。

僕は構わず言葉を続ける。

「秀輝くんはさあ…幽霊って信じる？」

この家に遊びに来た直後、昼間の出来事は彼に話している。

あまりベラベラ他人に話すことじゃないと思うけど…

ま、この人なら問題ないと判断したので。

「どちらとも言えません。」

「…むつ。はっきりしない答え。」

「いないという証明も出来ませんからね。幽霊というものは。」

「…なるほど。」

「ですが、それならば…ネッシーも雪男もサンタクロースも、同じ類に当てはまるものですからね。」

「うん。」

「まあ、言い出すとキリがないように思います。　そういったものは。」

「…そっか。」

ネッシーに雪男に、サンタクロースか。

奴らも確かに、神秘のベールに包まれた存在だよね。特に…サンタクロース。

「それにしても、秀輝くん。」

「はい。」

「僕ら…高校生になったんだよねえ。」

「そうですね。」

……

「思えば、長い道のりだったよね。」

「…まだまだ、先は長いですよ。」

もうすっかり見慣れたはずのこの部屋——と、秀輝くん。今改めて見てみると、なんだか…。

なんだかやっぱり、昔とはどこか違うなって感じる。

「……。」
うん…。

何なんだろうね、この気持ち。
これがもしや、青春っていうやつなのだろうか。

<第5話> 【悪魔の声】

——Side ???——

「…うにゃ？」

妙な声を発しながら、ムクツと上半身を起こす。

数秒後、彼女——片桐愛は、自分が置かれている状況を理解した。

「眠っちまったか。…今、何時？」

時計に目をやると、針は1時12分を指している。

当然ながら、窓の外に見えるのは暗闇ばかり。

静寂に包まれた部屋の中で、時計の音だけが彼女の鼓膜を刺激する。

「ふわあゝ……あつ……と。」

大きく欠伸をしながら、両足を床に付ける。

そして立ち上がると、テーブルの上にあったりモコンを手取る。

……

「んんっ？」

テレビの画面と発せられる音に反応し、愛は自然と目を見開いた。

（これ…。なんか、昔見た覚えあるなあ。）

やっていたのは、アニメだった。

素人目に見ても、そのタッチが古いものであることは容易に想像が
付く。

” どうして…どうして逃げるのよ!?”

” もうすぐ、みんなが帰って来る。 そしたらあなたは、
とうとう人間になれるのよ!”

” …ごめん。 みんなには、本当に感謝してる。”

” 人間になりたいなんて言う悪魔の願いを
あんなに頑張って 叶えてくれるなんてさ…。”

「ん…。 なんかもう、クライマックス?’
ぼんやりとではあるが、愛はそのアニメのストーリーを
思い出しつつあった。

” でも、俺…。 やっぱ、いいんだ。”

” 俺はこのまま、悪魔として生きていく。”

” なっ…! ど、どうして!?”

「そっだそっだ。 どうしてなんだーっ。」

”確かに俺には、ロクな思い出なんてない。悪魔として生まれ、生きてきた中で…良いことなんて、全然なかった。”

”だからずっと、過去の事は忘れない…って。そう思ってた。”

「うんうん。」

”でも、違った。いや——忘れないってのは、本当の気持ち。

”

”けど…。忘れないけど…捨てちゃいけない。

苦しい思い出ばかりだろうと、それは…俺が生きてきた証なんだ。

”

その台詞が終わると同時に、画面が切り替わる。

そして、エンドロールが流れ始めた。

——Side 片桐愛——

「忘れないけど、捨てちゃいけない。だってそれは…俺が生きてきた証なんだあつ！…かあ。」

先ほど見たアニメの、最後の台詞。

なんだか、やけに心に響いたなあ…。

多分、昔にも聞いたことある台詞だと思うんだけど。

「それ…誰の真似？」
「のわっ！？」

向こうに見える薄暗い空間——食卓の方から、誰かの声がした。

「…なぐんだ。 由奈ちゃんか。」
「悪かったね、あたしで。」

そこにいたのは、我が妹である愛しの由奈ちゃんの姿。
まさか、この時間帯&この場所で会うことになるとは…。
お姉さん、ちとビックリしてます。

「なんか、目が覚めちゃってね。」
「…ふん。」

由奈はプイツとあたしに背を向けると、台所の方に歩きだす。
で、冷蔵庫を開けて…何か取り出してるみたい。

「ん…っ。」
ま、今日は学年が変わっちゃった日だからねえ。
いろいろ考えて寝付きが悪くなったりするのも、仕方ないかな。
由奈ちゃん…ああ見えて、結構デリケートだから。

持ってきた何かをテーブルに置き、更にスプーンを持ってくる由奈。
薄暗いから、よく見えないんだけど…。
どうやら、何か食べようとしてるみたい。

「こんな時間に…お食事？ 太るぞ、由奈ちゃん。」

「気にしないで。 ヤケ食いつてやつだよ。」

何を食べるのか気になり、あたしも食卓の方へ移動することにした。
テレビは——ま、付けっ放しでいいか。

「んんっ…？ 何をヤケになってるわけ？」

イヤなことでもあつたんだろうか。

「いや、そういう意味じゃなくて…。」

「夜景を見ながら食べるから、ヤケ食い。」

そう言つて由奈は、窓の外の暗闇を指差した。

……

「えゝっと、それよりも…何食べてんの？」

なんだか微妙な空気を打ち破るため、出来るだけ明るい口調で言つた。

「アンパンプリン。」

「…えっ？」

アンパン…プリン？

なんじゃそりゃ。

「あんことプリンが組み合わさってる。」

「へえ…。 美味しいの？」

「なかなか。」

あたしは、そのアンパンプリンとやらが入ってる
カップの中をよく観察してみる。

どうやらプリンの上に、ちよつと液体っぽいあんこが
かかっているように見えるけど…。

「……………」

しかしながら。

『パン』の要素だけは…見た感じ、まるつつきり感じないぞ。

「ちよいと失礼。」

あたしは、アンパンプリンが入ったカップを手にとった。

そして、そこに貼られてあるラベルを確認してみる。

「んつと、原材料名は——『ご想像にお任せします』っ!？」

そこで見た衝撃の事実により、あたしは結構な大声を出してしまった。

「ちよつと…! 返してよ、姉ちゃん。」

由奈が素早い動きで、あたしの手にあるカップを奪い返す。

「ダメっ!」

その刹那、カップを再び奪い返すあたし。

「こんな得体の知れない物、妹に食べさせるわけには…。

——っていうか、こんな物一体どこで買ってきたの?」

明らかに、普通の店で置いてちやいけないモンでしょ…。

「いや…今日、友達の家に行つて。で、その友達からもらった。

」

……

「うん。」

どついう友達持ってんのよ、あんた。

<第6話> 【Stream】

——Side 杉山榛名——

いつもと変わらぬ朝。

いつもと変わらぬ、朝食の風景。

…ではなかった。

「由奈、まだ起きてないの？」

姉さんとまりやさんの両方に問いかける感じで、僕はその疑問を口にする。

現在の時刻は、7時16分。

僕が朝の散歩を終えて帰って来るのは、だいたいこの頃合い。

そして、その頃合いとなれば…由奈はほぼ確実に

その意識を覚醒させているはずだった。

「そうね。いつもなら、もう起きてる時間だと思うけど…」

「あ。あの子なんか…昨日あんまり眠れなかったみたい。

夜中に目覚めて、一階に下りてきたみたいだしさあ。」

二人の言葉を聞きつつ、僕はお椀にご飯を盛る。

姉さんはこのくらい。

まりやさんはこのくらい。

そして、僕と由奈の分は…ちょっと大盛り目。

あまり似てない、とよく言われる兄妹ですが——その食欲旺盛ぶりだけは

よく似通っているようです。

「愛、ちょっと起こしてきてくれる？」

「んっ…そうだね。　ちよいと様子見に行くか。」

まりやさんに言われ、読んでいた雑誌をポンっとテーブルに置く姉さん。

そして立ち上がり、ドアを開け

「おわっ！」

「んっ…？　姉ちゃん、おはよう。」

——ようとした瞬間、反対側から別の人物がドアを開けた模様。その人物とは…僕の妹、杉山由奈。

……

「今日はなんだか、ねぼすけさんねえ。」

「うん…。　起きてすぐ時計見たとき、普通にビビった。」

姉さんの横をすり抜け、まりやさんと会話する由奈。

その目はどこかボンヤリとした感じがあり……。　なんかまだ、意識がここにあらずという感じがした。

「ねえ、ハル兄。」

「ん…なに？」

「昨日、なんかさあ…変な夢見た気がするんだよね。」

家族揃ったの朝食が始まり、間もない頃。

由奈は突然、そんなことを言ってきた。

「夢なんてのは、大概変なものだと思うけど。」

「いや…ま、そりゃそうなんだけど。」

ちなみに我が家の朝食は、純和風。

ご飯に味噌汁に、その他もろもろ——といった品揃え。
やはり日本人ならば、コレでしょう。

「すごい怖い夢だった気がする。」

「…ほう。」

由奈は目を下に向け、自分の肩を抱くような仕草をした。

「無理に思い出す必要ないよ。」

「…あながと。ま、大丈夫。」

僕がポンツと肩に手を置くと、少しホツとしたような表情。

「なんかね、ハル兄が出てきた。確か。」

「…へえ。」

「でね、襲ってきた気がする。あたしを。」

「…なに？」

……

「襲ってきたつてのは…どっちの意味？」

突如として、姉さんが話に割り込んでくる。

「どっち…って？」

「いや、ゴメン。何でもない。」

……

「……。」

まさか、あつちの意味じゃないだろうな。

あつちだとすれば…例え夢の中とはいえ、色々とマズイ気がしてならない。

「残念だけど、そつちの意味じゃないよ。」

僕に目を向けると、そう言い放つ由奈。

「……。」

やはり、そつちじゃなかったか。

ひとまず安心…。

——というか、まるで心を読み取られた感があるんだけど。

「堪らないね…。風の中を突き抜けてく、この疾走感。」

「そうですね。」

今日も天気は晴れ。

明るすぎて、逆に気持ち悪いくらいの快晴だ。

「おはようございます。」

ご近所のおじさんに、朝の挨拶。

しかしおじさん、パターゴルフに集中しているのか——返事をせず。まあ何にせよ…夢中になれるものがあるっていいよね。

「ん…っ。なんかこう、違うよね。

見慣れた景色のはずなのに……なんだか、新鮮に見える。」

桜雪高等学校の場所は、中学校のすぐそば。

つまりは、登校の際に辿る道筋も…大体が一緒。

当然ながら、目に映る風景もほぼ一緒となってしまうのだが——

「そんな感じしない？」

「ええ。気持ちはわかります。」

そして、その風景の一部ともいえる秀輝くんの姿。

新たな制服に身を包み、相も変わらず僕の隣にある。

「……。」

秀輝くん…か。

今更なんだけど、やっぱり不思議な人。

時が経てば、その不思議っぱさも自然と解明していくもの…

——と、勝手に思っていたものだけ。

なんだか全然…。　今も昔も、ずっと不思議な人のまんまだ。

「秀輝くん。」

「はい。」

「君ってやつぱり…不思議な人だよねえ。」

その言葉が言い終わると同時に、僕は自転車を止める。
なぜなら、信号が赤だから。

「…あなた程じゃありませんよ。」
「そうかな。」

< 第7話 > 【近所付き合い】

「どうも、おはようございます。」

「えっ？ あ…お、おはようございます。」

僕が挨拶をすると、ぎこちなく挨拶を返してくれた。
そのぎこちなさも、まあ当然――。

彼女と僕が声を交わすのは、これが人生初なのだから。

「僕、杉山榛名といいます。今後とも、よろしくお願いします。」
言いながら、軽くお辞儀をした。

彼女…新里美樹^{にいさと みき}さんは、僕の右隣の席の住人。
いかにも控え目というか、大人しそうな印象の人です。

「え、えっと…。私は、新里美樹つていいいます。
こ…こちらこそ、よろしく。」

「うん。よろしく。」

彼女は明らかに緊張している様子で、声が震えている。

首の向きをグルッと変え、僕は左隣の席へと視点を変える。

「そしてこっちが、僕の親友である黒沢秀輝くん。」
言いながら、その席に座ってる親友の肩にポンツと手を置いた。

「よろしくお願いします。」

「あっ…はい。よろしく。」

挨拶を交わす、秀輝さんと新里さん。

どんな場所においても、ご近所付き合いというのは重要なもの。
——とは、母さんが言っていた言葉。

とうとう、今日から本格的な授業が始まる。

記念すべき一限目の授業は……数学。

我らが担任である、安曇先生が担当する科目です。

「……。」

数学か。

はつきり言って、苦手な教科だ。

教科書を開けば、ページを埋め尽くすのは数字・数字・数字…。

まあ——数学なんだから、しょうがないけど。

更に高校の教科書ともなると、aやらbやらxやらといった英語まで次々とコラボレーションしてくるのだから堪らない。

「あの…杉山くん？」

少し気分が重たくなつてるところに、自分の名を呼ぶ声。
声の主は、隣の席の新里さんだった。

「何かご用ですか？」

「えーっと…。うん、まあ…」

恥ずかしげな表情に、どもり気味な口調。
一体、何を言いたいのだろうか。

……

彼女の机の上。

そして、クラスの皆の机の上。

それらに視線をやると…ピンと閃くものがあつた。

皆の机の上にはあつて、彼女の机の上には無い物がある。

「もしや、教科書を忘れてきた——とか？」

「ええと…。…はい。」

中々にわかりやすい授業。

容姿だけでなく、字も凄い綺麗だし…。

この先生、只者じゃないかも。

でも、一つ気になる事を上げるとすれば。

先生…なんかやたらと、黄色いチョークを使ってない？

黒板を埋める字の半分以上が黄色く見えるのは、気のせいだろうか。

「あの、杉山くん。」

「んっ？」

「ここの答え、間違えてるよ。…多分。」

新里さんが指差した先。

そこにあるのは、五つある中で僕がもつとも苦戦して解いた式。

「ここ、分数の割り算だから…反対にしないと。」

「……。」

——初歩的なミス。

それは認める。

しかし、前々から思っていたんだけど…。

なんで割り算の場合、上と下を逆転させねばならないんだろう。

……

「これでオツケー？」

「うん…オツケーかな。」

「そうね、オツケーみたい。」

新里さんに答えを再確認してもらったところ、返事が二つ聞こえた。

一つは新里さんの声だったようだが…。

もう一つは、別の人間のようだ。

「仲良いのね、あなた達。」

そう言つてクスツと笑みをこぼす女性は——安曇先生。

「いや…正直言つて、それほど仲良くはないです。」

先生の言葉に、僕は異議を唱える。

「そう？ でも、そうやって、机と机くっ付けてるじゃない。」

先生の言う通り。

確かに僕らは、机と机をくっ付けている現在状況だが…。

「これには、色々と訳があるんです。」

「フフ…そうみたいね。」

……

「……。」

怪しげな笑みを残し、先生は僕らの元を立ち去った。

「な、なんか…ごめんね。」

「んっ？」

そこで別に、あなたが謝る理由はないと思うが。

……

「ともかく、これから仲良くやっていきましょう。」

なんだ妙な空気を和やかにするため、僕はそう言って右手を差し出す。

「えっ？ えと…うん。」

少し照れ臭そうにしながらも、彼女は握手に応じてくれた。

< 第8話 > 【猫とトランプ】

——Side ???——

「ふう…。」

洗い物を終えたまりやは、居間のソファーに腰掛ける。

「さて…と。これから、何しようかな。」

白い天井を見つめながら、ポツリとそう呟いた。

…

「あら？」

しばらくボーツと天井を眺めていたが、まりやは急にソファーから立ち上がる。

自分が、まだエプロンを着けてる状態だということに気付いたから。

…

歩きながらエプロンを外し、それを台所にあるエプロン掛けへ。
その作業を終えると、彼女は再び居間のソファーに腰を下ろした。

「ん…っ。」

両腕と両足を伸ばし、体をほぐす。
そのあと、両の肩を交互に軽く揉む。

（みんな出掛けちゃったみたいだし——…どうしようかな。）

榛名、由奈、愛。

まりや以外の家の住人は、皆出掛けている。

解放感もあるが、やはり寂しい気持ちも隠せない様子。

「ただいま〜！」

聞き慣れた声が耳に入り、まりやは玄関へと急ぐ。

声の主が帰ってくるには、ちょっと早過ぎ…？ などと思いながら。

「おかえり。 って…随分早く帰ったわね。」

「いや、シャトル忘れちゃって。」

簡潔に理由を説明するや否や、由奈は玄関にある靴箱を開ける。

そしてそこから、シャトルの入った箱を取り出した。

「というわけで、行ってきました。 じゃね！」

「はい、行ってらっしゃい。」

…

「せっかちな子ねえ。」

眩きながら、まりやは口元に小さな笑みを浮かべる。

そして、開け放しとなってる玄関のドアをゆっくりと閉めた。

設置されたボタンを押す。

『ピンポン』という音がその家の内側から鳴り響いた。

「……。」

この音を聞きたびに、少年時代の記憶が蘇る。
なぜなら僕は…ピンポンダッシュの常習犯だったから。

一日に最高13回を達成した記録は、ギネスブックに載るとか
載らないとかまで騒がれる勢이었다。

いや…騒いでたのは、僕の他に数人程度のもだったが。

……

「ハルちゃん、やつほ〜」

「やつほ〜。」

ドア開けて姿を現したのは、神田日和…その人。
相変わらず、周囲にその素敵な笑顔を振りまいてる様子です。

「ささ、どうぞどうぞ。 お邪魔しちゃって下さい」

「うん。 …邪魔する。」

玄関へ入り、これから靴を脱ごうか——と視線を下にやった刹那。
家の奥の方から、ドタバタと床を踏み鳴らす足音が
こちらに向かつて迫ってきた。

「待ちくたびれたぞ！ ハルちゃん。」

その足音の正体。

神田保奈美^{ほなみ}は、僕に鋭い眼光を向けていた。

小学四年。……いや、今は五年生か。

年頃を考えると、その覇気は中々のものかと思う。

「今日こそ君に、雪辱を遂げる時……。覚悟しときな、ベイビー。」
「……。」

今日は特に、テンションが高めなのか。

言葉の節々から、彼女の意気込みが嫌という程伝わってくる。

そのゲームの名前は、神経衰弱。

ランプを使った、ひたすらに記憶力がカギとなるゲームです。

それにしても、この『神経衰弱』という名称。

『このゲームは神経を衰弱させるものだ』——ということを
ストレートに表現した、実に爽快感溢れる名称に思える。

「ん。ハズレだね。」

表に返した二枚のカードを、僕は再び裏向きに戻す。

「ふむふむ。アレがあそこで、あそこがアレで…。」
ボソボソと小声で何か呟きながら、
カードの群れに手を伸ばす保奈美ちゃん。

……

「…チツ。」
小さく舌打ちをすると、外れたカードを素早く裏返す。
さすがに、慣れた手つきをしている。

「それじゃあ次、私だね。」
日和は、自分の手元にあるカードを一枚表に返す。
そしてすぐに、その隣にあるカードを表に返した。

「あはは。ハズレだ〜。」
緊迫感溢れる妹とは違い、姉はあくまで超自然体。
この場面には、一体どちらのムードが合っているのか…。

そして、勝負は静かに幕を閉じた。
今回の結果は…。

「くそーっ。これで連敗記録…95回か。」
「あははっ。やっぱりハルちゃん、強過ぎ〜。」
つまりは、僕の圧勝というわけだ。

長い間憶えることに關しては、いささか不安がある僕の頭だが…。
短時間だけの記憶ならば、まったく問題ない。

そして、その記憶出来る量と正確さは……結構凄いと評判。

「どうしてそんなに強いんだ…。」

「どうしてだろうね。」

恐らくは、例の腫瘍のお陰かと思う。

「まあまあ…勝負の後は、甘いものでも食べてほんわかしようよ。
今から、ケーキ持ってくるから。」

そう言つと日和は立ち上がり、部屋のドアに向かって歩きだす。

「……。」

ほんわかするためには、甘いものを食べればいいのか。
それが、自然の摂理というものなのか…。

テーブルの上には、日和が持ってきた三つのケーキ。
どうやら、レアチーズケーキって感じの物らしい。

「……。」

しかし、部屋の中に登場したのは…ケーキだけじゃない。
日和が部屋に戻ってくると同時に、彼女の足元から姿を見せた生物
がいた。

……

そして、その生物。

部屋に入ってからというもの、ずっと僕の方を見つめてる気がする。

「…久しぶりだね。」

とりあえず、声をかけてみた。

ニャー

「……。」

実に猫らしい、猫っぽさ丸出しの鳴き声。

そう、彼は…この家の飼い猫。

名前は、ニャンニャンというらしい。

……

それにしても、ニャンニャンって…。

これまたシンプルで、爽快感溢れる名前だね。

ニャー

「……。」

うん。

例え人間じゃないとはいえ…そんなに見つめられると、
食べづらくて仕方ない。

「これ…欲しいの？」

ケーキを持った皿を持ちあげつつ、尋ねてみる。

ニャー

「ケーキ、好きなの？」

ニャー

「…じゃあ、僕のことは好き？」

ニャー

「僕とケーキだったら、どっちの方が好き？」

……

「僕の方が好きなら、ニャー。ケーキの方だったら、ニャーニャー。」

どちらとも言えないなら…コケコッコーと鳴きなさい。」

ニャニャニャツニャー

「……。」

「どちらとも言えない…ってことかな？」

「あはははっ ♪ 残念だねえ、ハルちゃん。」

ケーキと同一視されたことは、確かに多少腹立たしいことなのだが…。

それよりも、僕の言葉を理解してるようにしか思えない彼の態度に、ちよつと感激と——そして驚愕を覚えてる。

「頭良いんですね…あなた。」

これまで、ごく普通の三毛猫としか見ていなかったんだけど、もしかすると、コイツは只者じゃないのかもしれない。

ニャーゴ

僕が喉を撫でてやると、ニャンニャンは気持ちよさげに目を閉じる。

「気持ち良さそうだね…ニャンニャン。」

「私も撫でてもらおっかな〜」

「……。」

何はともあれ…彼のお陰で、より一層ほんわかした気分になったかも。

< 第9話 > 【彼方】

——Side 杉山由奈——

「ほれ、買ってきてやったぞー。」

「サンキュー。」

鈴音から手渡されたのは、よく冷えた缶ジュース。

今日は、最近お気に入りグレープソーダを頼んどいた。

「ふう…っ。 やっぱ運動の後は、この一杯に限るわあ。」

鈴音が飲んではるのは、オレンジジュース。

商品名は『ドラマチック・オレンジ』っていうらしいんだけど…。

どこら辺の何がドラマチックなのか、あたしには全然わからない。

「あつ、そっぴや由奈。 さっきの話なんだけど。」

「んっ？」

「あんた、夢ん中でお兄さんに襲われた…とか言ってたじゃない。」

「言ってたね。」

昨日見た夢。

はつきり言つて、ありや酷い夢だった。

何でか知らないけど、ハル兄があたしを追いかけて回してて…。

何でか知らないまま、あたしは捕まっちゃって。

んで、何でか知らないけど——ハル兄はいきなり…

あたしの肩をガブツと噛んできたわけで。

「実はあたしも、昨日変な夢見ちゃったのよ。」

「…へえ。」

「どんな夢だったか、気になる？ 気になるよね〜！

それじゃ、話してあげましょう。 この鈴音様が。」

「……。」

いつもながら、急なテンションの上がりっぷりを見せる彼女。
そのスイッチは、一体どこで入れているのやら…。

「あれは、そう——もう何十年前になるかしら…。」

「昨日って言つてたじゃん。」

「うむ…鋭いツツコミ。」

この調子じゃ、あまり面白い話が聞ける感じしないな。

「目が覚めた時、あたしは空を飛んでたのよ！」

突然そう叫びながら、鈴音は両手をバツと横に広げる。

「…ビックリさせんな。」

どうやら空を飛んでるってことで、翼を広げてるイメージらしい。

「雲の間をすり抜けるように、あたしは大空を突き進んでいくの。
目的地？ ハハッ…そんなものは無いさ。」

「……。」

その笑い方、気色悪い。

「そしたら突然、羽の生えた天使さんがやって来た！

天使さんは言った！『何をしてるの？ 早く神殿へ急がないと』

…と。」

「……………」

段々トリップしてきたな…。

通りすがりの人が見たら、間違いなくアブない人って思われるわね。

「とまあ、そんな夢だったのさ。」

「…終わり？」

……

ま、最初から期待はしてなかったけどさ。

なんだろうね…この、時間を果てしなく無駄にしちゃった感。

——Side—— 杉山榛名——

お日様が沈み、薄暗くなってきた花毬の町。

その町中を突き進み、僕はいま自宅へ急いでいる。

「……………」

夜の街並みというのは、やはり昼間とはガラリ雰囲気が変わるもの。昼間見せる顔と、夜に見せる顔…。

そういう二面性があるものって、やっぱり面白いよね。

自転車屋さんの前を通る。

現在僕が乗っているこの自転車も、この店で購入した物。

中学に入った時に買った物だから、乗車歴は約三年となるわけだが…。

なかなかに悪くない乗り心地ですよ。

……

数軒の民家を挟み、続いて現れたのは…文房具屋さん。

その名の通り、ノートやら鉛筆やら消しゴムやらといった学生には必須のアイテム類を扱っているお店。

スポーツ用品なども各種取り揃えており…由奈が使ってるバドミントンのラケットとかシャトルとかも、ここで購入している様子。

……

さて、続いて現れたのは――

「…んっ？」

電柱の側に、人影があった。

どうやらその人、僕に背中を向けて歩いている様子だが…。

その後ろ姿には、何処か見覚えがある気がする。

「……。」

その背中に接近するたび、心臓の鼓動が早まっていくのを感じる。
なぜなら…。

最後にその後ろ姿を見たのは——およそ六年前のこと。

あの、真っ白に染まる景色の中で。

突如、背筋に冷たいものが走った。

その原因は、耳に飛び込んできた不可解な音。

僕は音がしたと思われる方…背後を振り返ってみる。

「……。」

何かが唸るといつか、鳴り響くといつか…そんな感じの音。
人間の叫び声のようにも聞こえたが——

「…あれっ？」

首の方向を元に戻すと、ある事に気付く。

さっき見た、あの人の姿がない。

周囲にも目を配ってみるが…それらしき人の気配は感じない。

「…？」

その変わり——と言っではなんだが。

さっきまで『あの人』の姿があった場所に、

何か緑色に光る物体を発見した。

「…なんだろ、これ。」

淡い緑色の光を放つ、何かの鍵のような形をした物体。サイズや形だけを見れば、特に目立つ雰囲気もなく…普通に、家とか車とかで使われそうな鍵にも思えるが。

……

さっきの『あの人』が落としていった物だろうか？
だとすると…。

「おっ？ 誰かと思えば、お前か。」

車輪の音と共に、誰かが僕に声をかけてくる。

僕はちよつとボーッとした意識のまま、その人物へ顔を向けた。

「サツくん…こんばんは。」

「うつす。こんばんは。」

彼の名は、サツくんこと桜庭光一くん。
さくぐらほこういち

職業は…なんと、警察官。

花毬駅前の交番に勤めている模様です。

「あつ、丁度よかった。はい…これ。」

僕は、さっき拾った謎の鍵を彼に手渡す。

「んあ？ 何なんだよ、いきなり。」

「ついさっき、ここで拾った。誰の持ち物なのかは不明。」

「…ふん。」

サツくんは、渡された鍵をマジマジと見つめる。

「……。」

僕もそれにつられるように、謎の鍵を見つめた。
すると何だか…体の奥の方から、妙な気分が湧いてくる。

期待…。

不安…？ 恐怖…？

言葉では、どうも表しにくい感情。

でも、確かに感じることは――

僕がこのペンダントに、とても惹き付けられているということ。

「おい、どうした？」

「……。」

その時だった。

不思議なイメージが、頭の中に描かれる。

五つの、それぞれ異なった色の光。

それらは、遥か彼方から…凄いスピードで接近してくる。

その光たちが、僕の体にぶつかった――と思った瞬間。

他の光たちは姿を消し、緑色の光だけが僕の眼前にあった。

そして…。

その光の中から、誰かが姿を現す。

ゆつくりと、こちらに歩み寄ってくる。

見覚えはない顔。

でも、なぜか…その姿を見てるだけで、凄く心が揺さぶられる。

この感覚は、初めてじゃない。

昔から時々、僕の中で生み出されてきたもの。

なんと言えばいいのか…。

自分の体の中で生み出されたもののはずなのに。

それはまるで、遠く彼方からやって来たもののようで――

「おい榛名、目を覚ませ〜！」

気が付くと、肩を掴んで僕を揺さぶってるサツくんの姿。

「…覚めてる覚めてる。」

「目覚ませ！ こら！」

「…覚めてるって。」

「ここに、一つの本があります。」

「彼は、この本が読みたかったので、買いました。」

「…でも。いつか読もう、いつか読もうと思ってる内に――。」

「いつの間にか、長い年月が過ぎてしまいました。」

ソファアに腰を下ろし、茶色いカバーの本を手にした男は、目の前にいる風船を持った少年に話しかけていた。

「……。」

少年は、困惑していた。

なんとなく、リビングに入り。

なんとなく、この前に遊園地で貰った風船を手にして。

なんとなく、ソファアに座る父親に視線をやると…

彼が急にそんな話を始めたのだから。

「あれ…？」

ソファ―に座る男――剛は、我に返ったように瞬きをする。

……

「あつ…榛名。　なんか、ごめんね。」

彼は静かに本をテーブルの上に置くと、苦笑を浮かべる。

「なんか、お前の顔見てたら…よくわかんないけど、勝手に口が動いちゃってさ。」

「へえ…っ。」

剛は、右手に持った茶色いカバーの本を見つめる。

それにつられ、榛名もその本を見つめる。

「あれ？　この本…タイトルみたいなもの、見当たらないな。」
本を様々な角度から観察してみたの、剛の呟き。

もう一度ざっと本を観察し――やはりタイトルが見当たらないことを確認すると、彼はその本を開いてみた。

……

「……………」
「……………」

二人の視線が注がれる中、ペラペラとページが捲られていく。

シンと静まり返った部屋の中に、ページを捲る小さな紙の音だけが断続的に鳴り響く。

……

「なんもかいてない。」

「…よね。」

榛名がポツリと感想を言い、剛はそれに賛同するように相槌を打った。

「なんもかいてない本も、あつたりするの?」

「いや…えっと。普通は、有り得ないもんだと思うけど。」

榛名の質問に返答しつつ——何か文字が書いてないかを探し、剛はさっきよりも早いペースでページを捲り続ける。

恐らくは、これが…。

彼に異変が起きる、最初の兆候だったのだろう。

いや…どうだろう?

本当はきつと——もっと、ずっと前から。

生まれた時から?

…それ以前から？

…誰に？

私に？

私以上の存在に…？

<第10話> 【Weak point】

「……………」

歴史の授業が終わり、休憩時間。

僕は自分の両腕を枕にする感じで、頭をクールダウンさせている。

ダメだな…。

歴史って特に、なんか僕の体質に合わない気がする。

僕はほら——基本的に、過去は振り返らない主義だからね。

「ッ…!？」

考えに没頭する脳に、未曾有の衝撃を知らせる電波が送られてきた。その衝撃は、どうやら背中にとえられたものらしいが…。

「おつ、生きてたか。」

「……………」

背後を振り返ってみれば、そこにいたのは…赤髪の子高生。名前は、陣内飛鳥とかいう人で間違いなさそうだった。

「生きてたけど…今の衝撃で、死にそう。」

「あのぐらいで、あんたがくたばるかっつての。」

衝撃の度合いからすると…。

背中に受けたダメージは、恐らく肘打ちによる攻撃を喰らわされたものかと推測される。

「というか…どうして攻撃してきたの？」

「いや、隙があつたもんだから。」

…

隙があれば、攻撃してくるのか…。

僕らはもう、平和な時代に戻れないのか。

「あ、あの…大丈夫？ 杉山くん。」

隣の席の新里さんが、心配そうな目つきで聞いてくる。

「え、え…っと。 な、仲が良いですね？ お二人は。」

飛鳥と目が合った様子の新里さんは、なんだかちよつと震えた声でそんな言葉を紡ぐ。

「はあ？ 何でそうなるのよ。」

「い、いや…。 ほら、喧嘩するほど仲が良いつていうじゃないですか。」

飛鳥のカミソリのように鋭い視線を浴び、新里さんはますます声を震わしてる様子。

「喧嘩というよりは、飛鳥の一方的なドメスティック・バイオレンスな気がしてならない。」

「…そういうの、負け犬の遠吠えっていうのよね。」

……

「ドメスティック・バイオレンスって…どういう意味だった？」

言ってみたものの、いまいちはずきりと意味がわからなかった。そういう時は、この人に聞くに限る。

「夫婦間や恋人間に生じる暴力行為…。直訳すれば、家庭内暴力。一般的には、男性から女性に対する行為のことをいうそうです。」
「…なるほど。」

秀輝くんからの解説を受け、なんとなく理解。

「バイオレンスってのが、暴力って意味だね？」

「はい。」

言い忘れたが、僕は英語も苦手だった。

「となると、ドメスティックが…。」

……

「うん。英語ってやっぱり、難しいもんだね。」

「ま…そうかもね。」

飛鳥の共感を得られた次の瞬間、教室にチャイムの音が鳴り響いた。次の授業は——英語です。

姉さんは仕事中。

そして、まりやさんもパートに出かけてるため…今日は、由奈と二人きりの昼食。

案外、久しぶりに出くわしたパターン。

「……………」

僕の包丁捌きで、人参が鮮やかに——リズミカルに切り刻まれる。そのすぐそばでは、火にかけられた鍋の中でマーボー豆腐がグツグツと煮えたぎる音がする。

「よし…。次はピーマン、いつてみよう。」

今日のメニューは、マーボー豆腐に肉野菜炒め。肉に合う野菜といえば…やはり、ピーマンしかない。

「ハル兄……………」

「どうした、由奈。」

マーボー豆腐調理担当の由奈から、声がかけられる。ま、調理担当といっても…………既に調理されたものをあつためてるだけなのだが。

「それだけは勘弁して。」

「……………」

素早い動作で、僕の手からピーマンを奪い取る由奈。

「中二になったんだから、ピーマンぐらい食べれるようになるつよ。」

「それとこれとは、関係ない。」

そうです。

この人は、筋金入りのピーマン嫌い。

『ピーマン』という言葉を聞くだけで、寿命が七年縮む

…と、何年か前に言っていたほどの嫌いっぷり。

真剣な眼差しで言っていたが…。

それが事実だとすれば、彼女の寿命は既に百年——いや、

二百年近くは縮んでいることになる。

そう考えると……あの言葉はやはり、真実ではないと判断すべきか。

「あのさ、由奈。」

「…なに？」

……

「いや…やっぱり、何でもない。」

由奈から視線を外すと、僕はフライパンに油を引く作業に取り掛かる。

「何さ…。言ってみてよ。」

「ピーマン食べたら、教えてあげる。」

「…言わなくていい。一生、黙ってりゃいい。」

静かに言葉を返すと、由奈は僕から視線を外し、
マーボー豆腐の入った鍋を見つめる。

……

「あのさ、由奈「料理中に、無駄口は禁止。」…了解。」
彼女がピーマンを食べれるようになるのは、まだ先の話になりそう
だ。

まあ…まだ若いんだしね。

今はマーボー豆腐ばかり食べてても、問題ないかな。

< 第11話 > 【下調へ】

「よし…到着。」

「着きましたね。」

何処に着いたのかと問われれば。

その答えは、峰岸デパートの屋上。

「ここ、自転車で来たの初めてなんですけど…

やっぱ結構、疲れますね。」

「…うん。 疲れる。」

おおよそ、30分か40分ぐらいはかかっただろうか。

それだけの時間、ひたすら自転車を漕いでいた僕らなので…

こうして今、疲労の色を隠せないでいるわけだが。

ここ峰岸デパートの屋上は、駐車&駐輪場のスペースとなっている。

地上にもそんなスペースはあるのだが、

まあ混雑が激しくなったりしてくると…こちらのスペースも
活用せざるを得ない状況になったりするわけです。

「先輩、あの車…カッコよくないですか？」

「うん？」

大地くんの指差した先。

そこには、藍色のボディをしたスポーツカーっぽい車の姿がある。

「……。」

ちなみに、屋上には他二台の車が確認出来るが…。

二つともが、年季をかんじさせる軽トラック。

「ありや多分、ターンVですよ！ いやゝ…まさか、こんな所でお目にかかれるとは。」

目をキラキラ輝かせながら、大地くんはスポーツカーの元へとダッシュで駆け寄っていく。

「ターンV…ね。」

恐らくは、車種の名前だと思っただけど。

残念ながら、僕の専門分野外です。

それに比べ大地くんは…自他共に認める、車好きっ子。

彼のミニカーコレクションは、生きてる内に一度は見ておかないと損をするとかしないとか…。——本人談だけど。

「……。」

さて…。

僕らは別に、カッコいい車を求めてここへ来たわけじゃない。

僕らが来た本当の目的は——そう。

あの謎のメッセージで指定された、待ち合わせ場所。
それがここだったから…まあ、下調べというか…

ちよつと様子を見に来たわけなのだが。

「…んっ？」

僕の頭の中に、一つの疑問が浮かぶ。

あのメッセージには確か…待ち合わせの時刻は『午後の12時』と書かれていたはず。

午後の12時といえば…。

言わずもがな、深夜と呼べる時間帯。

「大地くん、大地くん。」

「ん…なんっすか？」

「このデパートってさ…夜は何時までやってるか、わかる？」

その時間帯ともなれば、多くの店舗はシャッターを閉めてしまいそうな気がしてならない。

これはちよつと、確認すべき事項だね。

「いやゝ、すみません。俺にはちよつと、わかりませんね。」

「…そうか。」

蛇の道は蛇。

デパートのことは、デパートで働く人に聞くのが一番。

そう判断した僕は、屋上にある出入り口から

峰岸デパートへと足を踏み入れることにした。

「おゝっ。こちらの入り口から入るの、初めてなんですよ。」

なんか結構、ドキドキしますねえ……。」

自動ドアが開き、中へ潜入。

すると、すぐに目に飛び込んでくるのが『関係者以外立入禁止』と記された立て札。

「あつちには、何があるんでしょうね？」

「……さてね。」

その手前に見える階段を下り、僕らはデパートの三階を目指す。

この辺りの階段や通路は、地上から入った時と比べると華やかさというものが、明らかに欠けてる。

昼でも夜でも、薄暗い空間に、コンクリート剥き出しの床と壁。

まあ、このデパート……屋上はあんまり利用されてないという話だからね。

「なんか、幽霊でも出てきそうな雰囲気っすね……。」

ボソツとそう呟いた大地くんは、いつかと同じく

僕の後ろに張り付くようにして移動し始める。

そんな風にしてるから、コバンザメなんて言われるんだ……

——とか、彼に言っただろうと思ったのだが。

「……。」

感じる。

何者かの視線。

「先輩、どうしました？」

「……いや。何でもない。」

” ウソ… ツキ…。”

「おゝっ。 誰かと思えば、杉山くんではありませんか！」
三階にある家具類をいろいろ展示してる地帯に差し掛かった時、
実にハキハキした口調の声が聞こえてきた。

「恒本^{つねもと}さん、こんにちは。」
「どうもどうも、こんにちは〜！」

この人の名は、恒本^{のりゆき}敬之さん。
見ての通り、このデパートで働く店員さんで…。
見ての通り、抜群のスマイルを作り出せる男です。

「お知り合いつすか？」
「…まあね。」

「ボクは…小学生？ 何年生かな？」
敬之さんは体を屈め、大地くんの顔を覗き込むようにして尋ねる。

「俺はもう、中二です！ 小学校なんて、一万年前に卒業しました
！」
完全にムツとした様子で、彼は叫ぶように答えた。

「…大地くん。」

それならば、今の君は…少なくとも一万歳を超えた年齢に

達していることになるぞ。

それでもいいのか。——いや、よくない。

「あつはは！ 元気の良い子だね。」

「どうもです！ 俺ってば、それだけが取り柄ですからね。」

「ウムウム。 子供はやっぱ、元気が一番！」

「へへっ…ありがとうございます！」

「……。」

一触即発だった空気が、いつの間にか和やかムード。

恐るべし、恒本さんのスマイルと話術…。

というより、大地くんが褒められるのに弱過ぎるだけか。

「それより恒本さん、一つお尋ねしたいことがあるんですが。」

「んっ…何かな？」

「このデパートって、閉店時間はいつですか？」

その時——。

視界の隅に、誰かの歩く姿が映った。

すぐに消え去ってしまったけど。

「ん」と…夜の10時だけど。」

「そうですか、ありがとうございます。」

求めていた情報を得ることができ、充実感に包まれる…はずなのだが。

僕の頭はどうも、新たに求めるモノを発見してしまった様子。

「すみません。 それじゃ、失礼します。」

「へっ？ あ、ああ…。」

「行くよ、大地くん。」

「えっ、あ…。は、はい！」

僕はクルリと180度の方向転換をし、来た道を引き返すように速足で歩き始める。

急ぎの用ではあるが…店内で走ることは禁止されてるからね。

< 第12話 > 【混合】

——Side 天野大地——

「……。」

「あの、先輩……？」

ハル先輩の目が見つめる先。

そこには、あの青色のターンVが駐車場を出ていく姿がある。
うーん……やっぱ走ってる姿見ると、余計にカッコいいぜ。

「なんか、落ちてるよ。」

「へっ？」

先輩がスタスタと歩いていく。

そして、駐車場のある部分で足を止め……その場にしゃがんだ。

——んで、何か拾い上げた。

「なんっすかねえ。……鍵？」

先輩の指につままれてる物。

どっからどう見ても、何かの鍵っぽく見える。

でも…。

なんでか知らないけど、鍵が青く光ってるように見えるんだが。

「っていうかハル先輩、何で急に屋上まで戻って来たんですか？」

……

「……………」

先輩は僕の声など聞こえてないかのように、青く光った鍵をジトッと食い入るように眺めている。

「大地くん…。」

「は、はい！」

「これはとりあえず、僕が預かつとくね。」

そう言う先輩は、自分の服の胸ポケットにその青く光る鍵を入れてしまった。

「いや、あの…？」

預かつとく——と言われましても。

それきつと、誰かの落とし物なんじゃないっすか？

「……………」

「えと…先輩？」

あ、後で多分…交番に届けたりとかするんですよ？

なんだか先輩から、普段と違うオーラを感じる。

顔はいつも通りの無表情なんだけど…なんっつーかな。

たまにあるんだよな、こういう時。

ま…先輩と長い付き合いの俺やヒデ先輩でもなきや、
気付かないレベルのことだろうけど。

素人じゃきつと、判断出来ないだろうな。 …へへっ。

「杉山くん、こんにちは。」

背後から聞こえた、女の人の声。

振り向いてみると、見たことない顔の…でもキレイな女の人の姿があった。

「どうも、こんにちは。」

「フフッ…こんな所で会うなんて、奇遇ね。」

見たところ、僕らよりかずっと年上の人みたいだけど。

先輩とは、どういう知り合いなんだろ？

ま、まさか…恋人とか！？

「えーっと、そっちの子は…。」

「あっ…ど、どうも！俺は、天野大地といいます。」

「中二です。僕の後輩です。」

女の人に見つめられ、ドギマギしながらも、なんとか名前を名乗った。

チクショウ…。この程度で動揺するじゃ、俺もまだまだだなあ。

「私は、安曇祥子。杉山くんのクラスの担任教師をやってるわ。」

「へえーっ…そうなんっすか。」

なんと！ 先生だったとは。

こんなキレイな人が、先生だなんてことは——いや…有り得るか。中学校の方でも、負けじ劣らずのべっぴんな先生がいるからねえ。

「先生。今日はまた、どうしてこちらに？」

「えっ？ …デパートに来たんだから、買い物しに来たに決まってるじゃない。」

アズミ先生は、おかしそくにクスクスと笑ってる。

「それもそうですね。」

「フフツ…。それじゃあ、また学校でね。」

——Side 杉山榛名——

「オウっ！ まりやんとこの息子っちゃんいか。」

「どうも、こんにちは。」

惣菜屋さんの前を通りかかると、威勢のいい声と共に見知ったおばさんが笑顔くれた。

彼女は、都文恵^{みやこふみえ}さん。

見ての通り、このデパートで働く店員さんで…。

見ての通り、眼鏡がチャームポイントとなってる人です。

「ここで会ったも、何かの縁！ まあちょっと、待つとなはれ。」
「了解。」

文恵さんが、店の奥へと姿を消す。

もう幾度となく繰り返し返されてきた光景なので、僕は驚きもしない。
大地くんはもちろん、ポカンとしてる様子だけど。

……

「お待たせ。 ほら、これが新作じゃ！」
しばしの間の後、文恵さん再登場。
そして、その手の平の上には…一枚のお皿。

「……。」
そのお皿の上にある物。
それは――

一言で表現するならば…。 黒い……ピンポン玉？

とにかく、色は全身が真っ黒で。
そして形は、悲しいほどにまんまるで。

「名付けて、ブラック・ボール！ どうや、この斬新な見た目？」
「……。」

ブラックボール…。
ど真ん中、一直線――捻りなし。
実にそのまんまなネーミング。

「何なんつすか？ これ。」

大地くんは、皿の上にある物を未確認生物でも見るかのような目つきで凝視している。

「ウチの開発した、新しいおかずじゃよ！」

あんた…こん子の友達か？ んなら、あんたも食べてええぞ。」

……

「とりあえず、頂きますね。」

戸惑うを大地くんをよそに、僕はブラックボールとやらに手を伸ばす。

百聞は一見にしかず。

そして、百見は一食にしかず——というもの。

「……………」

掴んだ指先に伝わる感触。

なんか、恐ろしいぐらいにポヨポヨしている。

香りは…というと。

なんだか、今まで嗅いだ記憶のないタイプの香り。

それなのに、なぜか食欲をそそられるというのが……逆に怖い。

……

「さあさ、どうかな？ 息子っち。」

「っていうか、これ…本当に食い物なんつすか？」

感想を求める者と、疑問を抱く者。

両者の言葉に耳を傾けつつ、口に入れたものを味わう。

そして、その感想は――

「文恵さん……。」

「オウ。バシッと感想言ってくれ。」

「もう少し、改良の余地があるかと思っています。」

僕はその言葉を最後に、惣菜屋の前を離れることにした。

< 第13話 > 【Missmatch】

近所にある、広い野原へとやって来た。

周囲を見渡せば、目に映る景色は…田畑の類が主を占める。
住居とかの人工物は、まばらに点在するのみ。

「……。」

座るのに丁度良さそうな石を発見。

発見したからには、もう座る以外の選択肢は無かった。

……

「…ん。」

石に座り、足元に目をやってみる。

するとそこには…薄暗い中でもしっかりと存在感を示す、
見慣れた黄色い花。

間違いなく、タンポポと呼ばれる花だ。

英語で言うところのダンデライオン。

「んんっ？」

そのタンポポから、僅か数m離れた先。
そこに何やら、恐竜…？の模型みたいな物を発見してしまう。

……

立ち上がり、数歩足を進め——その物体を手を取ってみた。

「……。」

ティラノサウルス。

あるいは、アロサウルス……ゴルゴサウルス……？

とにかくまあ、そっち系の恐竜がモデルとなってることは間違いなさそうに思える。

大きさは大体、20cm……ないしは30cmといったところか。なかなか精巧な作りで、迫力は充分って感じです。

「……誰の物だろ？」

落とし物か、あるいは捨てられた物なのか。

それにしても僕——最近をよく、物を拾いまくるね。

なんとなく、さっき見かけたタンポポのすぐそばに恐竜の模型を置いてみた。

「……。」

タンポポと、恐竜。

やはりというべきか、その組み合わせは……ミスマッチな雰囲気をかもし出してしまうてるように思える。

酢豚に入れられたパイナップル。

焼きソバに入れられた玉ネギ。

24時間はしやぎ回るナマケモノ。

「あつ…。」

そんな、身近にあるミスマッチなものを頭に思い浮かべていた時。何処からともなく、ヒラヒラとした物体が視界に入ってきた。

そのヒラヒラした動きから、正体は蝶々だと推測。

でも…どこか違和感がある。

それは、羽の色——というか、模様？

……

赤、青、緑、黄色、紫…。

そんな色とりどりの曲線で埋め尽くされてる、羽の模様。

「……。」

蝶々の羽つてのは確かに、鮮やかな色合いをしたものも珍しくはないっていう印象だが…。

ここまでカラフルでレインボーな色合いは、アリなんだろうか？

そして…。

蝶々はしばらくヒラヒラした後、タンポポの花に着陸した。

……

「……。」

蝶々とタンポポと…恐竜。

これまた、なんともミスマッチな雰囲気をかもし出してる。

いや…蝶々とタンポポは、別に問題ない。
むしろ、ベストオブカップルのなムードさえ感じさせてくれる。
ならば、そのムードをぶち壊す原因は――

「…んっ?」

頭の上を感じる、微かに冷たい感覚。

……

「……。」

その正体を察知し、数秒経った頃。

冷たい感覚は全身を襲い…それと共に鼓膜を震わせる、
ザーザーという水音。

花にとまっていた蝶々は、一目散にいずこかへ飛び去り…。
残されたのは、タンポポと恐竜の模型。

雨に打たれようと、やはりミスマッチな二つです。

「…帰るぞ。」

僕は小さくそう呟くと、恐竜の模型を持ち上げる。

そして、向こうに置いてある自転車のカゴへと放り投げた。

――外れた。

「……。」

ともかく、さっさと家に帰ろう。

日もとつぷり暮れ、もうすぐ夕食時…という頃合い。

僕は自分の部屋にある勉強机の椅子に着席し、様々な想いを巡らせつつ

机の上に置かれた物を眺めていた。

「……………」

手を伸ばし、手に取る。

そして、その全身を舐め回すように観察してみた。

……………

「んっ？」

観察の目が、彼の足の裏にまで及んだ時のこと。

僕は、とある発見をしてしまった。

足の裏の部分に『S・F』という文字が記されている。

多分、黒いマジックかなんかで書いたものかと思われるが…。

「……………」

どういう意味なんだろう？

エス・エフというからには…やっぱり、アレだろうか。

えっと…。

え…っと。 何ていったかな。

多分、なんとかファンタジーとかいう訳でいいと思うんだけど。
「後で、秀輝くんに聞いてみよう。」

……

秀輝くん……か。

僕の視線は、自然とある一点に向けられた。
本棚の隣に設置されている、飾り物を置く用の棚。

三段構造となったその棚の中には、いろんな物が並んでいる。
旅行のお土産だとか、友人からのプレゼント……。

まあ発生源は、大体その辺りのものばかりなのだが。

その、数あるオブジェの中の一つ。

鮮やかな茶色をした、小さな木の箱がある。

これは……昔々、とある友人から頂いた物。

……

記憶力が悪い方なので、あまり当時のことは思い出せないけど。
箱を渡される時、彼からこんなことを言われたのは憶えている。

「その時が来たら、開けてみて下さい。」

「……。」

『その時』っていうのは、いったいどの時のことなのか。
何月何日の、何時何分なのか。

当時は散々問い詰めまくってたような気がするが…。
恐らく、答えは教えてもらえなかったんだろうね。

今聞いてみたら——いや、駄目だろうな…多分。

「…はあ。」

立ち塞がる謎にもどかしさを感じつつ。

僕はその箱の隣に、手に持っていた恐竜の模型を置く。

「おっ…。」

先程は、タンポポや蝶々とのコラボで実に微妙な空気を
作り出してしまった彼であるが…。

今回はわりと、なくはない——という感じだ。

……

「これは、どうするかな？」

胸ポケットから取り出したのは、例のアレ。

そう。 峰岸デパートの屋上でゲットした…青い光を放つ鍵。

光の色こそ違うものの。

昨日の夜に見つけた、あの鍵と非常に酷似している。

形や大きさはもちろんんだけど…。

それ以上に、この——発せられる、不思議なオーラみたいなのが。

「……。」

よくわからないのだが。

なんだか、その…オーラみたいなもの。

僕はそれを、無性に手放したくない様子らしい。

いや、僕が手放したくないというより…。
鍵の方が、僕を欲している——というか。

「…うん。」

なんだか、頭がグルグルしてきたところで。
僕は青い光を放つ鍵を、机の引き出しの中に放り込んだ。

< 第14話 > 【検診】

何枚もの紙。

レントゲン写真。

それらを見たり見比べたりしている、白衣の男性。

「うん…。特に、問題無いみたいだね。」

……

「まあ君以外の人間だったら、間違いなく問題ありの診断結果なんだけどね。」

彼はそう言いいながら、僕に穏やかな微笑みを向ける。

この人の名は、吉^{よし}祈^{きは}原先生。

あつ…もちろん『先生』っていうのは、名前じゃない。
本当の名前は、確か——敏^{とし}雄^おとかいったかな？

「どう？ この二週間、何か気になったことはあった？」
「んと…そうですね。」

ここは病院。

そして彼は、白衣を着ている。

つまりは…彼の職業は、お医者さん。

「特に無いかと思います。」
「そっか。」

僕は生まれた時から、とある病氣持ちだ。
病名は、ズバリ…脳腫瘍。

腫瘍のある場所は、前頭葉と頭頂葉の中間辺り…
中心溝と呼ばれる部分にあるらしいのだが。
難しい話みたいなので、僕もあまり詳しいことはわからない。

ともかく、そんな腫瘍があるもんだから
僕は昔から、色々と変なところが多く…。
知覚障害や伝達障害といったものが、主だったものののだが。
他にも色々…。

しかしながら、時が経つに連れ——その症状は明らかに
回復の兆候を見せている様子で。
今ではもう、日常生活にはほぼ問題が無い程の回復ぶり。

でも、回復してくれてるのは嬉しいんだけど。
腫瘍の大きさに全く変化が見られない…というのが、
医療に関しては素人の僕でも、気になってしまふところ。

「そっいえば、もう高校生になったんだよね？」
「はい…お陰様で。」

ふと、先生の後ろ側にある窓の外へ視線をやった。

先程から降り出した雨により、水滴が窓に当たってる様子が窺える。

「どう、高校生活は。楽しんでる？」

「…そうですね。今はまだ、楽しみを探し中ってところですかね。」

……

「沢山、見つかるといいね。楽しいこと。」

「はい。」

僕の知り合いには、割と独特な雰囲気を持つ人間が多いのだが…。
この吉祈原先生も、そんな人間の一人。

特に、どこがどうと言うわけでもないんだけど……

なんか、話していて——同じ空間にいて、退屈しない人。

病院の駐車場から車を発進させ、数分。

雨が止み、空には晴れ間がのぞき始めていた。

「……。」

いつものことだった。

僕が病院までやって来ると、雨が降り出し…。

そして…去っていくと、雨は止む。

この現象は、もうかれこれ十年近く前から続いている。

不可思議といえ、不可思議極まりない現象な気もするんだけど…

やはり人間、慣れてしまえば——というもので。

僕らの間じゃ、もう話題に上ることもほとんどないレベルです。

「ああ、そういえば…榛名。来週に決まったわよ。」

「何が…です？」

「花見よ、花見。来週の日曜日に決定したから。」

運転席に座るまりやさんは、久々に口を開いたと思ったらいきなり、そんな決定事項を言い渡してきた。

「花見…ですか。」

「去年はなんだかんだで、行けなかったでしょう？
今年はその分まで、一杯楽しまなくっちゃ。」

まりやさんの口調は、実にワクワクした感じ。

そのワクワク加減を現わすように、車のスピードが徐々に上がっている気がするのだが…

「あの、まりやさん。」

「ウフフ…。二年ぶりとなると、凄く楽しみよねえ。」

「はい。えっと…楽しみなのはいいんですが。」

ゴギャギャギャツ

カーブを曲がる際、なんだか凄い音がした。

音の発生源は、僕らの乗る車に装着されたタイヤからだ。

「まりやさん、ちょっとスピード出過ぎてません？」

「あら…本当ね。」

……

基本的には、穏やかで淑やかで慎ましやかな人なんだけど…。
車を運転する際に限り、彼女はこういったデンジャラスな面を
見せつけてくれることがある。

「そういえばね、榛名。この前偶然、高校時代の友達と再会した
のよ。」

「へえ…。」

「もう何十年会ってなかったんだけどね。話し始めたら、
すぐに盛り上がったちゃって…ウフフ。」

……

「あの…まりやさん。」

「榛名も、友達は大切にしないよ。」

口調は穏やかなのに――。

アクセルを踏む足の力が、どんどん上昇している。

「もうちょっと、スピード落とした方が…。」

「えっ？ あら…そうねえ。」

友達もいいけど、自分の体も大切にして欲しいものだ。

「そういえば、榛名。私たち、昨日デパートで会ったじゃない？」

「はい。」

「仕事中に顔合わせるってのも、なんだか新鮮だったわあ…フッフッ。」

…

「あの…まりやさん。」

「あら、なあに？」

<第15話> 【カケヒキ】

「……………」

縁側に座り、眺める風景。

そこには、二人の少女がバドミントンの動きが鋭い姿があった。

舞台は、杉山家の庭。

そして、二人の少女とは……

僕の妹である、杉山由奈。そして、その友達の芳賀^{はが}鈴音さん。

「おっし！ これで5点差。」

「……フン。」

長いラリーを制し、芳賀さんはガッツポーズ。

一方の由奈は、悔しさをグツと堪えたような表情をしながら足元に落ちているシャトルを拾う。

「オッホホホ！ この鈴音様に敵う者は、地球上にいませんことよ。」

「……調子乗ってんの、今の内だよ。」

なぜかお嬢様口調になる芳賀さんに、由奈が鋭い視線をぶつける。

……

「あつ！ あんな所に、空飛ぶ夏ミカンが！」
「なにやッ!?」

由奈が指を差した先。

そこには、プカプカと宙を浮く夏ミカンの姿が…
あるわけなかった。

「よし… 4点差ね。」

「ああつ!? あたしとしたことが、こんな古典的な手口につ！」

完全に注意を逸らされていた芳賀さんに、

由奈の放った低空弾道サーブが炸裂。

あつという間に、点差は縮まってしまった様子だ。

「ああ、あたしったら…。夏ミカンは、今の時期じゃ
酸っぱくて食べられないっていうのに…」

「いや——それ以前に、空飛べないでしょ。夏ミカンは。」

ちなみに芳賀さんは、夏ミカンをはじめ柑橘系の果物が
大好物だという話を聞いたことがある。

由奈はそれを考慮し、夏ミカンというワードを取り入れた
今回の作戦に打って出たのだろう。

「ともかく！ こんな姑息な手を使う相手にや、負けらんないわ。」
「フン…。勝負つてのは、やっぱり勝たないとね。」

……

由奈…。

お前はいつから、そんな勝ち負けにこだわる人間になったんだ。

—Side ???—

「ちょっと失礼しまあーす。」

「…うん。」

一言断りを入れたあと、鈴音は縁側に腰を下ろした。

二人の視界に、由奈の姿はない。

なぜなら彼女は、自らが打ち上げてしまったシャトルが屋根の上に落ちてしまったため……つい先程、

それを取りに、玄関から家屋の中へと入っていったからだ。

「……………」

「……………」

二人の間に、沈黙が流れる。

鈴音は、様子を窺うようにチラッと榛名の横顔を見た。

……

「おい、シャトル見つけたよ。そらっ!」

屋根瓦の上に足を付ける由奈は、発見したシャトルを庭へと落とす。そして、窓から自分の部屋へと戻っていった。

「…っしょ。」

ゆっくりと立ち上がると、鈴音はテクテクと歩いていき落ちていたシャトルを拾った。

「あの、杉山先輩？」

榛名に背を向けた状態で発した言葉。

声が微かに震えているように感じたのは…恐らく、鈴音自身だけだろう。

「先輩って、好きな人とかいます？」

……

（うわぁ…！ 何言っちゃってんだろ、あたし。）

自分の口から飛び出した言葉に、驚き——そして後悔。

心臓の鼓動は一気に加速し、目がキョロキョロと泳ぎ出す。

（落ち着け…落ち着きなさい、鈴音。）

シャトルを持つのは別の方の手で、自分の左胸を押さえる。

（先輩はきつと、『どうしてそんなこと聞くの？』

…とか言ってくるはずだ。）

（そしたら、軽い口調で『いや』、なんとなく気になっただけです。』

…とか答えればいいはずだ！）

対応策も練り終わったところで、鈴音はパツと後ろを振り返る。
その瞬間、縁側に座っている榛名の口が動いた。

「うん、いるよ。」

「……。」

加速し続けていた鼓動が、一瞬止まった気がした。
だがすぐに冷静さを取り戻し、彼女は状況の把握を急ぐ。

（ど…どうする!?!）

「あの、その…好きな人…というのは。」

考えがまとまらぬ内に、勝手に言葉が飛び出る。

そんな自分の口に若干の怒りを覚えつつ――

（こうなれば、もう…なるようになれ!）

「おい、何やってんの？ 二人とも。」

「わっ…！ ゆ、由奈!?!」

完全にその存在を忘れていた人物が現れ、鈴音はまたもや
心臓の鼓動が止まりそうな思いをする。

「な、ななな何でもないよ！ ちょっと、ミカンの薄皮は剥くのか
剥かないのか…ってな感じの話をね!」

「はあ?」

……

「…ま、いいや。 ともかく、勝負の再開といこうよ。」

「よ…よしっ！ 望むところよ！」

由奈に右腕を引っ張られ、勝負用のスpeesまで連行される鈴音。
その腕を引く力が、やけに強く感じたのは――
きつと、気のせいじゃないだろうなあ…と彼女は思った。

<第16話> 【不思議な夜に】

——Side 杉山榛名——

「よし…この辺りでいいだろ。」

眩きながら、僕は自転車を雑木林の中に止める。

それに習うように、後ろからやって来た大地くんも自転車を止めた。

「それにしても、大地くん。それは何なの？」

「へっ？　っと…これっすか？」

返事をしつつ、大地くんは自分の自転車カゴからリュックサックらしき物体を取り出す。

「見ての通り、リュックサックですよ。」

「うん…それはわかるんだけど。気になるのは、その中身。」

腕時計に目をやる。

時刻は現在、午後11時26分。

「中身ですか？　ま…色々ですよ。」

「懐中電灯とか、お菓子とか、カップラーメンとか…。」

リュックを開いて中を覗きつつ、その全貌を明らかにしてくれる大

地くん。

「っていうかハル先輩、手荷物ゼロじゃないっすか!？」
「うん。」

町はすっかり宵闇に覆われ、いろんなものが真っ暗気となった頃合い。

僕らがやってきた場所は、とあるデパート——の付近にある雑木林。

「何が待っているか、わかんないですよ？ 大丈夫なんっすか!？」
「何かあったら…この体一つで乗り切れればいいだけの話。」

不意に、足元に咲いてる小さな花に目が止まる。

暗闇の中、ぼんやりとした光が花びらから放たれてるように思えるが…。

何て種類の花なのかな。

「敵わないっすねえ…先輩には。」

感心したような目を僕に向けながら、大地くんが呟いた。

「とにもかくにも、出発するよ。」

「了解です。」

まだ時間に余裕はあるものの、早めに到着するに越したことはない。

……

周囲に人の気配がないかを確認した後、僕らは雑木林から脱出。そして、道路の向かい側へと走り出した。

前方に見えるのは、灯りが消え夜の闇に溶け込む一つの建築物。
建築物の名は…峰岸デパート。
僕らが目指すは——その屋上だ。

「さて、大地くん。」
「…はい？」

僕らの眼前に立ち塞がる物。
それは、デパートへの侵入者を防ぐための金網のフェンス。

「ここを乗り越えて先に進むってことは、不法侵入ってことになる。」
「…はい。」
「覚悟は出来てる？」

既にこの質問は、ここに来るまでの道中に何度も尋ねている。
でもまあ——ここで最終確認。

「へへっ…。ハル先輩となら、地獄の底へだってお供しますよ！」
ガツと握り拳を前方に掲げ、カッコよさげに宣言する大地くん。
多分、自分でもカッコいいと思ってるはずだ。

「残念だけど…僕は、死んだら天国に行くから。」
カッコよさげに決めてる後輩にそう言い残し、
僕は金網のフェンスをよじ登り始めた。

「君は一人で、地獄を彷徨っててくれ。」

「い…嫌ですよ！　だったら俺も、天国に行きます！」

そして、僕の後を追ってフェンスを登り始める大地くん。
その様相は、例えるならば地獄の亡者というところか。

…ごめん、冗談。

コンクリートの坂道を駆け抜けること、しばらく。

僕たちは見事、デパートの屋上まで辿り着くことに成功した。

そして…。

屋上にある駐車場。

その中心に立っている、一つの人影を発見した。

「誰か、いるみたいだね。」

「えっ！？　ほ…ホントですか？」

目が悪い大地くんにしてみれば、この暗さと距離では
その存在を確認出来ないだろう。

しかし、彼には見えずとも…僕の目は誤魔化せない。

いや、別に誤魔化すつもりはないかもしれないけど。

…

ゆつくりと、間合いを詰めていく。

すると、ある程度の距離まで近付いたところで人影はこちらに気付いたような仕草を見せた。

「……。」

その人物の姿をはっきりと捉えた。

黒いコートを着た…眼鏡を掛けている女性。

年齢は、僕と同じ年ぐらいのように感じる。

「ようこそ、いらっしゃいました。」

右手に持っていた黒いアタッシユケースらしき物を地面に置くと、謎の女性は声を発した。

「あなた達、お名前は？」

とても落ち着いた様子の、淡々とした口調。

秀輝くんを思い出させる…。

「僕は、杉山榛名といます。」

「お、俺は…天野大地です。」

尋ねられてしまったので、僕らは名を名乗った。

……

「龍頭公園のメッセージを見て、やって来たんですね？」

「…はい。そうです。」

心の内で、ホッと胸を撫で下ろす。

彼女があメッセージと何ら関わりなかった場合を考えると…

色々ややこしいことになりそうだったから。

「なるほど。」

彼女が、動き出す。

ゆつくりと、こちらに歩み寄って来る。

……

「……………」

既にその距離は、1mもない所まで迫ってきている。

無表情なその顔からは、意図が全く読めない。

「ふむ。」

僕たち——いや、特に僕の顔をジロジロと見つめてくる彼女。

僕も同様に、彼女の一挙手一投足を観察する。

「あなた、通っている学校は何処？」

「…桜雪高等学校、ですけど。」

僕が質問に答えた途端。

彼女が僅かに目を見開いたのが確認出来た。

「ふむ…よろしい。合格。」

「……………」

「あなたを、我がミステリーハント部に招待しましょう。」

……

何を言っているのかが、いまいちよくわからないのだが。
一つだけわかることは…。

彼女の片方の瞳が、鮮やかな緑色をしている——ということ。

【キャラクター紹介／第1章】

注意：第1章（第1話）第16話）における物語の内容が含まれています。

杉山榛名

本編の主人公。

桜雪高等学校の一年生。

六年前に両親が行方不明となつて以来、妹の由奈と共に
伯母の片桐まりやの家で暮らしている。

黒沢秀輝

榛名の幼馴染。

桜雪高等学校の一年生。

常に冷静沈着で、淡々とした口調で喋るのが基本。

神田日和

榛名の幼馴染。

桜雪高等学校の一年生。

いつも笑顔を絶やさないことから、榛名に尊敬の念を抱かれている。

陣内飛鳥

榛名の幼馴染。

桜雪高等学校の一年生。

怒るとすぐに手が出てしまうタイプらしい。

杉山由奈

榛名の妹。

桜雪中学校の二年生。

中学一年の時から仲の良い鈴音と共に、バドミントン部に所属している。

片桐まりや

榛名の伯母。

家事全般をこなす一方で、峰岸デパートでパートとしても働いている。

六年前に夫が行方不明となっており、それと同時期に両親が行方不明となった榛名と由奈を自分の家に住ませた。

片桐愛

まりやの一人娘。

花毬町にある美容室で働いている。

榛名や由奈とは家族同然のように接しているようで、お互いに『姉さん』『妹』などと呼び合っている。

天野大地

桜雪中学校の二年生。

榛名や秀輝を先輩として大いに慕っている。

陸上部に所属しており、足の速さにかけてはかなりの自信を持つ。

芳賀鈴音

桜雪中学校の二年生。

由奈とは中学校に入ってから付き合いで、共にバドミントン部に所属している。

柑橘系の果物が大好物らしい。

< 第17話 > 【お迎え】

日曜日の朝。

朝食を食べ終え、家を飛び出し：僕が向かった先。
それがここ——我が桜雪高等学校。

「あゝ、やばしやばし。 今日も遅刻だ、いつそげいそげ！」

自転車に鍵をかけ、カゴから鞆を取り出した刹那。

眼前を走り抜けていった、ポニーテールの少女がいた。

「……………」

どうやら、遅刻しているらしい。

そして、急いでいるらしい。

……

「人生、余裕を持って生きたいものだね。」

遠くに霞む少女の背中を見つめながら、僕は呟いた。

そして、鍵をポケットに入れると：ゆっくりと歩き出す。

校庭へとやって来た。

グラウンドでは、サッカー部らしき男たちがボールを蹴り合っている様が見てとれる。

「……。」

彼らの練習風景を横目で眺めつつ、体育館の方へと足を進める。
なぜならば……。

体育館へと続く階段に座っている、見知った顔の人物を発見したため。

「先輩、おはようございます。」

「んっ？ ああ、君は……。」

彼の名は、芥琢磨^{かいたくま}。

現在、高校二年生。で……サッカー部所属。

切れ味鋭いパスと、強烈なミドルシュートが持ち味な人です。

「久しぶりじゃなか。元気にしてた？」

「見ての通り、すこぶる元気です。」

言葉を交わすのは、およそ二ヶ月ぶりぐらいになるだろうか。

彼の方も、すこぶる元気そうで……何より。

「んで、どうしたの？ 何か用？」

「はい……まあ。」

「おおっ？ もしかして、入部希望ってわけか？」

君だったら、歓迎しちゃうよ。」

ふむ。

サッカー部か…。

サッカーに青春を捧げる、高校時代――。
それも悪くはないな…と思うけれど。

「ミステリー…ハント部？」

「はい。」

「なんだよ、それ。 そんな部、聞いたことないけど…。」

そう。

僕がここ、桜雪高校まで足を運んだ理由。

それは、ミステリーハント部とやらの部室へお邪魔するためだ。

昨日の夜、彼女は言っていた。

『明日の朝、我々の部室まで足を運ぶように』――と。

「うん…。」

「あつ…いや、ちょっと待てよ。」

思考を巡らそうとしたところ、先輩から待ったがかかる。

「この高校って結構、ワケのわからない部も多いっていうからね。
中には、先生らでさえ把握してないところもあるとか…。」

「……。」

「だから、そのミステリーなんかって部も…無いとは言い切れない。」

…なるほど。

ミステリーハント部というだけあって、その存在自体も
ミステリーに満ち溢れている可能性がある。

「——ッ！？ 杉山、後ろ！」

突然、彼が驚愕した表情を見せる。

……

「……………」

「おおっ！？ ナイスキャッチ。」

背後を振り返った途端、目前まで迫っていたサッカーボール。それなりのスピードはあったものの…コースは真正面。この程度ならば、キャッチ出来て当然だった。

「そうか…お前なら、キーパーってポジションも充分にアリだよな。いや、でもなあ。やっぱ、高さとパワーを生かすなら…」

何やら構想を練っている芥先輩。

僕はそんな先輩のことよりも、遥かに気になることがあった。

サッカーボールの白い部分。

そこに、凝視しなければ確認出来ないほどの…小さく黒い文字を発見。

……

「杉山榛名くん。 部室は、三棟の一階にある。 探せ。」

一度内容を確認したのち、僕はその文面を読み上げた。

一棟は、各クラスの教室をはじめ、職員室などの主要な部屋があり…。

二棟は、美術室や理科室…音楽室といった、特別教室ばかりで。そして三棟は――

「……。」

どこことなく、異質な空気を感じる。

壁や廊下の色が、一棟や二棟と違い…なんだか色褪せた雰囲気。

人の気配が、全然しない。

シーンとした空間に、遠くから聞こえる喧騒だけが耳に届く。

「…んっ？」

階段の脇に、重厚そうな鉄の扉を見つけた。

倉庫…？ だろうか。

取っ手に手をかけてみたが…やはり、しっかりと鍵が掛かっている様子。

……

「……。」

今――誰か。

誰かの笑い声が聞こえた気がする。

上…階段の方からだ。

階段を見上げてみたものの、特に人影は見当たらない。

しかし…誰かが走り去る足音らしきものは、聞こえた気がする。

「…ふむ。」

気がかりといえば、気がかりだけど。

僕が目的地と定めた場所は、階段を上った先には無い。
とりあえず、この件はスルーしよう。

「杉山榛名くん。」

「…はい。」

何処からともなく――。

本当に何処からともなく、眼鏡をかけた女性が姿を現した。

これだけ接近されるまで、全く気配を察することが出来なかったと
は…

僕もモウロクしたものだ。

「待ちくたびれたので、迎えに来ましたよ。」

彼女は…うん。

間違いなく、デパートの屋上で出会った女性。

その長い髪と大きな瞳は、印象深い。

あれ…？

昨日見た時は、確か片方の瞳が――

「では、ついて来て下さい。」

静かな口調なのに、有無を言わせない雰囲気を感じる。

「……。」

この人…只者じゃなさそうだ。

独特の緊張感が体を伝い、僕は目が覚める思いだった。

<第18話> 【Mystery Hunter】

彼女に案内されるまま、建物の突き当たりにある
プレートに『対策本部』と書かれた部屋へと入った。

「ようこそ、いらっしやいました。」
「……。」

まず目を引いたのが、壁際にドンと佇む大きな本棚。
天井に届きそうな程の高さのそれには、ビッシリと書物が並んでい
る。

「どうぞ、お座り下さい。」
「……はい。」

彼女に勧められるまま、僕は椅子を引いて腰を下ろす。
教室で僕らが使ってるのと、まったく同じタイプの机と椅子っぱい。

……

部屋全体は、非常に薄暗い印象。
それもそのはず——二つ存在する窓があったと思われる場所には、
色褪せたクリーム色のカーテンが閉められていて…。

「では、遅ればせながら…御挨拶のほどを。」

部屋の奥の方に立つ彼女が、そう言つて僕の方を振り向く。

「私がミステリーハント部の部長、麻木乃亜あさきのあです。」

「……。」

部長…か。

……

「どうしました？」

キヨロキヨロと部屋内を観察する僕に、部長さんが首を傾げる。

「いや、あの…他に部員の方は？」

それ程広くもなく、死角らしきものもない部屋。

しかしながら、僕と部長さん以外…人影らしきものは見当たらない。

「今日は、私一人だけです。」

「…そうですか。」

『今日は』というからには、少なくとも他に一人以上の部員はいるみたいだ。

果たして、どんな面子なのだろうか…。

部長さんが、部屋の一番奥にある席に着く。

「さて、杉山榛名くん。」

電気スタンド。

筆記用具類が入れられてる缶。

積み重ねられた紙束。

透明なカバーのファイル。

ざっと見たところ、机の上にはそんな物が置かれているようだ。

「何か質問があれば、お伺いしますよ。」

「……。」

お伺いします…と云われても。

一体、何から聞いていけばいいものか。

「ああ…あのメッセージですか？」

あれは確かに、私が書いたものです。」

「相応しい人間を見つけるには、そうしろ——と、ある人に教わったものですから。」

まずは手始めに、あの公園のトイレに書かれたメッセージについて尋ねてみたわけだが…。

「あなたにもいずれ、会ってもらう機会があるでしょう。」

その件について詳しく聞きたければ…その際、本人から伺って下さい。」

「……。」

『ある人』…ね。

どんな人かは知らないが、その人も恐らく只者じゃなさそうだ。

「他に何か、質問は？」

「えっと…あります。」

もう一つ、どうしても聞いておきたいことがある。

「僕が、その…ミステリーハント部やらに入部することは…辞退は出来ないんですか？」

そうです。

僕は一言も、自ら入部したいとは申し出てない。

そう思わせるような言動も、見せていない。

というか、そもそもミステリーハント部って何なんだ——
って心情なんですが。

「もちろん、強制はしませんよ。ただし…。」

……

「いえ、何でもありません。お気になさらずに。」

「……。」

なさらずと言われても、お気になさる。

「杉山榛名くん。」

「はい。」

「あなた、この世に溢れる数々の謎を…解き明かしたいと思わない？」

僕とジツと目を合わせ、そんな質問を投げかける部長さん。
何と答えればいいものか、数秒迷ったが…。

「思います。」

自分の素直な気持ちのまま、そう答えた。

いつだって、素直なまま——ありのままでいたいものです。

「ならば、躊躇う必要はありません。あなたはもう、立派なミステリーハンターです。」

答えを聞いた彼女は、ビシッと僕を指差して、そう告げた。とりあえず、カッコいい。

<なんかさあ、ちょっと小耳に挟んだんだけどおー。（注目）>

<ウチの学校の図書室に、異世界から悪魔を呼び出すとかいう本があるとかないとかって話聞いちゃってー。（驚）>

<そのへん、どーなのよって感じ？（疑問）>

<気になって昼も眠れねって感じだし、そこそこよろー。（以上）>

「……。」

部長さんから渡された紙。

それを広げてみたところ、こんな文章を目撃してしまったわけだが。

「それはつい二日前、投書箱に入れられていた手紙です。」

「……。」

「投書箱は、我々ミステリーハント部へ気軽に依頼を申し込めるよう、

校舎の各地に設置されているんですよ。」

ふむ…。

そういえばこの部室の前にも、何か箱らしき物が置かれていた気がする。

白くて、四角い箱が。

「あつ、それはそうと——部長さん。」

僕は自分の鞆を開けると、その中からある物を取り出す。

「あの、これを。」

……

「杉山榛名くん。」

「はい。」

……

「そんな物を女性にプレゼントしているようでは…

この御時世、居心地よくいられませんよ。」

僕が差し出した物を見て、呆れたように呟く部長さん。

「いや、プレゼントというか…。これ、あなたの物じゃないんですか？」

僕が鞆から取り出し、彼女に差し出した物。

それは——雑巾。

言わずもがな、あの日あの公園にて拾ったアイテムだ。

「…思い出しました。あのメッセージを消すために、私が置いていった物ですね。」

どうやら、思い出してくれたらしい。

「しかし——あんな場所に置いていったのですから、私としては、もう所有権を放棄したつもりだったのですが。」

「それをこうして、この場に持ってきて来るとは…。
あなたも、なかなかマメな男です。」

「…どうも。」
なんか、褒められているのかどうか微妙な感じだ。

彼女は受け取った雑巾を、無駄のない動作で折り畳む。
そして、それを黒いアタッシューケースの中に仕舞った。
「あの…部長さん。そのアタッシューケースは？」

確か、昨日の夜にも見かけたヤツ。
彼女のような年頃の女性が持ち歩くには、
いささか違和感を感じる物だが…。

「これですか。この中には、ミステリーハンターの仕事に
活用するための道具が、常時揃えてあるんですよ。」
眼鏡のフレームを押さえながら、彼女はじょう舌に言葉を紡ぐ。

「このケースは、防弾・防水・防火・防音処理が施されていますか
らね。」

大切な物を仕舞っておくには、持ってこいというわけです。」
「……。」

ふむ。

よくわからないが、とにかく凄そうな物に思える。
というか…一体、何処で買ったんだろ？ そんな物。

< 第19話 > 【背後】

「ま、そういうわけで…。僕は、ミステリーハント部とやらの部員になっちゃったわけだ。」

「…ふん。」

昼ご飯を食べ終えた後、僕は飛鳥の家へ出向き…

昨日今日にあった、様々な出来事を報告した。

ただし――夜中にデパートへ侵入したことは内緒。

「人生、何が起るかわからないもんだね。」

「ま…そうかもね。」

アパートの一室で座布団に腰を下ろし、親友と語り合う。

たまには、こんな休日もいいものかな…。

などと心で呟きつつ、彼女の淹れてくれたコーヒーを口に運ぶ。

「ついさき、なんであんな…あたしん所に来たわけ？」

「んっ？」

……

「なにさ…。僕が来ちゃ、いけないの？」

「いや、そういうんじゃないさ。」

「久しぶりに、こうして友達が家を訪ねて来たっていうのに…。飛鳥ってやつぱり、冷酷非道な女だったのか。」

言葉を言い終えた瞬間、右膝に鋭い衝撃が走る。どうやら、何者かに蹴飛ばされたらしい。

「…痛い。」

「そのぐらい、我慢しなさい。」

テーブルの下を通し、放たれた前蹴り。

完全に死角からやって来た攻撃なので、避けれるはずもない。

「んで、話を戻すけど。」

蹴りを放った犯人——飛鳥は、憮然とした表情で勝手に話を戻そうとしている。

「あんたが、そういう変わった話仕入れた時ってさ…」

まず、あいつのトコに話しに行くのが定番じゃん。」

「あいつ、というところ…。」

…

「…秀輝くんのこと？」

「そうゆうこと。」

右膝に負ったダメージが、ジワジワと右足全体に広がっている。そんな身体異常から気を紛らわすため、僕はコーヒを口に運ぶ。

「さっき訪ねたんだけど、留守みたいだった。秀輝くんち。」
「ふん。」

電話も、留守電になってたし…。

家族揃って、何処かに出掛けてしまったのだろうか。

「だから、こうして君の家へやって来た——というわけ。」

「…あつそ。」

事情を聞いた彼女は、なぜか機嫌悪そうな顔つきをしている。もつとも彼女の場合、普段からそんな顔つきなのだが…。

——Side 陣内飛鳥——

「どうかしたの？ ハル。」

あたしが電話を終えて部屋に戻ってみると、ハルはなぜか窓際の辺り…あたしに背中を向けて立っていた。

ドスッ

「…痛ッ。」

「返事ぐらい、しろっての。」

得意の肘打ちを背中に喰らわせてやると、彼はようやくあたしに気付いた様子を見せる。

「なに？ なんか、外に変なものでもあった？」

「…うん。 あったかもしれない。」

「しれない…って。」

なんとも、曖昧な答え。

とりあえずあたしは、窓を開けてベランダに体を出してみた。

……

そこかしこに目をやってみるが、別に変わったものは見当たらない。
見慣れた家庭菜園やら、植木鉢やらがあるだけだ。

「何もないじゃない。」

「いや、だから…あつたとは言つてない。」

一つため息をつくと、あたしはハルの横を通り過ぎて
テーブルの側へと歩いていく。

「飛鳥。」

「んっ？ ……今度は何？」

あたしは更に一つため息をついて、ハルの顔を見る。
その瞬間——背筋に寒気が走った。

彼が見つめる視線の先。

そこには、あたしが立っている。

でも、彼が見つめているものは…あたしだけじゃない。

その後ろ。

あたしの、すぐ…後ろ。

「ハル…どうかしたの？」

いつも通りの口調で、尋ねてみた。

別に、無理にそうしようという気はなかったけど。

……

チラッとあたしの目を見て、瞬き。

彼はそれだけしか反応を示してくれなかった。

「……。」

心臓が、凄く早さで高鳴ってる。

なに……？ 何が……起こってるの？

パツと後ろを振り返れば、その答えは出るはず。

そう知りながらも、あたしは立ち尽くすことしか出来ない。

「……ッ！」

何か、冷たいものが――肩に触れた。

「あつ――……えっ？」

頭がなんとか、正常に回り始めた時。

何かに包みこまれてるような温もりが、全身にあった。

……

これって、ええと。

もしかして……抱き締められてる？

やっと状況が把握しきれたあたしに、次なる異変が起こった。
体がふわりと浮き、そして……。

「なっ！　ちょ、ちよつと……！？」

自分の体の自由を奪ってる奴の『その行動』に
またもや思考がまとまらなくなる。

「ハル……！」

あたしの戸惑いなんかお構いなし——といった感じに、
彼はベランダの柵を飛び越えた。

<第20話> 【やたらめったら】

——Side 杉山榛名——

「…脱出成功。」

小さく呟きながら、僕はさっきまで立っていた
飛鳥の家のベランダを見上げる。

「ん」と…とりあえず。 足、とか…大丈夫？」

色々と複雑そうな顔をしている飛鳥が聞いてきた。

「大丈夫。 ちよつと、骨にヒビが入ったような痛みを感じるぐらい。」

…

「ごめん。 多分、そんなに酷い異常はないと思う。」

「…そう。 よかった。」

どうやら、冗談を言っているいい雰囲気じゃなかった様子。

飛鳥は鋭い目つきをしながらも、どこかホッとした表情をしている。
しかしまあ、充分に練習を積んでたとはいえ…『見えない翼』を
ちゃんと使うことが出来て、僕もホッとしている。

「で、まあ…どうしてまた、人を抱きかかえたまま
アパートの三階から飛び降りるなんて行為に及んじやったのかしら
？」

腕組みをしつつ、彼女が尋ねてくる。

「うん…。それは、話せば長くなるんだけど。」

「いいから、話しなさい。簡潔に——10秒以内に。」

白装束。

顔を覆い隠すような長い黒髪。

そして、その髪の隙間から見えた…あの目。

いや、そんなことよりも。

人様の家に勝手に——そして、全く気配も感じさせず
侵入していることの方に注目すべきか。

とにもかくにも、あの人（…？）が只ならぬ雰囲気を持
っていたことは確かだ。

明らかに何か…内面から発せられる、強いオーラみたいなものがあ
った。

「それってやっぱり、幽霊さん…？　なのかな。」

「わかんない。」

問題の部屋にてテーブルを囲んでいるのは、

僕と飛鳥と…そして、もう一人。

ついさつき到着したばかりの、神田日和なる人物がいた。

「幽霊なんて、そんなもんいるわけないでしょ。」

「えっ、でも…んっ？ あーちゃんは見てないの？」

……

「…ええ。 あたしは、見てないわ。」

飛鳥は、何かを思い出したように

表情を強張らせながら、日和の質問に答えた。

「……。」

そういえば、あの瞬間——『あの人』の手が

飛鳥の肩に触れたようにも見えたけど。

「ま、よくわからないけどさ…。 とりあえず、

家の中チェックしてみるのがいいんじゃない？」

日和から、そんな提案が飛び出す。

「…うん。」

「それもそうよね。」

もつともな案だった。

少なくとも、この目で確認出来る存在が

家の中にいるかどうかは、はっきりするだろう。

部屋数は多くないので、調べるのに大した時間は掛からなかった。
玄関から居間。

書斎、飛鳥と映子^{えいこ}さんの部屋。

そして、バスルーム…トイレに物置——と。

「…ふう。」

「とりあえず、何も無かったわね。」

調査を終了させた僕らは、居間にて再びテーブルを囲んでいる。
まあ、大雑把といえは大雑把な調査ではあったが…。

人間一人が隠れられそうなスペースなら、調べられるだけ
調べ尽くしたつもりだ。

とは言っても、僕はそんなに調査に積極的ではなかった。

というか…あんまり調べさせてくれなかった。

特に飛鳥&映子さんの部屋については、部屋内に入ることすら
拒否されていたという始末。

「たっだいま〜！」

玄関のドアが開く音と共に、大きな声が響き渡る。

そして、何者かが居間に接近して来る足音。

「おっ…ハルくんにヒヨちゃん。　こんにちは。」

「こんにちは〜、映子さん。」

「お邪魔させてもらってます。」

彼女こそ、陣内映子さん。

ショートカットでボーイッシュながら、大人な雰囲気もある女性。
飛鳥とは――はつきり言って、似てないかも。
容姿的にも、性格的にも。

「飛鳥…どしたの？　なんか、いつにも増して恐い顔しちゃって。
目をパチクリさせながら、飛鳥に向かって声を掛ける映子さん。」

「それとも、ハルくんの前だから緊張してるだけか？
飛鳥もいよいよ、思春期突入ってか！　ヒューヒュー」

…

冷めた目で、姉を睨む飛鳥。
困ったような笑顔の日和。

場の空気を読めず、何とも言い難い表情の映子さん。

「ハルちゃん。」

「…了解。」

日和に促されるような形で、事情を説明し始めること数分。
なんだか微妙だった部屋の雰囲気も、少しほんわかしてきた。

「あっちゃー、幽霊か。　そういうの、苦手なんだけどなあ…私。」
これが、話を聞き終えた映子さんの第一声。

「僕も…どちらかと言えば、苦手です。」

「私も。」

まあ、得意な人間の方が少ない気もするけど。

「あつ、そういえばさ。全然関係無い話になるんだけど…」
「——じゃあ、後にしてくれる？」

……

「やだ。話すたら話す。」
妹の制止を軽く往なすと、映子さんは持っていたバッグを置き
テーブルの前に座った。

「……。」

…ふむ。

なかなか、気になる話だったな。

頭に思い浮かぶのは、昼間に映子さんから聞いた話。
なんでも、彼女の職場にいる同僚の一人が
一週間ほど前から行方知らずとなっているらしい。

無断で休むことも結構ある人らしいのだが…一週間もの間
全く連絡が取れないというのは、ちょっと——といった感じらしい。

……

「…うん。」

幽霊の事といい、映子さんの話といい…。

世の中、不可思議な事も少なくないんだね。

「……。」

——というか。

最近の僕の周りでは、不可思議な事がやたらめったら起きていくような気がするのだが。

その一つの証拠である、机の引き出しに視線をやる。

あの中には、あの例の…青いアレが入っている。

峰岸デパートにて拾った、あのアレだ。

「……。」

峰岸デパートといえば。

都さんのブラックボール……そして、眼鏡のあの人。

いや——都さんも眼鏡掛けてるんだけど。

<第21話> 【スキンシップ】

日曜日も明けたから、今日は月曜日。
今日からは、お昼を過ぎても学業に勤しまなければならぬ
日々が続くことになる。

「…とまあ、色々と大変だったわけ。」
「なるほど。」

通学中も含め、話し始めること数十分。
ようやく、話すべきことを一通り話せた感じた。

「でさ、放課後に呼ばれてるんだよね。部長さんに。」
部長さんとは、言わずもがなミステリーハント部の部長さん。

「なんか色々と不安だし…秀輝くん、一緒に来てくれない？」
「構いませんよ。」

僕の提案をすんなり承諾してくれる秀輝くん。
さすがは、我が親友。

……

ふと視線を感じたので、首を反対方向に回した。

「…あつ。」

新里さんが、ビクツとして小さく声を漏らす。

「もしかして、今の話…聞いてた？」

「えっ？　っと…う、うん。」

「—ならば、生かしておけない。」

「…えっ？」

—Side— 新里美樹—

「はえっ…！？」

あまりの出来事に、喉から変な声が出ちゃう。

だ、だって…。

席から立ち上がったかと思うと、杉山くんがいきなり私を羽交い締めにしてきたんだもの。

「出来れば…。」

「えっ？」

「出来れば、君とは…もっと違う形で会いたかったな。」

あつ—その台詞。

確か、ちよつと前にやってたドラマのやつだ。

最終回で、主人公が秘密を知った親友に銃を向けて—…って！
杉山くん…まさか、本気で！？

「や、やだ！」

絡んでる腕を掴み、ブンブンと首を振り回したりする。
でも杉山くんは、ビクともしてくれない。

「さあ…覚悟はいいか？」

耳元でそう呟かれたかと思うと、絡んでる腕に力が込める。

「や、やめて下さ——…い？」

突然に、絡んでいた腕が解かれた。

私は反射的に後ろを振り向く。

「何バカなことやってんのよ。この万年無表情男。」

「いや…うん。ちょっとしたスキンシップのつもりなんだけど。」

背中を痛そうに擦ってる杉山くんと、えっと…陣内さん？ だっけ。

「この子、本気で怖がってたわよ。ほら、謝んなさい。」

「…うん。」

「新里さん、ごめんなさい。」

「あ…う、うん。」

まだ事態を把握しきれない私は、戸惑いつつ杉山くんを見る。
とりあえず、命の危険は去った…のかな？

「ごめんねー、美樹ちゃん。ウチのハルちゃんが変なことして。」

「う…うんうん。」

いつの間にか傍に立っていた神田さんも、ペコッと小さく頭を下げた。

「だいたい、あんたって奴はね…。」

「いや、うん。だからさ…。」

陣内さんと杉山くんは、まだ何か言い争ってるみたいだ。

「でもでも、ハルちゃんがそういうことするのって

心許せちゃう人とか…好きになった人にしかないんだよ。」

内緒話をするように、小さな声で囁く神田さん。

「えっ？」

「あははっ。つまり、そう悪いことでもないってわけ。」

心許せる…。

——好き？

「……。」

手が自然と、自分の左耳に触れる。

そこが凄く熱くなってるのがわかり、なんだかとても恥ずかしくなった。

——Side 杉山榛名——

国語教師の村瀬^{むらせ}唐^{とう}司^し先生は、熱血派な雰囲気を持つ。

しっかりと、ハキハキした口調。

事ある毎に、教鞭をバシバシと黒板に叩きつける姿勢。

還暦ももつすぐという年齢でありながら、実にエネルギー感を感じる。

「……。」

そういえば、確か野球部の顧問も務めているんだっけ？
うん…。

なんとも血気盛んで、羨ましい限りです。

「それじゃ、っと…寺路！ 続きを読んでくれ。」

「はい。」

先生に促され、僕の斜め前の席にいる寺路くんが立ち上がる。

寺路治くんとは、席が近いこともあり

何度か会話を交わしている仲だ。

いかにも今時の高校生というか…素朴というか、普通っぽい印象の人。

「そこで見た光景に、男は思わず息を呑んだ。
なぜなら、遠く離れた…。」

……

順調に読み進めていたと思われたが、中途半端なところで
言葉を詰まらせてしまった寺路くん。
これはもしか…。

……

「故郷です。」

「えっ？ あ…ああ。」

助言をした僕にチラッと目をやった後、彼はすぐに視線を教科書に戻す。

「なぜなら、遠く離れた故郷こきやうを思い起こす光景が眼前に広がっていたからである。そして…。」

「ふう…。杉山、さっきはサンキューな。」

「困った時はお互い様、ってものです。」

読書も終わり、黒板に何やら色々書き始めた先生を尻目に僕は言葉を交わす。

「『こきよう』か『ふるさと』のどっちかで迷っちゃったんだ。いや、焦った焦った。」

「なるほど。」

カツカツと結構なペースで書いていくが…意外にも、文字は達筆。いや——国語教師なんだから、別に意外でもないか。

「お前よく、どっちの読み方かわかったな。」

「いえ…。実は僕も、どちらが正解かはわかりません。」

「…はあ？」

むっ。

一瞬、こっちに視線をやった…か？

いずれにせよ、長話は禁物かも。

「こついつのは、言ったもん勝ちなんですよ。」
「ん…そついつもんか？」

<第22話> 【奇妙な二人】

4限目の授業が終わった。

ここから先は、高校生になって初の昼休みを過ごすこととなる。

差し当たって、まずは腹ごしらえ。

僕や秀輝くんは、それぞれお弁当を持参してるため
あとはまあ…何処で食べるかということなのだが。

「んじゃ、俺はなんか買ってくるから。」

「はい。行つてらっしゃい。」

こちらは、学生食堂。

俗に学食とか言われたり、言われなかったりする場所だ。

美味しそうな匂いと生徒たちの賑わいぶりにより、独特の雰囲気を感じる。

「凄い賑やかだね。」

「…ええ。」

僕と秀輝くんはお弁当があるため、無論ここで
何かを仕入れたりする必要はないのだが。

学食というものが、一体どういった雰囲気なのか気になったため…

寺路くんにつき添うような形で、来てしまったわけだ。

「メニューも結構、美味しそう…。」

通りすがりの生徒のお盆の上にある、スパゲッティらしき料理に目が釘付けとなってしまう。

ナポリタンか…。 ナポリタンなのか。

「たまには、ここメニューで腹ごしらえってのもいいかもね。」

「そうですね。」

弁当を作る手間も省けるだろうし…。

その辺りの按配は、まりやさんと相談しておこう。

「うーっす。 待たせたな。」

「待たされました。」

やがて、寺路くんがお盆を持って帰ってきた。

「見ろ、ハンバーグ定食だ。」

「おおっ…。」

ハンバーグ。

それは、男の子の永遠の憧れ。

ハンバーグが嫌いな男の子を、僕は男の子と叫ばない。

「これで300円ってんだから、なかなかだよな。」

「……。」

確かに…。

安価ながら、ポリューミーさの追求を忘れていない。

しかし——まだ、味が残っている。

それが駄目ならば、所詮は見かけ倒しの一品ということになる。

「それじゃあ…いただきます。」

「いただきます。」

僕と秀輝くんは、手を合わせて食前の挨拶をする。

……

「…いただきます。」

なんか微妙な間があった後、僕と秀輝くんに軽く目をやると…
寺路くんも、ぎこちない感じで挨拶をした。

放課後。

僕と秀輝くんは教室を抜け出すと、人目を忍ぶように
校内をサササツと移動していく。

別に、忍ぶ必要はないのだが…なんとなく、そんな気分だったから。

第一棟から第二棟。

そして、第三棟へ——無事に到達。

「えっと。確か、部室の位置は…。」

一階の、建物の突き当たりだったはずだ。

前日の記憶を頼りにしつつ…やはり、どこか異質めいた雰囲気のある空間の中を移動していく。

……

「ここだ。」

プレートの『対策本部』の文字を見て、
僕らが目的地に到着出来たことを確信する。

…それにしても。

なんで『対策本部』なんてプレートが付けられてるんだろ？

「失礼します。」

ドアノブを回し、部屋の中へと足を踏み入れる。
昨日来た時と同じく、まだ太陽はカンカンに照り付けてる時間帯
だというのに…部屋全体は淡い闇に包まれていた。

「……………」

一番奥の席に、人影がある。

部長さんのようだ。

「来ましたね、杉山榛名くん。　おや…そちらの方は？」

部長さんは僕の顔に目をやった後、その視線を
僕の後ろに立つ秀輝くんへ移す。

「僕の友達です。　黒沢秀輝くんといいます。」

「ほう…友達、ですか。」

……

秀輝さんと部長さんが、見つめ合う。

いや…睨み合う？

——探り合う？

……

長い。

何なんだ、この奇妙な沈黙は。

「……。」

まあ、考えてみれば…長い付き合いをしてる僕ですら、

秀輝くんはミステリアスに溢れた人物。

ミステリーハント部の部長ともあるう人なら、その雰囲気に興味を持つのは当然のことかもしれない。

「あなたも、入部希望者ですか？」

沈黙を打ち破ったのは、部長さんのこの一言だった。

「いえ…違います。彼に頼まれ、付き添いに来ただけです。」

「なるほど。そうでしたか。」

お互い無表情の、淡々とした会話が交わされる。

「……。」

それにしても、『あなたも』って…。

だから僕は、自分で希望して入部したわけじゃないってのに。

< 僕の家で飼っていたペット達が、逃げ出してしまいました。 >

< 朝になって、いつものように挨拶をしてみれば、なんと水槽の中にいた二匹の姿が、影も形もなくなっていたのです。 >

< ミステリーハント部の皆様の力を借り、あの子達をどうにか捕まえたいと考えています。 よろしく願います。 >

「——そういうわけです。」

僕が手紙を読み終えるのを見計らったかのように、部長さんが口を開いた。

「緊急事態のようですから、この件を我がミステリーハント部の最優先課題に決定しました。」

「……。」

この手紙は、今朝の内に投書箱に入れられていた物らしい。

送り主は…なかたじょうへい中谷庄平さん。 この高校の二年生。
家の住所と電話番号まで、しっかり表記されている。

「杉山榛名くん。」

「…はい。」

「これが初仕事ですよ。 頑張りなさい。」

<第23話> 【初仕事】

中谷先輩と電話で話し合った結果、待ち合わせ場所は花毬町にある『ヒヤシンス』という喫茶店に決まった。太陽がオレンジ色に染まりつつある頃、僕は秀輝くんと共にその喫茶店へと向かった。

中谷先輩は、ちょっとロングヘア気味で…細身な少年。アウトドアよりはインドア派、といった印象を受ける人。

「これが僕の家で飼ってる、二匹のペットです。」
そう言うと彼は、鞆から二枚の写真を取り出し、テーブルの上に置く。

そこに写っていたものは――

「こつちが、ドングリガメのオソアルキ。そしてこつちが、ホワイトロクマガニのヨコアルキです。」

「……。」

少し青みがかった色の皮膚と甲羅を持つ、亀らしき生物。そして、全身が真っ白な色合いをした蟹らしき生物。二枚の写真には、それぞれそんなものが写っている様子。

「えっと、ドングリガメ…のオソアルキ？」

「はい。」

「それと、ホワイト…——えっと。」

「ホワイトシロクマガニの、ヨコアルキですってば。」

……

「秀輝くん、メモしといて。」

「了解。」

僕が指示を出すと、秀輝くんは服の内ポケットからサツとメモ帳を取り出した。

更にペンを取り出すと、流暢な文字でメモを取り始める秀輝くん。

「…おおつ。　なんか、ドラマみたいですな。」

そんな動作を見て、中谷先輩は少し驚いたように目を見開いた。

「……。」

なぜ、そんな動作を『いつもこんなことやってます』的な空気を漂わせながら、することが出来るんだ？

やっぱり、この人…只者じゃない。

「で——どうやって探しましょうか？」

「そうですね…。」

中谷先輩に尋ねられ、僕は頭の中を整理する。

「聞き込み調査…。　あとは…ポスターを作って、目撃情報を募るとかいう方法が思い浮かんだのですが。」

言葉を言い終えると、秀輝くんの方に目をやる。

どうやら、特に異論は無い様子らしい。

「ふむ。 いやいや…その辺りのやり方については、君達にお任せしますよ。 何しろ、僕は素人ですから。」

「……。」

僕もまだ、これが初仕事なんですけどね。

「この写真…お借りしてもよろしいですか？」

「ああ、どうぞどうぞ。」

先輩の許可を貰えたところで、二枚の写真を手元に引き寄せる。そして、写真の中の二匹に再度軽く目をやった後…それを自分の鞆の中へと仕舞った。

「見かけた人は、こちらまで御一報下さい…。」

「榛名さん。」

ノートを開き、ポスターに書く文章の下書き中。

秀輝くんの名前を呼ばれ、鉛筆を持つ手がピタリと止まる。

「そこは『電話して下さい』にした方がいいかと思います。」

「えっ…何で？」

「小さなお子さんが、情報を提供してくれる場合もあるでしょう。だから、文になるべく難しい表現や漢字などは使わないのが賢明です。」

「…なるほど。」

秀輝くんの指摘に頷き、僕は新たな文章を書き出す。
——と同時に、部屋のドアをノックする音が。

「どうぞ。」

……

ドアを開け、姿を現したのは…。

エプロンを付けた、佳代さんかよ——秀輝くんのお母さんだ。

「榛名くん。もう日も暮れちゃったみたいだけど…

お家に連絡とかしなくても、大丈夫？」

「……。」

佳代さんの言葉を受け、自然と窓の外へ目がいく。

そこに映るのは、既に真っ暗闇と化した空の姿。

続いて、時計にも目がいった。

「ところで…何をしてるの？」

僕や秀輝くん、テーブルに置かれたノートや写真などに目をやりながら

佳代さんが尋ねてきた。

「この亀と蟹を探すため、ポスターを作ろうとしているところです。」

「

へえ〜っ。 亀と蟹…？」

僕の返答を聞き、佳代さんはいまいちよくわからない
といった様子で首を傾げる。

ま…当然といえば、当然の反応だ。

「話すと長くなるので——詳しい事情は、後で秀輝くんに聞いて下さい。」

「うん、わかったわ。ところで……お家に連絡は？」

「します。今から。」

夕飯も食べ終え、もう夜中の8時台を突破した頃。
僕と秀輝くんは、自転車に乗って叔父ちゃんの家へと向かった。
そのお目当てというのが——

「……。」

現在、僕の目の前で、ウィンウィンと音を立ててる物体。
大きくて、四角くて、そして……ハイテクな雰囲気を感じ切れない物
体。

そう。

僕らは、このコピー機と呼ばれる機械が目的で
ここ——叔父ちゃんの家までやって来たわけだが。

……

ガッガーとハイテクな気分の音を立てつつ、
次から次にポスターの複製が作り出されていく。
僕はただ、その光景に目を奪われていた。

「しかし、相変わらず変なことに巻き込まれてるなあ…お前は。」
叔父ちゃんの言葉が聞こえ、僕はコピー機から目を離す。

僕が視線を向けたと同時に——叔父ちゃん、秀輝くんの方を向く。

「君も、付き合ってて大変だろ？　いつも世話掛けて、悪いね。」

「…いえ。私も、退屈しませんから。」

叔父ちゃんに話しかけられると、秀輝くんは

読書中の本のページから視線を上げ、返事をした。

「……。」

秀輝くん。

君は、単なる退屈のぎで僕と付き合っているのか。
いや…まあ、別にいいんだけど。

「ところで、叔父ちゃん。その…それは何なの？」

ちよつと気になる物を発見した僕は、棚の上に置いてある

『それ』を指差しながら尋ねた。

「ああ…それかい？　ついこの間、浦西つらにしの奴から貰ったんだが。」

「浦西さんから。」

浦西つらにし権三さん。

叔父ちゃんの友人であり、自称・冒険家を語っている——少し変な人。

そして、かなり強面の顔をしている。

頬に大きな傷とかもある。

「なんでも、アマゾンの奥地にある村の住人から貰ったものらしいぞ。」

「…アマゾン。」

「アナコンダに襲われていた村人を助け、礼として受け取ったんだとよ。」

「…アナコンダ。」

うん…。

相変わらず、凄いことやらかしてる人だ。

といっても——浦西さんの話には、冗談も凄まじく多い。
今回の話は…どうだろう？

Episode 【Last Night】

こうして君と出逢うのは、何度目になるだろう…。

こうして最初の言葉を考えるのは、何度目になるだろう。

どうしてだろう。

これは、当たり前のことなのに…。

当たり前のことに、気付いただけなのに。

凄く…嬉しい。

「変わらないなあ……。」

望遠鏡から見る景色を眺めながら、青年がボソリと呟く。

彼の視界にあるのは、漆黒の空と煌めく星たち。

そして、ライトアップされた都会の街並み。

「……。」

望遠鏡を覗き込めば、そこにもう一つの世界がある。

大袈裟かもしれないけれど、人間にとってそれだけ

『見方』というものは重要なものだから。

静寂が包む真夜中のビルに、機会音が鳴り響く。

青年は望遠鏡から目を離すと、音の発生源である

エレベーターの方へと視線をやった。

ドアが開き、一人の小柄な青年が姿を現す。

彼は望遠鏡の側にいる青年を静かに数秒見つめた後、歩みを始めた。

「役者は揃いましたよ。 榛名さん。」

「……そう。」

どうやら望遠鏡を覗いていた青年は、榛名という名前らしい。

彼は少しの間、ぼんやりと宙に視線を漂わせ……再び望遠鏡を覗いた。

……

二人の間を沈黙が流れる。

それは、緊迫しているようで…それでいて、穏やかな。恐らくは、この二人だけが作り出せる空気感なのだろう。

「いよいよ、最後の決戦だね。」

長い沈黙を破ったのは、榛名のこの一言だった。

小柄な青年は、小さく『はい』とだけ答える。

「……。」

榛名は望遠鏡から目を離し、天井を見上げる。

その無表情な顔からは、彼の心情を察することは出来ない。

「勝てますかね。 私たちは。」

小柄な青年が床に視線を落としながら、ポツリと呟いた。

その言葉を耳に入れた榛名は、ゆっくりと彼の方へ首を向ける。

「大丈夫だよ。 僕たちは、強い。」

榛名は自らの左胸に手をやりながら、言葉を紡ぐ。

「それは、僕たちが一番知っていることじゃない。」

……

「それに…。」

…何を恐れている？

いつでも私が思うままに、物語は進んできた。

私の成すがままに。

私が望むままに。

「心持つ者に、絶対は無いんだから。」

<第24話> 【宇宙ロマン】

——Side 片桐愛——

「ふぁゝ…あつ。 今日もこんなに良い天気ゝゝ…っと。」
最近お気に入りとなってる曲の歌詞を口ずさみながら、
いつものように郵便受けの前に立つ。

郵便受けに手をつ込み、中にある物を引っ張り出す。
新聞に、広告…それと、封筒が一つ。

「えーっと、榛名宛てか。」

茶色い封筒の宛て名『杉山榛名様』の文字を見て、呟く。

「誰からだろ…?」

ああ見えても、アイツは結構知り合いが多いみたいだから…
手紙とかが来ることは、そんな珍しいことでもない。

「ラブレターとかだったら、面白いんだけど。」

ああ見えても、アイツは結構モテるからねえ。

本人は、単に珍獣的な好かれ方されてるだけ…とか思ってるようだけど。

あたしの勘じゃ、そうでもないヤツも多い気がするわよ。

……

「…なに？　これ。」

家へ戻ろうとした瞬間、ある物が目に止まった。

それは、ウチの塀に貼られているポスター。

横に並んだ二つの写真には、それぞれ亀と蟹らしき生き物。

その下には『みかけた人はここにでんわしてください』の文字と、
どっかの電話番号らしき数列。

「姉さん、おはよう。」

すぐその曲がり角から姿を現した人が、あたしに声を掛ける。

「おはよー、ハル。」

恐らく、朝の散歩を終えたところだろう。

しかし…毎朝毎朝、よく飽きないもんだわ。

「ああ榛名、丁度よかった。これ見てよ、これ。」

「んっ？」

榛名の腕を引っ張り、塀に貼られたポスターの真ん前に立たせる。

「どこのどいつか知らないけど…変なイタズラする奴がいるもんねえ。」

顔を拝ましてもらいたいもんだわ。」

再度ポスターを眺めながら、あたしは溜め息交じりに呟いた。

……

「……。」

「どしたの？ ハル。」

なぜか突然、ハルは自分の右手を、スツと空高くに上げた。
そんな弟の行動に、あたしは頭ん中に『？』マークを浮かべる。

「拝みたければ、好きなだけ拝んで下さい。」

「……どーゆーこと？」

——Side 杉山榛名——

「ホワイトシロクマガニは、ドングリガメよりも更に希少な品種です。」

天然記念物にこそ指定されていませんが……生息地は、ロシアなど東ヨーロッパのごく限られた地域のようです。」

登校中。

例の亀と蟹について、秀輝くんから講義を受けつつ
僕は自転車を走らせていた。

そういった分野は、専門外かな……？ という気もしたのだが。
そこはやはり、秀輝くん。

僕が次々投げかける質問に、予想以上の知識で対応してくれている。

「…なるほどね。」
交差点に差し掛かり、自転車を止める。
それにタイミングを合わせたかのように、秀輝くんの話も終了した様子。

……

「おっす！」
道路を行き交う車を、ボーッと眺めているところ。
誰かに声をかけられてしまい、僕は首を横に回した。

「サツくんじゃない。　おはよう。」
「オウ、おはよ。」

そこにいたのは、僕らと同じく自転車に跨った…
桜庭光一こと、サツくんの姿。
顔を合わせるのは、何日かぶりかな。

「あつ、そういえばさ…アレはどうなったの？」
「アレ？」

「ほら、この前の夜に渡した…あの、変な鍵のこと。
持ち主とか、まだ見つかってないの？」

僕がその話を始めた途端、サツくんの表情が微妙に変化した。
いつもよりか、ちょっと真面目な顔つき…。
普段からそういう顔してたら、多少はカッコいいのに。

「それがさあ。　ん…この話、信じてくれるか？」

腕組み&首を傾げる動作をしつつ、彼が疑問形の言葉を発する。
この話と言われても、どの話のことだろ。

……

「ま……いいや。お前らにだったら、話しても大丈夫だろ。」
10秒程の間を置いた後、サツくんは再び口を開いた。

「このナイロンってのは、吸湿性や耐衝撃性…柔軟性に優れていて
ね。」

宇宙服にも使われている繊維なのよね。」

ふむ…。

交番に戻った時、ポケットに入れていた筈の鍵が消えてしまった――
か。

そそっかしいと言えばそそっかしい彼のことだから、単にどっかで
落としてしまったという可能性も考えられるんだけど。
どちらにせよ、その後の行方が気になる。

「宇宙といえば、みんな…知ってるかな？ もうすぐ、アメリカで
アポカリプスってロケットが発射予定なんだけど。」

「……。」

頭の中に、鍵を拾ったあの夜のことが蘇る。

僕はゆつくりと自転車を走らせながら、街中の風景を眺めていた。

そして…あの人。

あの後ろ姿——頭に焼き付いて、離れてくれない。

「そのロケットの開発には、私の父も携わっていてね。
しかもしかも！ 私も開発に協力してあげた、人工衛星を積んでるんだ。」

……

「あら…なんか、感動薄め？」

ひとしきり生徒達の顔に目をやった後、先生は
ガツカリしたような様子で眉をひそめた。

「はあ…イマドキの若者には、わかんないのかな？
宇宙に懸ける、このロマンに溢れた想いつてもんが。」

ちなみに今は、科学の授業中。

担当の嵐林萬壇先生は…らんばやしまだん両親共に、その分野では
知らぬ者はいないという程の科学者らしい。

ちなみに、お母さんの方は中国人だとも聞いている。

「宇宙、か。」

日常生活の中では、なかなか浮かぶことのない単語。
それはやっぱり、僕らとかけ離れた場所にあるものだから。
でも、だからこそ——

「宇宙には、ロマンがあるんだよね。」

「…ええ。」

僕の言葉に、小さく頷く秀輝くん。

「僕もいつか、宇宙に行ける日が来るといいんだけど。」
窓の外にある青空を見上げながら、呟いた。

「行けますよ…きっと。あなたなら。」

<第25話> 【嫌い】

放課後。

僕と秀輝くんは教室を抜け出すと、昨日と同じように人目を忍びながら、校内をサササッと移動していく。別に、忍ぶ必要はないのだが…今日も、そんな気分だったから。

「なるほど。それは、御苦労さまでした。」

昨日の活動内容を報告したところ、部長さんからそんな労いの言葉をいただいた。

「そうなる…後は、目撃情報が出てくるのを待てばいいわけですね。」

「いいかと思います。」

まあ当然、地道な聞き込みなども合わせてやった方が見つかる確率は高くなるだろうけど…。

とりあえずは、気長に待つという姿勢でいいかと思う。

ドングリガメと、ホツキョクシロクマガニ。

調べてみたところ…厳しい環境に置かれても、彼らは結構逞しく生きていける奴らのようだし。

「では、杉山榛名くん。」

「…はい。」

「その件と並行して、あなたには新たな仕事をやってもらいます。」

部長さんが、引き出しの中から何かを取り出す。

そして、それを僕に手渡す。

いつか何処かで見たような…白い紙。

<なんかさあ、ちよつと小耳に挟んだんだけどおー。（注目）>

<ウチの学校の図書室に、異世界から悪魔を呼び出すとかいう本があるとかないとかって話聞いちゃってー。（驚）>

<そのへん、どーなのよって感じ？（疑問）>

<気になって昼も眠れねって感じだし、そこんところよー。（

以上）>

「確か、2日前にも目を通しましたかね。」

「……。」

部長さんの言葉に、小さく頷く。

この印象的な文面——忘れようと思っても、中々に忘れ難い。

「一見すると、突拍子も無いような話にも思えますが…」

そういったモノの中にこそ、思いも寄らぬ発見があるものです。」

「……。」

そんなものだろうか。

言われてみれば、そんな気がしなくもない。

「…図書室に行けばいいんですか？」

少しの沈黙を挟み、部長さんに聞いてみた。

「答えは、イエスです。現場から得られる情報ほど、信頼の高いものはありませんからね。」

「…なるほど。」

この学校の図書室は、中々に広い。

まあ、図書室の広さの基準というものはよくわからないが…少なくとも、小学校や中学校にあった図書室よりかは格段に広い印象を受けている。

「……。」

席に着いて、本を読んだりノートを開いたりしている人が7人。それ以外にも、室内をうろつく人が数人見られる。

「さて、来てはみたものの…。一体、何から始めればいいんだろ。」

独特の空気に、なんだか落ち着いた気分になりながらこれから何をすべきかを思案する。

調査の基本は、聞き込み——と言われているが。

『ここに悪魔を呼び出す本がありますか？』などと尋ねてみるのは、いささか唐突過ぎる行動のような気もする。

「とりあえず…どんな本があるのか、見て回ってみる？」
「賛成です。」

僕と秀輝くんは、二手に別れて探索を開始した。
大体で図書室の真ん中を境にし、それぞれのスペースにある本たちに
二人で目を通していこうという作戦だ。

「ふむ。」
前と後ろを本棚に囲まれた状態で、ふと考える。
こういった場所に来ることは、どれくらいぶりだろう…と。

秀輝くんが自他共に認める読書好きなため、遊びコースの一つとして
図書室やら図書館に行くことは、珍しいことではないのだが。
でもなんか、最近行っってなかった気が…。

「…ん？」
気になるタイトルの本が目にとまり、僕は無意識に手を伸ばした。
すると、本に手が届いた——と思った刹那。

別の何者かの手が視界の隅から現れ、僕の手の中甲に軽く触れた。
僕が手を引くと同時に、何者かの手も引っ込む。

「……………」
「……………」
「……………」

まるで、何かのドラマみたいな展開。
少しワクワクした気分を湧き上がらせつつ、『彼女』と目を合わせた。

白いヘアバンドを付けてて…細い目をしてる少女。
女性の割には、身長が高い方に感じる。

「どうも、こんにちは。」

「…こんにちは。」

お互いに挨拶を交わすことで、沈黙を破る。

「え…つと。」

「……。」

無表情な顔で見つめられ、どうすればいいものか迷う。

別に、このまま立ち去ってしまっても支障はないんだろうけど…
なぜだか、そういう気にはなれない。

「あの、失礼ですが…お名前は？」

とりあえず、名前を聞いてみることにした。

……

「私…自分の名前も名乗らず、他人の名前を知りたがる男って嫌い。」

彼女の表情が、若干ながら不快そうなものになる。

両手を後ろに組んだ姿勢で、キツとした視線を僕に向けてくる。

「僕は、杉山榛名といいます。」

彼女の言うことももっともに感じたので、僕は名を名乗った。

「私…佐古鉢芽衣。」

僕が名乗り終えてすぐ、彼女も自分の名を名乗ってくれた。

「サコバチさん、ですか。」

「……。」

これまた、不思議な雰囲気を感じさせる人だ。

クールな雰囲気の人というのは、秀輝くんをはじめ
それなりに沢山見てきたつもりだが……。

彼女はまた、一味違うって感じがする。

「今日はまた、どうしてこちらに？」

「……私、図書委員だから。」

「そうなんですか。」

……

「ナンパ？」

「えっ？」

「私……図書室でナンパしようとする男って、嫌い。」

<第26話> 【What Dream?】

「どうでした？ 収穫の程は。」

「いや…うん。これといって、気になるものはなかった。」

図書室の中央で落ち合った僕らは、言葉を交わす。

「秀輝くんの方は？」

「こちらも、同じく——です。」

…うむ。

やはり、そう簡単に手掛かりが得られるものでもないか。

僕はとりあえず、秀輝くんを椅子に座るよう促した。

「……。」

しかし、どうなんだろう。

表紙に『悪魔の書』とか書いてあれば、わかりやすくいいんだけど…

そんな単純なものではないのかもしれない。

ごく普通の本に見せかけて、中身が凄いことになってるのかもしれない。

もしくは、ページの最初の文字を順々に繋ぎ合わせていくと悪魔を呼び出す呪文になる——とか。

考え出せば、キリがない。

「榛名さん。」

「ん…どうした？」

「読みたい本を見つけましたので、読書を始めてもいいでしょうか？」

…

「…構わないけど。」

よく見れば、秀輝くんの左腕には一冊の本が抱えられている。

僕の下承を得た秀輝くんは、その本を机の上に置き…開いてしまった。

…

「君って本当、マイペースな人だね。」

向かいの席で本のページを捲る親友に対し、言い放つ。

何を読んでいるのか知らないが、本にはそれなりの厚みがある様子。

「…あなた程じゃありませんよ。」

「そうかな。」

学校からの帰り道。

神田家の庭。

そこで竹馬に乗る、一人の少女を発見した。

「……………」

竹馬なんて、なんだか随分と久しぶりに見た気がする。

僕は自転車を歩道の脇に止めると、神田家の塀へと近付く。

塀の外から頭だけを出し、少女の様子を観察する。

見たところ、その竹馬の乗りっぷりは…。

「っ…ととと。」

「ほっ…はっ。　むっ！…っ…とと。」

はつきり言って、かなり危なっかしい。

いつ振り落とされてもおかしくない——ってな様子に思える。

「んっ？　…この殺気は！」

少女は目を鋭くさせた表情で呟くと、僕の方に顔を向ける。
完全に、目が合ってしまった。

「やはり、ハルちゃんか。」

「……………」

少女——保奈美ちゃんは、竹馬から足を下ろす。

ちなみに僕は、殺気を放っていたつもりは毛頭ない。

「少女の痴態を覗き見とは、感心しませんね。」

「…ごめんなさい。」

『痴態』なんて難しい言葉、よく知っているものだ。

最近の小学生は、侮れない。

というか…その竹馬に乗る練習風景を痴態だと思っているのか。

一生懸命になることは、決してカッコ悪いことではないと思うのだ

が。

「ま、それはともかく。」

彼女の表情が、見慣れたものに变化する。

歴戦の騎士とでも言うべき、闘志に満ちた表情。

「あたしと君が、こうして顔を合わせたからには…わかってるよね？」

「ついに、96連敗…。」

ガックリと床に手を付き、燃え尽きた感を出す保奈美ちゃん。これもまた、彼女の見慣れた姿だ。

「クッ…！今回はけっこう、イイ感じだったのに。」
「……………」

彼女の言う通りだった。

前半だけを見れば、ほとんど互角の勝負といった気が…しないでもない。

正直、僕もちよっと焦ってしまった。

「しかし、マズイな。このままじゃ、そう遠くない未来…屈辱の100連敗ということになりかねない。」

ランプを片付けながら、保奈美ちゃんがブツブツと呟いている。

「100連敗…。イヤだ…それだけは避けたい。」

唇をギュツと噛み締め、悔しさを前面に出した表情。

しかし、その目には――闘志の炎がメラメラと燃えている。

「こうなれば、秘密の山ごもり特訓を始めるしかないか……。」

「……。」

どんな特訓をするつもりなんだろう。

というか……山に籠ることで、神経衰弱が上手くなるものなのだろうか。

ニャー

「……。」

いつの間に、傍まで近寄って来たのだろう。

声がした方を振り返れば、そこには三毛猫の姿があった。

「こんにちは。……元気？」

手を軽く上げ、とりあえずの挨拶。

ニャー

「……。」

僕の目をジツと見つめ、鳴き声を発すニャンニャン。

……なんだろう。

何か言いたげな瞳をしているようにも思えるんだが。

「そっぴゃ、ハルちゃん。最近なんだか

ニャンニャンの様子が変なんだよね。」

保奈美ちゃんが、三毛猫を見ながら口を開く。

「変…というと？」

「最近よく、ニャンニャンが夢に出てきてさ。
なんかわけわかんないこと、ペラペラ喋ってくるの。」

……

「どんなこと話したかは、よく憶えてないんだけどさ。
とにかくもう…ちょっとウザい喋り方してくるんだ。」

「…へえ。」

話の内容は憶えてないというのに、喋り方がウザいということは
しっかり憶えているのか。

それはつまり、よほどウザかったと予測される。

「——しかし、保奈美ちゃん。」

「うん？」

「それは、ニャンニャンが変というより…保奈美ちゃんの様子が
おかしいんじゃないかと思う。」

……

「言われてみると、そんな気もしてきた。」

しばらく視線を彷徨わせた後、彼女が再び口を開く。

「そっか。 おかしいのは、あたしの方だった…というわけね。」

「まあでも…夢なんてのは、大概が変なものだから。」

落ち込んでしまった様子の保奈美ちゃんに、そんな言葉をかける。

「僕も最近、変な夢をよく見てるしね。」

ニャーゴ

ニヤンニヤンがいきなり、僕の膝の上へと飛び乗ってきた。
仕方がないので、頭を撫でてやることにする。

「ふん…どんな夢？」

「…内緒。」

< 第27話 > 【運命の場所】

やや曇りがちなながらも、晴れといえば晴れ。
そんな微妙なご機嫌の空を見上げ、少し物思う。

「……。」

最近は、いろんなことがある。
いろんな人と出会い——いろんな事に巻き込まれてる。

まあ…思い起こしてみれば。

昔から僕は、波瀾万丈な日々を送ってきた気もする。

僕自身は、決してトラブルメーカーになるつもりはないのだが…
なぜかやたらと、変な事に巻き込まれてきた。

そういう運命さだめなのか…？

まあ、そんなのどっちでもいいや。

色々と物思いに耽りつつ、散歩を進める。

公園の前を通りかかった時、無意識に自分の足が止まった。

「…龍頭公園。」

——そうだ。

考えてみれば、この公園を訪れてからだ。
それから、なんか…妙な出来事が起こりまくってる。

「……。」

この場所に、何かヒントが隠されている。
なぜだか、そんな気がしてならない。

「登りきった。」

ジャングルジムの頂上まで登りきった。
龍頭公園名物、やたらに大きいと噂のジャングルジム。

…なぜ登ったんだろう？

きつと、そこにジャングルジムがあるからだね。

「……。」

頂上から見下ろす風景。

その中に、気になるものを発見してしまった。

ベンチに座る、一人のお婆さんの姿。

その姿には、見覚えがあった。

「よつ…と。」

頂上から一気に飛び降り、僕は地面に着地する。
その落下音に反応してか、お婆さんがこちらに首を向けた。

「あんだあ…。」

「おはようございます。」

正面から顔を見合わせ、僕から挨拶をする。

「あい…おはよう。朝から元気だねえ。」

しゃがれた声ながらも、重みを感じさせる口調。
彼女と比べれば、僕などやはり、まだまだ若輩者ということか。

「あんた…見た顔だね。…少し前。」

「はい。僕も、憶えがあります。」

僕はこういったお婆さんを前にすると、独特な緊張感が体に生じる。
お爺さんの前じゃ、別にないものなだけど…。
何だろう。やはり、異性だからなのか。

…

「桜姫…。」

「えっ？」

「桜姫の話…知つとるかい？」

たつぷりの間をとった後、お婆さんがそんなことを尋ねてきた。

サクラヒメ…サクラヒメ…。

サク…ヒラメ。

「知りません。」

一瞬、何処かで聞いたことあるような気もしたけど。
それは多分、デジャヴってやつだろう。

「昔々の話…。ある武家の元で生まれたお姫様がいました。」
「……………」

こんな場所で——突然に昔話？
しかも朝だし。　　僕らはほぼ、面識無いのに。

「お姫様の名は、愁桜天憑姫^{つれいさくらあまつひめ}……。　　俗に桜姫と呼ばれとった。」
僕の戸惑いもよそに、老婆は話を進める。

「ある日、姫は恋に落ちる……。　　相手は、数々の戦果を上げた武人
じゃ。」

「……………」

お姫様と、武人の恋……。か。

まあ、昔話にありがちという感じもするけれど。

「武人の名は、笹原雪宗^{ささはらのゆきむね}……。　　戦場での戦いぶりから、
その男には『雪鬼』という異名があつたそうじゃ。」

——これはまた。

思わぬところで、『そのキーワード』が出てきたものだ。
胸中に、突風が吹いたような感覚。

「えっ……？」

「……………」

歴史の授業が終わった直後。

僕は席から立ち上がり、先生の元へと向かった。
そして――ある質問をぶつけてみた。

「どこかで聞いたことあるような…。」

「本当ですか!？」

期待の持てる反応を見て、僕は思わず大きな声を出してしまった。
クラスの皆の視線が集まるのを感じる。

とりあえず、先生と共に教室を出た。

先生は何かを思い出すような仕草を見せながら、廊下を歩いていく。

「それにしても、どうしてそんな話を…? 突然。」

「……。」

先生の言葉に、すぐに返事は出来なかった。

少し――頭の中が乱れてるみたい。

「杉山?」

「あつ…はい。」

「時間があれば、調べておくからさ。ま、そう気落とすな。」

ボンと僕の肩を叩き、穏やかな笑みを見せる先生。

その笑みを残すと、先生はちよつと早足に廊下の奥へと去っていく。

……

「わっ!」

先生の姿を見送る僕の体に、衝撃が走る。

何かがぶつかってきた様子だ。

「う…ごめん。」

振り向けば、中性的な顔立ちの男子生徒の姿。
僕の顔に目をやった後、彼はペコツと頭を下げる。

「いや、うん。僕の方こそ、こんな所に立ってたんだから。
僕が今いる場所は、教室を出てすぐのところ。」

しかも、教室からは死角となってる場所なので…これでは
ぶつかられても、文句は言えない気がする。

「君は確か、え…っと。工藤昂くん——だっけ。」
「う…うん。そうだよ。」

こうして、間近で見ると。

本当に、顔だけ見れば女の子…って雰囲気の人だ。
声や仕草も、どちらかと言えば女性っぽい感じだし。

「僕の名前は、わかる？」

「うん。杉山…榛名くんだね。」

「正解。」

<第28話> 【SIGNAL】

昼食も食べ終え、教室で静かに五時間目の授業が始まるのを待っている。

突然、輪島健介^{わじまけんすけ}なる人物が僕に話しかけてきた。

彼は三年生で、バスケ部に所属。

そして…どうやら、さっき僕らが体育の授業でやっていたバスケットの試合模様を見ていたらしい。

「そーゆうわけだからさ。 お前、バスケ部に入れよ。」

「…どーゆうわけか、わかりません。」

さっきの試合を振り返る。

前半はルールを把握しきれずに、いまいちな動きしか出来なかった。しかし、後半はわりと活躍出来たんじゃないかなって思う。

「お前、絶対素質あるって。 ラストのあのダンクシュートとか、マジ凄かったじゃん。」

「…どうも。」

そう…。

ラスト一分を切り、僅差で僕らのチームは負けていた。そして、ボールが僕の手に渡ると——無我夢中なまま、

あのシュートを決めていた自分がいた。

「それにさあ、うん…なんつうか。」

輪島先輩は少し首を傾げながら、マジマジと僕の顔を見る。

「なんつうか、お前とは気が合いそうな気がするんだよな。」

……

「ああ、そうそう！ お前、確か…この前、俺の夢に出てきただろ！？」

返答に困る僕をよそに、先輩が再び口を開く。

「そうだそうだ。 あいつも確か、ハルナって名前だったよな。」

なんだか、勝手に盛り上がってるみたいだけど。

ここは、どう話に割り込んでいけばいいものか…。

「そういう話は、女の子を口説く時にでも使ってください。」

「いつ？ いや…違うんだって。」

僕の態度を見てか、先輩が真剣な顔つきになる。

「マジにお前とは、夢の中で会ってる気がするんだ。」

それも、一回や二回じゃなく…何度もさ。」

「……。」

彼の口振りからすると、どうやら真剣に言っているらしい。

そう思った刹那——頭の中で、何かがバチッと光るような感覚があった。

一瞬、脳裏に過ぎった光景。

それは、あの真っ白な…

「……。」

耳に鳴り響く音がする。

どこか遠くから聞こえてくる音。

この音は…少し前にも聞いた覚えがある。

そうだ——あの日。

緑の鍵を拾った、あの夜に。

——Side 片桐まりや——

「ど…どうしたの？ 由奈。」

「……。」

二人揃って、何とはなしにテレビを観ていた時だった。
突然、由奈が頭を両手で抱えてうずくまった。

「大丈夫？ 頭…痛いのか？」

話しかけながらリモコンを手に取り、テレビを消す。

「由奈「ああ…うん。大丈夫。」

由奈は頭を抱えていた両手を離すと、ゆっくり顔を上げた。
目がなんだかぼんやりしていて、息を荒くしている。

「急に頭の中で、何かがバチッて弾けた。」

「…えっ？」

「なんだか、これ…前にもあったような。」

由奈が何を言っているのか、よくわからない。

でも、頭の中でバチツ——て。

それちよつと、何か大変なことが起きたんじゃない…？

……

「あつ…そうだ。」

ハッとしたように目を見開き、由奈が喋る。

「これ、あの時の…。」

様子が変だわ。

まるで、私のことなんか気付いていないみたい。

「…おばさん？」

由奈の呼ぶ声がして、私は抱きしめていた両腕を離す。
顔を見合わせると、由奈はパチパチと瞬きをした。

「由奈…どうしたっていうの？」

「……。」

私が声をかけると、由奈が段々と険しい表情になる。

そして、弾かれるように、バツとその場に立ちあがった。

「おばさん。ちよつとあたし、出掛けてくるね。」

「えっ…ええっ？」

急に、何を言い出すのかしら。

「出掛けるって…何処に？」

「ハル兄んとこ！ 行つてきまゝす！」

「あつ、ちょ…！？」

居ても立つてもいられない——といった様子で、

由奈は部屋を飛び出していつてしまう。

廊下を駆けていく音。

そして玄関のドアを開く音が、瞬く間に耳に入ってきた。

「……。」

慌てて立ち上がり、窓の側に近寄る。

そこから外を見れば、道路を走つていく由奈の姿があった。

——Side 杉山由奈——

——急がなきゃ。

急がなきゃ。

急がなきゃ…。

家を飛び出してから、どれぐらい経つただろう。

周りの景色を見る限り、目的地はまだ遠いみたいなんだけど。
あたしはすっかり、息絶え絶えの状態だった。

……

当たり前だ。

全力も全力——超全力疾走で走ってんだから。

なんかもう、頭に酸素がいつてない……って感じもする。
でも、足が動く。
体が動く。

……

ヤバイ。

さすがに、ちよつと苦しい。
っていうか……考えてみりゃ、自転車に乗ってくればよかった。

「……オツ？」

ある物が目にとまり、あたしは体を止めた。
全速力で走ってたから、もちろん急には止まらない。

バンッ

「いつ……たあ。」

モロに壁にぶち当たった。
自分でやったこととはいえ、中々に痛い。

……

「よし、行こう。」

店の前にあった自転車に跨り、あたしはハンドルを握る。
言わずもがな——あたしの自転車ではない。
でも、気にしない。 気にしてられない。

< 第29話 > 【前兆】

目的地までもうすぐという所。
角を曲がろうとした瞬間、それは起こった。

「わぁあっ！」
地面が揺れる。

危ない——と思った時は、もう遅かった。

派手に自転車が倒れ、あたしもそれに伴って転げ落とされた。
体はゴロゴロと二回転した後、ガードレールに打ちつけられる。

……

「ッ……。こ、これ…地震？」

ガードレールに手をかけ、体を起こしながら呟く。
地面も体も、グラグラと小刻みに震えている。

突然見舞われた災難に、頭が少しフリーズしてる。
ま、とりあえずそんな酷い揺れ方でもないと思う。
震度的には…3とか4とか——そこら辺？

……

間も無くして、揺れが止んだ。

ホッとしたと同時に、体のあちこちが痛みだす。

「うわっ。 血…出てるし。」

右の膝に、結構大きな擦り傷が出来ている。

久しぶりの出血に、なんだか動揺。

「大丈夫かな？ お嬢ちゃん。」

低い声で、誰かがあたしに話しかけてきた。

「はい、大丈夫で——…ッ！」

返事をしつつ、その人物の足元から顔へと視線を上げていく。

そして、顔を見た瞬間…思わず言葉が途切れた。

げっそりと痩せ細った頬。

爬虫類を連想させるような、ギョロリとした目。

その目を見つめた途端、背筋にゾクゾクと冷たいものが走った。

「これぐらいで驚いてちゃ、ダメだよ。」

笑ってるのか何なのか、よくわからない表情。

多分、男…だとは思っけど。

「まだ、破壊が始まったばかり。」

「……。」

「否定の風は、いつ吹くのかな？」

——メチャクチャだ。

言ってることもそうだし、顔とか…もうなんか、色々と。

とにかく、メチャクチャ。

——Side 杉山榛名——

「結局、何しに来たんだろ？」

そう呟きながら思い起こすのは、他でもない…僕の妹の姿。

その報せが届いたのは、六限目の授業の途中だった。

教室を出てみれば、ゼエゼエと息を切らし

壁に背を預けている彼女を発見。

まさか、さっきの地震で僕がどうにかなったとでも思ったのだろうか？

いや——時間差的に考えて、それは不自然だ。

あらかじめ、地震が起こることを予期でもしてないと…。

「……。」

『どうして来たの』と問い詰めてみたが、はっきりしない答え。
そして、はっきりしないまま、彼女は帰宅していった。

「杉山榛名くん。」

「はい。」

部長さんの呼ぶ声がして、思考を中断させる。

ま…家に帰ってから、ゆつくり問い質してみることにしよう。

「今日の夜中。午後１０時に、学校へ来てもらえませんか？」

「…えっ？」

「例の図書室の本についてですが、興味深い情報を得られました。」

部長さんは、やや使い古した感のある一冊のノートを開く。

ペラペラと捲り出した手が止まると、彼女は視線を僕に戻す。

「その本は、夜中になると奇妙な音を発する———というんです。その本…というと。」

例の、悪魔を呼び出すとかいう本のことかな。

「特に午後１０時から１１時辺りに、その現象が起こりやすいようです。」

本が…音を発する？

よくわからないが、限りなくミステリアスな雰囲気だ。

「そういうわけです。…来てくれますか？」

「……。」

実に好奇心をくすぐられる話だけど。

いきなり、夜中の学校に来说われると…。

「心配いりませんよ。顧問の先生に話を付けておきましたから。

決して、やましいことはありません。」

「顧問の先生…？」

「地理・歴史担当の岸耕太先生です。」

聞き覚えのある名前だ。

というか…僕のクラスも受け持つる先生。

今日ちよつと、変な質問を投げかけてしまった先生でもある。

「わかりました。行きますよ。」

岸先生が、このクラブの顧問だったとは。

意外というか、なんというか。

「ありがとう。では、詳しい予定ですが…。」

「——あの、ちよつといいですか？」

僕は右手を挙げて、話の腰を折る。

「はい…どうされました？」

「いえ、関係の無い話で申し訳ないんですけど…。」

『夜中』という単語に触発され、頭を過ぎった映像。

その映像の中にある疑問。

「この前、デパートの屋上で…部長さんと初めて会った時なんです
が。」

「はい。」

「あの時——部長さんの片方の目が、緑色になってた気がするんです。
す。」

……

僕の言葉を受けた部長さんは、さして驚いた様子もない。

少々の間を置いた後…彼女はおもむろに眼鏡を外す。

「オッドアイという言葉をお存じですか？」

「……。」

「虹彩の色が、左右の目で違う形質のことを指す言葉です。

人間には、極めて稀に見られる形質なのですが…。」

話しながら部長さんは、右目を人差し指で軽く触れるような仕草をする。

こういうのって——そうだ。

コンタクトレンズを外す時にやる仕草。

「……。」

レンズを外した、部長さんの右目。

その瞳の色は、鮮やかな緑色となっていた。

こうして改めて見てみれば……緑というより、黄緑に近い色かな。

「珍しがられるのは、あまり好きじゃありませんからね。

普段はカラーコンタクトをして、隠しているんですよ。」

「……なるほど。」

<第30話> 【風に吹かれて】

「…ふう。」

お風呂上がり。

しかし、パジャマは着ていない。

網戸を通して体を撫でる、風の感触が気持ちいい。

歩を進めながら、ダイニングにある時計に目をやる。

… 9時7分。

「っしょ…と。」

居間の座布団に座っていたまりやさんが、腰を上げる。

テクテクと、こちらに向かって歩いてくる。

普段なら、彼女はもうお風呂を済ませている時間帯だった。

でも今日は…僕の私情により、ちよつと遅ればせながらの入浴タイム。

「何しに行くかは知らないけど、気を付けてね。」

「はい。」

一言だけ言葉を交わすと、まりやさんは僕を通り過ぎてお風呂場へと去っていった。

『大事な用がある』という、かなりアバウトな説明。
それでもまりやさんは、僕が夜の学校へ向かうことを
あっさりと承諾してくれた。

「……。」

信用されているというか…放任主義というか。
やっぱり、器が広いのかな。この人。

まりやさんの抜けた居間では、姉さんと由奈の二人が
なんととはなしにテレビを眺めている様子。
僕は黙って、ソファーに座り込んだ。

「ねえねえ…ハル。」

それとほぼ同時に、ソファーにいた姉さんが話しかけてくる。
「ホントに、何しに行くつもり？　姉さんにだけ、コソツと教えて
よ。」

由奈に気付かれないためか、耳打ちをするように尋ねてくる。

「悪いけど、そこは企業秘密。」

「う…う。気になる気になる。」

僕の返答を聞き、子供のように地団駄を踏む姉さん。

まあ…気になるのはわかるんだけど。

「あつ、もしかしてさ…由奈ちゃんが今日、いきなりハルんここに
押しかけて来たことと関係ある？」

言いながら姉さんは、由奈の背中に目をやる。

「ない。由奈の行動は、僕にも謎。」

「…ありやま。」

そう。

由奈のあの行動の真意は、結局まだ不確かなまま。
何度尋ねても、答えをはぐらかされている現状なのだ。

「兄妹揃って、謎の多いことで。」

「……。」

そろそろ、時間だ。

僕はソファから立ち上がり、ドアへと歩いていく。

秀輝くと落ち合い、共に夜の街を駆け抜けていく。

風は……やや強い風に感じる。

最近は向かい風の割合が高かったので、ちょっぴり嬉しい。

「ごめんね。こんな夜中にまで、付き合わせちゃって。」

隣に並走する秀輝くに話しかける。

彼はチラッとこちらに目をやるだけで、特に返事はしない。

今のアイコンタクトは、『別に構いませんよ』という意味だろう。

僕と秀輝くんの仲だ。それぐらいは、わかる。

わかる……と思う。

「んっ……?」

気になる風景を見つけて、僕は自転車のスピードを緩める。

そこには、材木が無造作に散らばっていた。
少し前にここを通りかかった時は、それなりにキチンと
並び分けされた材木たちの姿を見かけたというのに。

「……。」

やはり、大した規模でなかったとはいえ…地震は侮れない。
自然が放つエネルギーって、凄いもんだ。

災害は、忘れた頃にやってくるものだし…。
うん——とにかく、気を引き締めて行こう。

高校に辿り着くまでに越えねばならぬ、最後の交差点。

そこの赤信号に引っ掛かり、立ち往生している時のことだった。

何か…奇妙な物音が耳に入ってくる。

ガランガランというか、ガタンガタンというか…。

音のすると思われる方向へ、僕は視線を移動させてみる。

「……。」

遠目に見えるのは、人影。

そして、その人物の後ろに…何か大きな物体も確認出来る。

いくばくかの時間が経過した後、人影は僕らのすぐ傍までやって来
ていた。

街灯に照らされ、その全容が明らかとなっている。

「……。」

二十代…あるいは三十代ぐらいだろうか。
少しぼつちやり気味な体型をした、女性の姿があった。

女性はどうか、リヤカーを引いて歩みを進めているらしい。
積みまれている物は、家具とか電化製品とか…自転車などが見受けられる。

一見したところ、どれも『ガラクタ』といった雰囲気を感じるのだが。

「こんばんわ。」

「あつ…どうも。こんばんわです。」

声をかけてみれば、女性はほんわかした笑みを浮かべて返事をする。

「失礼ですけど…何をしていますんですか？」

リヤカーの積荷に目をやりながら、女性に質問する。

「タハハ…。この荷物を、博士の家まで届ける途中なんです。」

「博士…？ ですか。」

なんとこの近くに、博士と呼ばれる人間が住んでいるらしい。

そんな話は、初耳だ。

「こんなガラクタ達でも、博士の手にかかれば…タハハ。

面白いモノに生まれ変わる可能性があるんですよ。」

女性は、やや息が上がった様子で話を続ける。

よく見れば、かなり汗も掻いているし…疲労感が隠しきれていない。

…

「それじゃあ私、急ぎますんで。」

「…そうですか。」

僕らに軽く一礼をすると、女性はリヤカーを引いて歩き出す。その足どりは…はつきり言って、重そうだ。

「――秀輝くん。今の時刻は？」

「9時25分です。」

信号が青に変わった。

でも、すぐに道路を横断するつもりはない。

「手伝いますよ。」

「えっ…？」

自転車から降りると、僕はリヤカーの後ろに立つ。振り向いて僕の姿を見た彼女は、ややビックリした顔をしている。

「いや、そんな…いいんですか？」

「はい。僕、力仕事は得意なので。」

会話をしている途中、秀輝くんがスツと僕の隣にやって来た。

「…すみませんね、お二人共。それじゃ、甘えさせてもらいます。」

彼女は正面へと向き直り、リヤカーを引き始める。

それと同時に、僕らは後方支援を始めた。

< 第31話 > 【恐怖談義】

裏の門から学校へと潜入し、適当なスペースに自転車を止める。
寄り道をしてしまったため、あまり時間に余裕が無い。
僕は駆け足で、指定された場所へと移動を始める。

……

脇に見える、広い裏庭。
昼間は緑鮮やかで爽やかな雰囲気なのだが、この暗闇の中では……
不気味というか、神秘的に映る。

「榛名さん、こっちです。」

「えっ？ ……うん。」

秀輝くんに誘導され、建物と建物の間を突き進む。

闇と建物の陰が合わさり、相当に真っ暗けな地帯。

懐中電灯が無ければ、進むのはかなり困難なことに思える。

……

「こんな所にあるのか……。」

目的の場所——第三棟の通用口の前に辿り着き、僕は呟く。
道のりが道のりだっただけに、秘密の隠し通路を発見したような気

分だ。

「……。」

扉の取っ手を握り、ゆっくりと前へ力を込めてみる。

金属製の扉は、『ギギイ…』と音を立てて開いてくれた。

「よし、行こう。」

「はい。」

廊下の突き当たり。

暗闇にすっぽり覆われた中、ドアの窓から明かりの漏れている部屋がある。

それは勿論…我らがミステリーハント部の部室。

「こんばんわー。」

部室のドアを開け、一声かけつつ中へと足を踏み入れる。

「ああ、いらつしゃい。」

椅子に座っていた中年の男性——岸先生は、立ち上がってこちらを振り向く。

一応、顔見知りの仲とはいえ…この時間・この場所にて先生と顔を合わせるというのも、なんだか妙な気分だ。

「杉山さんと、ええと…黒沢くん？　だったかな。」

「はい。」

そつえば、例の話はどうなったのだろう？

いや、まあ…まだ話して半日も経ってないんだ。
結論を急ぐのは、焦り過ぎか。

「じゃあ早速、図書室に行こうか？」

「…そうしましょう。」

岸先生を先頭にし、僕らは夜の校舎内を進んでいく。
昼間とは全く違う顔を見せている学び舎は、なんというか…
凄く冒険心をくすぐられる雰囲気がある。

「夜の学校って、怖くないかい？」

「…えっ？」

しばらくの沈黙を打ち破ったのは、岸先生だった。
チラッと後ろを振り返り、どちらとは言わず尋ねた様子だ。

「まあ、昼間よりは怖い気もしますけど…。僕はあまり、
暗いからって怖いというイメージは無いんですよね。」
少し考えた後、僕は先生の質問に答える。

むしろ僕は、明るい場所より暗い場所の方が落ち着く。

幼い頃、心穏やかでいられない状態の時は…よく布団やコタツの中に
身を隠していたものだ。

「そうなんだ。変わってるね、君。」

「…よく言われます。」

「僕はやっぱり、怖いよ。ジェットコースターは平気なんだけど
ね。」

こういう雰囲気は、やっぱり怖い。」

「…そうですか。」

そりゃジェットコースターとは、また違った怖さだと思う。

僕は反対に、ジェットコースターの方が怖い。

だって…身長制限があるから。

何度か行ったことのある、とある遊園地のモノは身長200cmを超えると、アウトになってしまう。

今はギリギリ大丈夫だが——将来に不安が募る。

「おい、ちょっと。そこ…今…何か横切らなかつたかい？」

将来に不安を募らせる中、耳に入ってきた先生の声に顔を上げる。先生は眉をひそめながら、廊下の奥に向けて指を差していた。

「ん…何か見た？ 秀輝くん。」

僕はさっきボートとしていたので、ここは彼に尋ねてみる。

「ええ。何か、白いものが…見えた気がします。」

「白いもの？」

どうやら、秀輝くんも何かを目撃していたらしい。

「なんだか、気味が悪いなあ。」

「……。」

先生と共に、廊下の奥に目をやる。

しかし、そこには…ただ暗闇が広がるだけ。

「まあ、いいじゃないですか。図書室行くのなら、別にあっちに行く必要無いんですから。」

僕は、すぐ側に見える階段に目をやりながら言う。

ここを上って、しばし歩いていけば…目的地だ。

「そりゃあそうだけど…。でも、気味悪いなあ。黒沢くんだって、何か見たんだろ？」

先生の問いかけに、秀輝くんは小さく頷く。

……

「お、おい…杉山くん？」

先生を抜き去り、僕は廊下の奥へと歩き出す。

まあ、秀輝くんまで何か見たって言うんだしね…。調べておいて、損は無いだろう。

「榛名さん。」

「…うん？」

「くれぐれも、気を付けて下さい。」

「…わかった。」

秀輝くんの口調と表情は、いつにも増して真剣なものだ。それに触発され、僕も心が引き締まる。

<第32話> 【Open Combat】

「——うん？」

異変を感じた僕は、そこで足を止めた。
床に、何かがある。

懐中電灯の光を反射し、キラキラ光るそれは…。
どうやら、ガラスの破片らしい。

「えっ？ うわッ、窓…割れてる!？」

破片が散らばる床の上方にある、一つの窓。
その悲惨な様相を見て、岸先生がビクリした声を上げる。

「これ、ガムテープ？ …何で貼ってあるんだろ。」

「ガラスが割れる音を抑えるためですよ。」

僕が呟いた疑問に、すぐさま秀輝くんが応答する。

……

「おい。 ちょっと、これ…。」

先生がその場にしゃがみ込み、床に懐中電灯の光を当てている。
どうやら、何か気になることがあるらしい。

「……。」

「足跡…だよね。」

僕も同様にしゃがみ込み、先生の視線の先を追う。
そこには確かに――僅かながら、足跡のようなものが確認出来た。

足跡を追い、僕は階段を上る。

足跡は、三階へと上る階段には続いておらず……二階の廊下が続いている。

「泥棒かな……？」

「さあ……どうでしょう。」

「何も、こんな時間に入らなくてもいいのに。」

「……こんな時間だからこそ、入ってきたと思いますが。」

先生とそんな会話をしながら、歩みを進めていく。

ちなみに、先陣を切って歩いているのは先生だ。

明らかに怯えた様子を隠せていないものの……そこはやはり、貫録か。

「あれっ？」

「……。」

廊下を突き進むこと、しばらく。

僕らの眼前に、次なる異変が飛び込んできた。

プレートに『図書室』の文字が書かれている部屋。
そのドアの一つ――完全にかけている。

……

しばし沈黙の空気が流れた後、先生は再び歩を進め始める。
僕らも、その後を追う。

「足跡は…ここで途切れているようですね。」

開かれたドアのすぐ手前の廊下に懐中電灯を当てながら、僕は言う。
そして、すぐに顔を上げ、開かれたドアの奥に目をやった。

……

そこには、暗闇が広がるばかり。

と思った瞬間――傍にいた先生の懐中電灯が、その内部を照らし出した。

「ッ…！」

先生が、声にならないような声を上げた。
そこにあつた光景を見て。

図書室の大きな机の上に、男が座っていた。

浅黒い肌をした…容姿からすると、二十代前後だろうか。
それなりに、良い体格をした男性だ。

「君…何をしてるんだい？」

弱々しい語気ながらも、男に向けて先生が言葉を放つ。

それを聞いた男は、俯き加減だった顔をスッと上げて、僕らを見据えた。

「何って…決まってるだろ？」

不敵な笑みを浮かべ、男が喋り出す。

「図書室に来る目的なんて、ただ一つ。本を頂きに来たんだよ。」

「……。」
『借りに来る』ではなく、『頂きに来た』…ときたか。
この台詞だけをみても、男が異様な存在であることは、ほぼ確定的だ。

「くれぐれも、邪魔はしないでくれるかな？　もしも、しよつてんなら—

言葉を紡ぎながら、男は机から腰を上げる。

そして、僕らに一瞬鋭い目つきを見せると…。

バギインツ

片足を軸にし、一回転。

その遠心力を乗せ—踵で蹴り上げるような攻撃を行った。

ガガンツ

攻撃を喰らい、見るも無残な姿となった机。

地面に落下した衝撃で、更に酷い傷を負った様子だ。

「先生…下がっててください。」

胴体部分がほぼ真つ二つになってしまった机を見て、
啞然としている先生を後ろに下げる。

そして僕は、男に向かってゆっくりと歩き出した。

「…へえ。」

そんな僕を見て、男はまた不敵な笑みを浮かべる。

刹那—彼はこちらに向けて突進してきた。

ブウンッ

走りながら、猛烈な勢いで放たれたパンチは僕の顔面の数cm先を通過していった。あと0・1秒でも反応が遅れていたら…パンチは僕の顔面にジャストミートしていたことだろう。

「……………」

バックステップで、男との距離を取る。

彼は笑みを浮かべたままで、追撃してくる様子はない。

……

「夜の学校に不法侵入している男。」

5m程の距離を取ったところで、男が口を開く。

「その男を目撃してしまい、そして今——君はその男に危害を加えられようとしている。」

図書室の出入り口に目をやる。

二人の姿は見えない。

「こんなのどかな町じゃあ、立派な大事件だ。」

「……………」

「ハハッ…。肝の据わったヤツは、嫌いじゃないぜ。」

図書室の中、存在する光は…さつき落としてしまった懐中電灯の明かりのみ。

あの明かりをうまく活用し、場を制したいものだ。とりあえず——先生のことは任せた。

……

心の中で秀輝くんをお願いをした後、僕は素早く本棚の陰へと移動する。

本棚の大きさは、僕の身長でも悠に身を隠せるサイズ…。

陰から陰へ——明かりから離れるように、僕は次々に移動をしていく。

「……。」

完全に逃げの行為だが、仕方ない。

相手の実力に底知れないものがある以上「見いっつけた。」

「…ッ！」

「ハハッ。大きな体の割に、俊敏じゃないか。」

暗闇に浮かぶシルエットを見て、僕は息を呑む。

足音——全く聞こえなかった筈なのに？

オープンコンバット
「戦闘開始。」

そう言い放つと、男はファイティングポーズをとった。

< 第33話 > 【猛り】

男と同じように、僕もファイティングポーズをとろうと思ったが――途中でその考えを改めた。

格闘技なんて、全く経験のない僕だ。

とりあえず……やりやすいようにやろう。

ビュンッ

大きなテイクバックから、一気に斜め下へと振り下ろすパンチ。軌道を読むのは難しくなかったため、体をずらして避ける。

バツ

次に放たれたのは――ハイキック。

顔面というよりも、顎を狙ったかと思われるその攻撃を上半身を後ろに反らしてかわす。

……

「……ふん。」

暗闇ではつきりと判断出来ないが、男はまたもやあの不敵な笑みを浮かべている気がする。

「反撃出来なかった——というより、しなかったって感じたね。」
「……。」

「よくわかってんじゃない。　ハハッ…誘ってたの、バレてた？」

反撃のチャンス。

それは、確かにあった。

放たれた二つの攻撃は、どちらも大振りで…

それを外した後に生じていた隙は、決して少なくなかった。

「相手を無防備な状態に近付けるには、自らが無防備な状態を見せることが、何より効果的だ。」

ギラついた目つきをしながら、男は解説する。

「もつとも…さっきの俺には、無防備だった瞬間なんて一寸足りと無かったけどね。」

「……。」

相手の攻撃を誘い、カウンターを狙ってた…ってことがその狙いに、僕は気付いていた？　のだろうか。

「今度は、小細工無し。　——当てる気でいくよ。」

男の表情が、より凶悪そうな笑みへと変貌。

そして…これから短距離走でも始めるかのような、前後に大きくスタンスをとる構えを見せる。

「……。」

どうしよう。

この人…多分、ホンモノだ。

『ダンッ』と床を踏む音が聞こえたかと思うと、既に拳は目前へと迫ってきていた。

反射的に右腕が動き、その攻撃を払い除ける。

「——ッ！」

左のふくらはぎに鋭い衝撃を受けたのは、直後だった。
凄……ローキック。

バシユッ

意識が左足へと向かった刹那、今度は脇腹に衝撃が走った。
強烈なミドルキックに、呼吸が一瞬止まる。

ガチィッ

次なる衝撃は——顎。

アップパーカットを喰らい、歯と歯のぶつかり合う音が頭に鳴り響いた。

……

意識がぼやける中、男がクルリと自分の体を旋回させる姿を視認する。

ダメだ——速い。

防御が間に合わない　グドッ

——Side　???——

ダァンッ

衝撃によって吹き飛ばされ、本棚へと背中を打ちつける榛名。
ズルリと足が床を滑り、そのまま尻餅を付く。

「……………」

ガクガクと体を小刻みに震わせる榛名に、男はゆっくりと歩み寄る。
榛名を見つめるその目には、哀れみにも似た感情を漂わせていた。

……

「おッ……？」

榛名は両手をバネにして、勢いよくその場に起き上がる。
その光景を見て、男はやや驚いたように口を開いた。

「あのバックスピンキック喰らって、すぐに起き上がれるとはね。
……見上げたタフネスだ。」

よほど屈強な肉体の持ち主で無い限り、さっきの攻撃を喰らえば
失神——もしくは、しばらく腹を抱えてうずくまるしかない。
まだ余裕の表情を残すものの、男の目に僅かな警戒の色が浮かぶ。

……

（あの目……なんだ？）

二人の眼光が、闇の中ぶつかり合う。

（怯え？ 怒り？ いや……。）

（――来るッ。）

緊迫した空気を動かしたのは、榛名だった。

右腕を振りかぶり、そして…男に向かってパンチを繰り出す。

ガゴオンッ

「ッ…！」

その一撃をかわすことが出来た男だったが、冷や汗を掻き困惑の表情を浮かべている。

彼の視線の先には、壁にめり込んでいる榛名の拳があった。

弾かれるように、男は榛名に向かって駆け出す。

男がパンチを放ったのと、榛名が壁から拳を抜いたのはほとんど同時だった。

…

――およそ三十発。

これは、榛名が男に受けた連続攻撃の回数。

足首から顔面に至るまで、その被弾箇所は全身に行き渡る。

それに対し、榛名は反撃をするどころか、ろくに防御も出来なかった様子だ。

（…やり過ぎたか？）

本気で打ち込んでしまった打撃の数々に、男が心の奥で呟く。

（常人ならば、病院送りは確実なダメージ…）

心の眩きは、体の異常によって遮られる。

その異常とは――

榛名の放った膝蹴りが、彼の鳩尾に入り込むというものだった。

バシッ

ダウンッ

「――ッ！」

天井へと叩きつけられ、更に床へと落下。

男は自分を襲ったダメージと衝撃に、すぐには起き上がれなかった。

（この…パワー…。）

力を振り絞り、どうにか両手を支えに体を起こす。

そして、ハッと我に返ったように榛名へと視線をやった。

「……。」

――ただ、そこに立っているだけ。

それが、榛名の姿を見た男の感想だった。

「ピューマ。」

しばらく睨み合いを続けた両者の間に、第三者の声が鳴り響く。
図書室の奥から姿を現したのは、バンダナを巻いた小柄な男だった。

「目的の物は手に入った。退散しよう。」

バンダナの男は静かにそう告げると、側にあつた窓を開ける。

そして、そこから身を乗り出し――飛び降りた。

……

「…悪いね。ファイトは、終わりだ。」

ピューマと呼ばれた男は、小さな笑みを浮かべて言う…

榛名に背中を向け、あっという間に窓の側まで駆け寄る。

そして——バンダナの男の後を追うように、窓から飛び降りた。

「……。」

開いた窓の外。

広がる漆黒の空を見つめる。

彼の胸中では、様々な想いがせめぎ合っていた。

【キャラクター紹介／第2章】

注意：第2章（第17話～第33話）における物語の内容が含まれています。

杉山 榛名

本編の主人公。

桜雪高等学校の一年生。

六年前に両親が行方不明となつて以来、妹の由奈と共に
伯母の片桐まりやの家で暮らしている。

黒沢 秀輝

榛名の幼馴染。

桜雪高等学校の一年生。

常に冷静沈着で、淡々とした口調で喋るのが基本。

麻木乃亜

桜雪高等学校の3年生。

ミステリーハント部の部長であり、榛名を自分の部に勧誘した。
右目が黄緑色をしており、普段はそれを隠すために
カラーコンタクトを付けている。

陣内飛鳥

榛名の幼馴染。

桜雪高等学校の1年生。

怒るとすぐに手が出てしまうタイプらしい。

神田日和

榛名の幼馴染。

桜雪高等学校の1年生。

いつも笑顔を絶やさないことから、榛名に尊敬の念を抱かれています。

神田保奈美

日和の妹。

小学校5年生。

榛名が神田家にやって来た時は、なぜかトランプの神経衰弱で
勝負することが恒例となっている。

杉山由奈

榛名の妹。

桜雪中学校の二年生。

中学一年の時から仲の良い鈴音と共に、バドミントン部に所属している。

岸耕太

桜雪高等学校の教師。

担当教科は地理・歴史で、榛名たちのクラスも受け持っている。

また、ミステリーハント部の顧問でもある。

ピューマ

夜の桜雪高等学校に侵入し、榛名を襲った謎の男。

スピードのある攻撃で終始において榛名を圧倒するも、反撃の膝蹴りを受けて驚愕した様子を見せた。

<第34話> 【一夜明けて…】

——Side 黒沢秀輝——

「それは大変でしたね。」

「…うん。 大変だった。」

朝の登校中。

並走する彼の話に、私は耳を傾けていた。

「あんな風に、本気で誰かと闘ったのなんて…凄く久しぶり。」
虚空を見つめながら、遠い昔の思い出話でもするように、彼が言葉を紡ぐ。

「ちよっと、怖かった。」

「……。」

怖かった——か。

彼らしいといえば、彼らしい感想だ。

「おはようございます。」

すれ違い様、彼は杖を突いたおじいさんに挨拶をする。
私も、軽く会釈をした。

……

「それにしても、昨日のこと……どうなんだろう？」

銀行の前に差し掛かった所で、彼が呟く。

「なんていうか、只事じゃないよね。」

只事ではない。

それは勿論、そうだろう。

あの男の言葉を借りるなら……『大事件』。

「……うん。」

「……。」

彼はいつものように、考え事モードに入った。

この状態になった彼に対しては、私は極力そっとしておく姿勢でいる。

彼には必要なのだ——この時間が。

——Side 杉山榛名——

「誰が呼んだか呼ばれたか。 風と共に現れ——風と共に去りゆく。」

「

「森羅万象の探求者こと…君風胡桃、推参ッ！」
きみかぜくるみ

一限目の授業が終わり、すぐのことだった。
教室を出ていこうとした先生とすれ違うようにして、
逆に教室へ足を踏み入れてきた人物がいた。

「フフッ。 私がどうして、君の前に現れたか…説明は不要だね？」
「……。」

その人物は、今こうして僕の目の前に立っているわけだが。
なんというか…。これはまた、急な展開というか。

「さあさあ、例の事件について知ってること、洗いざらい話しても
らおう！」

——と言いたところだが。」

キミカゼと名乗る謎の人物は、そこで言葉を区切る。

「このギャラリーの中では、話し辛いこともあるだろう。」

そう言いながら、僕らに視線を集中させているクラスの仲間達を見
渡した。

仲間達は一様にして、『ポカン』って感じの顔をしてる。

「昼休みに、また改めて取材に来さしてもらおう。」

フフッ…その時はよろしくな！」

彼女はそう言い残すと、クルリと体を反転させる。

そして、猛ダッシュで教室から出ていってしまった。

……

「なんだあ…あいつ？」

「僕には、わかりません。」

僕と寺路くんが顔を見合わせる。

「っていうか、シンラバンショウって…何？」

彼女の口から出ていた、聞き慣れぬ単語。

僕は助けを求めるように、チラリと隣の席に目をやる。

「宇宙に存在する、あらゆるもの——事物や現象を示した言葉です。」

「…そうなの。」

秀輝くんの解説を頂き、どうにか疑問はクリア出来た。

うん…日本語ってのも難しいもんだ。

「このように式を変形させていき…」
「うんうん。」

……

「これでxが-1の時、yの最大値は4となるわけです。」
「…ふむ。」

授業の終了を告げるチャイムは、さつき鳴った。
しかし、いまいちよくわからない部分があったため
こうして秀輝くんに補習を受けている。

「勉強熱心ね、お二人さん。」

そんな最中、僕らの前に姿を現したのは…
他でもなく、我らが担任の安曇先生だ。

「そういう所は、感心なんだけど…」

先生は、微笑みながらも眉をひそめる表情。

「えっと、何か御用なんですか？」

「心当たりは無い？」

僕がぶつけた疑問に、疑問形で返してきた先生。

……

「無いと言えば、嘘になります。」

ほんの少し思考を巡らした後、そう答える。

答えを聞いた安曇先生は、苦笑いしたまま小さく頷いた。

「二人とも、今日の放課後、時間空けといてくれる？」

「…はい。」

「わかりました。」

恐らくというか、ほぼ確実にあの件だろう。

…うん。

まあ正当防衛だったのは事実なんだから、正直に話せば
そう怒られないはず。…多分。

「杉山榛名だな。」

「えっ？」

先生が僕らの前を去って、数秒後のことだった。
斜め後ろら辺から僕の名前が聞こえたので、慌てて振り返る。

「…あなた「何も言うな。」

振り返った先には、壁に背を預けるようにして立っている
一人の男子生徒の姿があった。
このクラスでは見かけない顔だ。

「奴らが、こうも大胆に行動して来るとは予測していなかった。
君らを巻き込んでしまったこと、御詫びする。」

「……。」

男子生徒には、一目見ただけで感じるほどに
只者じゃないオーラが出ていた。
なんていうか、堅気じゃない…？　みたいな。

「杉山榛名。」

「はい。」

「恐怖に立ち向かうだけが、正しい判断とは限らん。時には
恐怖から目を背け、遠ざかる——…それもまた、良好な選択に成り
得る。」

男子生徒は、淡々とした口調で語る。

それにしても…高校生の割に、渋い声をしている。

「あんたには幸い、頼もしい味方もいるようだがな。」
そう言っただけは、チラッと秀輝くんの方を見る。

「だからといって、こちら側の世界に関わる必要はない。」

……

「『こちら側』…というのは？」

「知る必要はない。」

必要はなくても、知りたがる。

それが、人の好奇心つてものですよ…。

「俺の名は、のきはらせんじろう軒原仙次郎。クラスは3Gだ。」

「……。」

「不穏な気配を感じれば、いつでも声を掛けてくれて構わん。
ではな。」

：

言いたいことは言いきったという感じの男子生徒は
静かに歩みを進め、教室から出ていく。

その背中を眺めながら、僕は自然と溜め息を一つ吐いていた。

< 第35話 > 【B u r n i n g】

「よし…っと。」

鉛筆が止まり、彼女は満足げに小さく頷く。

「インタビューはここまでにする。色々答えてくれて、ありがとうな。」

「どういたしまして。」

彼女は手帳を胸ポケットの中に仕舞うと、椅子から立ち上がる。

「しかし君は、随分と落ち着いて受け答えするんだな。」

まるで、大物政治家にでもインタビューしてる気分だったよ。」

「……。」

その口振りからすると、大物政治家にインタビューした経験あるのだろうか。

「これは将来、大物になるな。フツ…スキャンダル起こした時は、

私に真っ先に報せてくれよ。約束だ。」

そう言っバチツとウインクを決めると、彼女は僕らに背中を向けた。

「そんな約束、嫌です。」

僕の返事など聞く耳無しといった感じに、彼女は軽快な足どりで

教室から出ていってしまった。

……

「変わった人だね。」

「はい。」

なんとも言えない気分になりつつ、秀輝くんと言葉を交わす。

「大物…なれるかな？ 僕。」

「なるうと思えば、なれるんじゃないですか。」

空一面が雲に覆われてしまった。

このままでは、やがて雨が降ったり降らなかったり…といった事態も十分に考えられる。

だから、もう帰ろうか——と思った矢先。

視界の隅に、ぼんやりと光る何かを発見してしまった。

「人魂…？」

口から自然と零れた単語は、これだった。

その何かは、明らかにフワフワと浮遊しているようだし…。

よく見ると、メラメラと燃えさかっているようにも感じたからだ。

……

ユラユラ…フラフラと。

不規則な動きを繰り返す、謎の光。

「……………」

とりあえず僕は、光に近付いてみることにした。
やや薄暗い空間とはいえ、気を抜けばその淡い光は
すぐに見失ってしまいそう。

……

「あつ…。」

光が、近くにある竹藪の中へと入っていった。
僕は急いで、後を追うことにする。

自転車から降り、すぐさま竹藪の中へと突入。
傍から見れば、やや不審者っぽい行動だけど…人気は無いようなの
で、

あまり気にしないこととする。

「……………」

足場は悪いが、見通しはそれ程悪くない。
僕は目を凝らし、注意深く周囲を観察する。

「…んっ?」

前方にある草むらの中で、キラリと光る何かを発見。

僕はすぐさま、その場所まで直行する。

……

草むらをガサガサと掻き分けてみる。
すると、そこにあつたものは…

「……。」

黄金色に光る——小さな鍵。

深く回想するまでもなく…ここ最近に見たモノたちと、
全く同じ形状をしているヤツだった。

「…三回目？」

指で摘んだ鍵をしげしげと見つめながら、思わず呟いた。
僕の記憶が確かであれば、三回目のはずだ。

一個目が緑。二個目が青。

そして、三個目が黄色…？

「はあ…。」

鍵にポケットを仕舞った後、溜め息を一つ。

別に、疲れているわけじゃないけど…出ちゃうもんは、しょうがない。

……

少し体が熱くなってる気がしたので、ジャケットを脱いだ。
ポケットの鍵に注意を払いつつ、それを茂みの上に置く。

「……。」

露出した肌には、そこかしこに痣が確認出来る。
言わずもがな、昨日のあの不審者によって付けられたものだ。

——Side ???——

軽いウォームアップを済ませた後、榛名は目を閉じて深呼吸をする。
そして、静かに構えをとった。

（確かに速い…けど。）

頭に描かれるのは、昨夜の戦闘模様。
ピューマと呼ばれていた謎の男。

その男から受けた攻撃、ダメージ——そして衝撃。

（決して見切れないスピードじゃない。）

榛名の右拳が、何も無い空間に突き出される。
間髪入れず、左の拳を大きく横に振る。

シャドーボクシングをしているような動きだ。

（——なのに、全く反応が追い付かなかった。）

その動きは、徐々に軽やかに…そして激しさを増していく。
拳だけでなく、足を使った動作。 防御の動作——回避の動作。

彼自身も気付かぬ内に、その動きは素人のレベルを超えていく。

（スピードだけじゃない。）

向かい合い、対峙しているイメージだったピューマの幻影はやがて榛名の体と重なり合う。

昨夜の記憶を頼りに、榛名の動きはピューマの『それ』へと変貌していく。

（それ以上に… タイミング。）

（次の攻撃に備えようとした瞬間、もうその攻撃は届いていて――

（…なるほど。）

その長い手足から放たれる、打撃の数々。

虚空を裂くその風切り音は、まるで一陣の突風が吹いているようだった。

（一撃目が当たるまでに、既に二撃目の攻撃モーションに入る。）

踏み込み、勢いをつけた左フックを放つ。

その腕が伸びきろうかという刹那――右足で相手の太腿を狙うような下段の蹴りを放つ。

（一撃目で受ける衝撃。それが例え、有効なダメージにならずとも…

受けた相手の意識が、数瞬とはいえ被撃箇所注がれる。）

……

（その隙を一瞬足りと無駄にすることなく…次の攻撃に繋ぐ。）

左腕が伸びきった直後、今度は右腕が攻撃モーションに入る。
相手を正面から撃ち抜くようなストレートパンチだ。

（同様の手順を三撃、四撃…と連鎖的に。）

足払いを行った右足の動きが止まる。

それと同時に、左足が攻撃モーションに入る。

刹那——ストレートパンチを行った右腕が伸びきった。

……

もはや彼の攻撃の勢いは、止むことはなかった。

四肢をフルに生かしたその連鎖的な攻撃は、何も無い空間を
思っ存分に駆け巡っていく。

（体が…熱い。）

これだけの運動をしていれば、体が熱を帯びるのは当然だろう。
しかし、熱くなっているのは…肉体以上に——精神。

燃えたぎるようなその心が、何よりも熱を生み出している。

<第36話> 【犬と猫が騒ぐ】

——Side 神田日和——

「よっし、終わった。」

両腕をグツと上に伸ばし、充実感に浸る。

どつかで『パキッ』っていう音が聞こえたような気もするけど……
そんなの、私は気にしない。

「はあつ。 やっぱ高校の勉強つて、難しいもんだ。」

筆記用具を筆箱に入れながら、呟く。

この筆箱も、もう随分お世話になってるなあ…。

「先生——いかがでしょうか？」

「コイツは、料理界のベストオブカップルですな！」

私が宿題に手こずっている間に、テレビの向こうの
クッキングタイムも佳境に入っちゃったみたい。

美味しそうに仕上がってる料理は、ついつい目が離せない程の出来
栄え。

「ベストオブカップル…これで何組目だろ？」

カオリ先生の決まり文句に軽いツツコミを入れつつ、教科書やノートを片付けていく。

「邪魔するよー！」

威勢のいい声と共に、いきなりドアが開かれる。

姿を現したのは、なんだか只ならぬ様子をした保奈美だった。

「およ？ どうしたの、みーちゃん。」

「どうもこうもないよ。」

みーちゃんはズカズカとベッドに腰掛ける私の元に歩み寄る。
ど…どうしたってんだろ？

何を言い出すのか、全く予想が付かないんだけど。

「ニャンニャンがね、お姉ちゃんに話があるんだって。」

「…ほえ？」

「さっき急に、ニャンニャンが喋りだしたの。お姉ちゃんに話したいことがあるから、すぐに連れて来いって。」

……

保奈美が口にした言葉を、頭の中で反芻^{はんすう}する。

とにもかくにも、私を見つめる彼女の瞳は真剣そのものだった。

「言っとくけど、これはマジな話。」

「……。」

「——ってなわけで、強制連行！」

みーちゃんに強引に連れていかれ、私はリビングまでやって来た。目につくのは、絨毯の上でポツンと座って私を見つめるニャンニャンの姿。

「ほら…連れて来たよ、お姉ちゃん。」

保奈美のその言葉にピクツと反応し、ニャンニャンは尻尾を揺らす。どうしたものかと悩んでいると、保奈美は私をその場に座らせるよう促してきた。

「……………」

「……………」

私は仕方なく、絨毯の上に正座する。

すると保奈美も、私と並ぶように正座をした。

…「ちゃっかり座布団の上に座ってる。」

……………

ニャンニャンと見つめ合うこと、数分。

未だに彼女の方は、まだニャンともスンとも言ってくれない。

私はちよいちよいと、みーちゃんを肩で小突く。

「……………」

「……………」

無言のまま、なんとも言えない表情をしてる保奈美。そんな妹に向かって、私は言っておげることにした。

「あのさ、みーちゃん。」

「…なに？」

「いいんだよ。女の子には、そういう時期があると思うの。」

みーちゃんにしっかりと言い聞かせてる間に、ニャンニャンが動き出す。

私たちの脇を走り抜け…台所の方へ。

「お姉ちゃん、やめて。」

「いいの。わかってるからね。」

「その哀れむような視線——やめてッ！」

…

「…え〜っと。」

みーちゃんはガバツと立ち上がると、一目散に部屋を出て行ってしまった。

リビングに一人取り残された私は、首を傾げるぐらいしか出来ない。

——Side—— 天野大地——

夕暮れに染まった町の中、俺はゴローを連れて散歩中だった。
犬の散歩っていうと、だいたい朝にやるもんだってイメージだけど…
俺の場合、朝にめっぽう弱いもんだから。

「……。」

前の方から、親子連れがやって来る。

お母さんは女の子と手をつなぎ、もう片方の手で買い物袋を持っていた。

……

俺とゴローに気付くと、お母さんはサッと横に移動し、すごい警戒した様子見せながら、俺らとすれ違った。女の子の方も、ちょっとビクついてたっぽい。

「……こう見えて、可愛いトコもあるんですよ。」
遠ざかる親子の背中に向かって、小さく言ってやった。

うちの犬は、誰がどう見てもゴツいというか、勇ましい風格をしている。

俺だって昔は、親父以上に怖い存在と感じていたほどだ。

ま……女子供にや、ちよつとキツいかなあ。

……

「まあ、そう落ち込むなって！ 男は、見た目じゃないんだからな。」

気分を落としたのか、その場にしゃがみ込んだゴローに俺は頭を撫でながら言っていた。

「……んっ？」

誰かの気配がし、視線を上げてみる。

そこには、俺たちを見下ろす男の人の姿があった。

見たところ、かなりイケてる顔をした人だ。
でも、なんつーかな…。
ちょっとキザっぽいというか、ナルシストっぽい雰囲気もある。

ワンッ ワンッ

「お、おい…こら！ ゴロー！」

男の人に向かい、いきなり吠え出したゴローを押さえ付ける。
男の人はビックリして変な顔になったが、すぐ気を取り直したように
キリリとした表情に戻った。

「その犬、ゴローっていうんだ？」

「え、ええ…まあ。」

未だソワソワした様子のゴローに注意を払いつつ、男の人に答える。

「奇遇だね。 僕とおんなじ名前だ。」

「えっ？ あ…そ、そうなんっすか。」

一瞬、『？』マークが頭の中に浮かんだが。
考えてみりゃゴローなんて名前の人は、日本にいくらでもいそうだ。

「それじゃあね。」

「あっ…はい。 さよならです。」

男の人は、さわやかな笑みを残して去っていく。
その姿が遠ざかるほどに、ゴローは落ち着きを取り戻していくよう
だった。

< 第37話 > 【歪曲】

——Side 杉山榛名——

「ちょっといいかい？ 杉山くん。」

「……。」

僕の名を呼ぶ声。

それを発したのは、同じクラスの一人の女子生徒だった。
名前は——何ていったかな？

「そのドア出て、すぐの廊下。 女の子が待ってるよ。」

「……んっ？」

クイツと親指で教室のドアの一つを指し示す彼女。
開け放しとなってるそのドアの先には、確かに誰かの人影が見える。

「モテる男はツライね。 ……アヒヤヒヤ。」

やけに不気味な笑い声を残し、彼女は僕の傍を離れていく。

「……。」

一限目が始まるまで、もうあまり時間は残っていない。
僕は駆け足で、待ち人の元へと向かうことにした。

「おつす。 ナイストウミーチュ〜。」

廊下で待っていたのは、なんだかギャルっぽい雰囲気のある女子生徒。
徒。

髪がなんだか…巻いてる。 クルクルしてる。

そっうえば『ギャルは何でも巻きたがる』と、誰かが言っていた気がする。

「あたし、猪原霞^{いはらかすみ}ってんだけどオ。 ヨロシク。」
髪を弄くりながら、女子生徒は僕に話しかけてきた。

「僕は…杉山榛名といいます。 はじめまして。」

ここまでギャルっぽい雰囲気の人と言葉を交わすのは、
もしかすると初めてのこともかもしれない。

僕は多少なりか、戸惑いと好奇心が芽生えるのを感じていた。

「あんた、アレでしょ？ ミステリーハント部の人でしょ？」

「…はい。 そうですけど。」

「実はあたし、そのミスハン部に手紙書いちゃったりしたんだけどオ。」

ミスハン…。

ミステリーハンターだから、略するとそっうなるのか。

そっうえば『ギャルは何でも略したがる』とも、誰かが言っていた気がする。

「んで、一昨日に事件勃発？ ってなったじゃん。」

だから事の発端は、あたしにありけりーってな気分？」

「……。」

一昨日の事件。

恐らくは、あの夜の図書室の件だろう。

この時点で僕は、あることに気付いた。

そういえば、あの手紙の文面——アレも物凄くギャルっぽい雰囲気があった。

彼女と限りなく似た雰囲気のものだ。

「だからあたし、こうして一言詫びに来ましたーってワケ。あんたには、特に迷惑かけちゃったみたいだし。」

「…なるほど。」

事情を把握した僕は、心の中で頷きながら会話を続ける。

「わざわざ、ありがとうございます。」

「礼を言われる筋合いはないっていうかアー。あたし、そこらへんのケジメはしっかりつけますーみたいな？」

うーん…。

意外に、しっかりした人なんだな。

いや…別に、ギャルだからしっかりしてないなんて先入観を持つちゃいけないよね。

「つーかあんた、背高過ぎ。近くで見ると、マジ迫力あるんだけど。」

「…そうですか。」

彼らがこの学校へ侵入した目的。

それは無論、現段階ではつきりとした答えは出ないのだが…。
状況証拠的には、かなり気になる情報があった。

それは――図書室の書庫が酷く荒らされていたこと。

図書室自体には、あの闘いによる痕跡以外、特に荒らされた気配もない。

もちろん、校舎内にある図書室以外の部屋についても同じこと。

「……。」

彼らの目的が、書庫にあったことはほぼ間違いない。

問題は、そこで何をしたか…になるわけだが。

「これは推測に過ぎませんが。」

カーテンの隙間から漏れる光に照らされ、部長さんの眼鏡が光る。

「もしかすると、例の本を奪っていったのかもしれませんがね。」

「……。」

確かに、推測に過ぎない。

しかし僕としても、そんな推測を挙げずにはいられない心境だ。

「何はともあれ、この件はひとまず保留にしておきましょう。」

「えっ…?」

「調査を行う内、また同じような事態に陥る可能性もありますからね。」

そうならば、私の責任問題です。」

言葉を言い終わると、部長さんは自分の席へと座る。
そして引き出しを開け、何かゴソゴソと探し始めてしまった。

「……………」

何とはなしに、秀輝くんと顔を見合わせる。

彼は、特にこれといった反応は見せず——…えっ？

目に映る光景には、明らかな異様さがあった。

秀輝くんの体が…全身が……周囲の景色と同化している。
簡単に言えば——透明になっている。

視界が、グニヤリと歪み始めた。

…真っ白に染まっていく。

どうしようかと悩む暇もなく。

…消えていく。

「何を呆けてるのですか？ 杉山くん。」

部長さんの声に、ハッと意識を取り戻す。

「……………」

声の方を振り向けば、怪訝そうな顔をした部長さん。

そして、その向こうには…本棚の側で立ち読みをしている秀輝くんの姿。

「さあ、この手紙を読みなさい。」

「あっ…はい。」

さつきのは、一体何だったのだろう？

違和感を覚えつつも、僕はとりあえず部長さんに渡された
折り畳まれている紙を開いてみた。

< 吾妻湖あがつまこのほとりに、古い洋館があるのをご存じでしょうか？ >

< 実は、私の友達の友達の兄の弟の母親の父親のお知り合いの人が
その洋館に入ったきり、行方不明となっているらしいのです。 >

< そして、その友達の友達の姉の妹の子分のペットのメイドさん

… >

< ああ！ 私は一体、何を書いているのでしょうか！？ >

< もしや私にも、洋館の呪いが！？ ああ神様、お助け下さい！ >

「——そういうわけです。」

手紙を読み終わった瞬間、部長さんが口を開く。

「…どういわけです？」

彼女の言葉に対し、僕は間髪入れず言い返した。

<第38話> 【小さな反抗期】

——Side ???——

「この質問はイエス。 これも…まあイエスか。 いや——待てよ？」

河川敷に座り、食い入るように一冊の本を読む少女。
本を読みながらブツブツと何かを呟き続ける彼女の傍らには、
もう一人、三つ編みの少女がいた。

「ん…っ。 う…っ。 おア…っ。」

「……。」

唸り声を発しつつ、本を握る手に力が入っていく少女。
それを少し呆れるように、そして心配そうに三つ編みの少女は見て
いる。

「ダメだーっ!!」

「わぎゃッ!？」

大きな叫び声と共に、いきなりバツと立ち上がる少女。
そして何を思ったのか、さっきまで読んでいた本を

真つ二つに引き裂いてしまったのだ。

「ちょっと…何してくれちゃってんの!? スズ!」

「あーもう。全然ダメ!」

三つ編みの少女が怒声をぶつけるが、彼女は聞く耳を持たない。悲しげな視線を、流れる川の水面にやるだけだった。

ちなみに本のタイトルは、『15パターンに分けて考える男の落とし方』。

男を15のタイプ別に分類し、それぞれのタイプに適したアプローチ方法などが色々と書いてあるもののようにだ。

「先輩つてば、どのタイプにも当てはまらないんだもん。チツクシヨ…宇宙人か? あの人は。」

想いを寄せる人の顔が、水面に映る。

勿論その映像は、彼女の脳内で作られたものだが。

「だからって、何も破くこたアないでしょ…。」

「うつさい! あんたなんか、そんな本は必要ないのよ!」

「逆ギレかよツ!?!」

「あんたなんか一生独身で、人里離れた山奥に住むようになって、畳の上で一人寂しく死んじやう運命なのよ!」

「そんな運命、イヤじゃ〜ツ!」

……

「っていうかこの本、あたしのじゃなくて姉貴のなんだけど…。」

「ごめんちゃい!」

二つに引き裂かれた本を手にして、どうしようかと悩む三つ編みの少女。

そんな彼女に対し、鈴音は悪戯っぽい声で謝罪した。

「それはそうと、問題は先輩のことだよ。」

「…こっちは、問題じゃないのか？」

「どうしたもんかなあ…。とりあえず、やっぱもうちょっと情報が欲しいとこなんだけど。」

またもや自分の言葉をスルーされてしまったため、

三つ編みの少女は肩を落とし、大きく溜め息をついた。

そんな彼女に目くれることもなく、鈴音は今後の計画を練り始めていた。

「そんなの、由奈っちからいくらでも聞き出せんじゃん。」

疲れた目で鈴音を見ると、三つ編みの少女がボソリと言い放つ。

「いやあ…うん。それがまあ、そう簡単にはいなくてね。」

その言葉を受けた鈴音は、リボンを触りながら複雑そうな顔をしていた。

——Side—— 杉山榛名——

時計に目をやれば、既に六時を回った頃。

僕はお使いを済ませ、商店街からの家路を急ぐ真つ最中。

その途中で差し掛かった公園にて、僕は気になるものを発見した。

「……………」

ブランコに座り、ブランブラン揺れている一人の女の子。表情や雰囲気からして、とてつもなく寂しげに見える。

「どうしたの？ 保奈美ちゃん。」

「……………」

僕の呼びかけに、彼女はゆっくりと首をこちらに向ける。

「もう、日も暮れちゃってるんだけど。」

「暮れちゃってるね。」

彼女は視線を僕から外し、素っ気なく相槌を打つ。

…っん。

どうにも、何か只ならぬ雰囲気を感じる。

彼女の心情に、何か暗い影があるような気がしてならない。

「何かあったの？」

「……………」

まあ生きている限り、何も無いという方がおかしいのだけれど。

……

「話してみてよ。」

「……………」

「話してくれたら、何でもしてあげるから。」

思わず、勢いで口から飛び出ってしまった言葉。

その言葉を聞いた瞬間、彼女は明らかに様子を一变させた。ハッとしたように顔を上げ、目がカッと見開いている。

……

「そんなら、話してあげる。」

「…うん。」

——しまった。

あんな軽はずみな言葉を使うほど、重要な場面だったのだろうか。
いや、でも相手は所詮、小学生だし。

…いや、小学生だからこそ、逆に怖い気も。

「だからこうして、ここで時間潰して…。でもって、

門限ギリギリに帰ってやるわけよ。」

「そうすることで、『あれ、この子何かあったんじゃないの?』
ってな風に思わせようという魂胆なの。」

「…なるほど。」

彼女はどうか、自分のご機嫌斜めな状態を
さり気ない形で、家の人に伝えたいらしい。

家の人というか…特にお姉ちゃんに。

「いわゆる、プチ反抗期かな。」

「……。」

初めて聞く単語ではあるが——意味は恐らく、
小さな反抗期ってことだろう。

しかし、門限はしっかり守ろうというところが…

なんというか、まだワルになりきれてない感じがする。

「それにしても…どう思う?」

「日和のこと?」

「違う。ニャンニャンのことだよ。」

ニャンニャン。

日和の家にいる、可愛らしい三毛猫。

保奈美ちゃんの話によれば、なんと…その猫が、喋ったらしい。

「本当に喋ったのかなあ?」

闇に染まりつつある上空を見上げながら、彼女が呟く。

その表情は、なんだか大人びた雰囲気。

「僕にはわかんないけど。でも――

言いかけて、僕は口をつぐむ。

あまり、誰かれ構わずに喋っていい話ではないからだ。

……

「でも…僕もね。最近をよく、不思議なことが起こるんだ。」

少し悩んだが、僕は語ってみることにした。

ま、保奈美ちゃんなら真剣に聞いてくれるだろうし…。

仲間意識を抱いてくれれば、彼女の気持ちも少し楽になるかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0428m/>

FILESTARD ~現代編~

2011年11月12日06時27分発行